では有りませんよ。』

『此處に居る者は、何人もそんな者はない』と、再び口々に叫んだ。『そりやァ無用の質問だ。何人でも同じ返辭をするよ。此處に密告者なぞは居ない。』

『あの人は何爲に出て行くのです？』と、不意に女學生が叫んだ。

『あれはシャトーフだ。貴方は何爲に出て行くのです？』と、此家の女主人も續いて叫んだ。

シャトーフは實際立上つて居た。彼は手に帽子を持つてヴェルホーヱンスキイを見遣つた。明かに何か彼に言はうとして、躊躇して居るものらしい。彼の顏は眞蒼に成つて、何やら憤つて居るやうに見えた。が、彼は自ら抑制した。一言も物を言はないで、默つて扉口の方へ出て行つた。

『シャトーフ、そんな事を爲ると、君の利益に成らないよ』と、ヴェルホーヱンスキイは背後から謎のやうに呟嘲つた。

『だが、君の利益には成るだらう、君は探偵で破落戸だからね！』

再び叫喚と喧囂が續いた。

『試練に會ふとあんなものだよ』と、一人がそれに應じた。

『却々〳〵役に立つものだね』と、他の一人が訊いた。

『役に立つても後の祭ぢやないかね』と、三人目の男が訊いた。

『何人があの男を招待したのだ？何人があの男を連れて來たのだ？あの男は何者だ？シャトーフとは何者だ？あの男は密告するだらうか。それとも爲ないだらうか。』こんな質問が驟雨のやうに起つた。

『あの男が密告者だとすれば、終ひ迄容子を繕つて居る筈だよ。あんな惡口を言つたり、出て行つたりは爲ないさ』と、或者が注意した。

『あら、スタフローギンも出て行くんだよ。左樣だ、あの方も未だあの質問に返辭をしなかつたのだわ』と、女學生が叫んだ。

スタフローギンは實際立上つて居た。と、同時に食卓の他の外れでもキーリロフが立上つた。

『もし、スタフローギンさん』と、ヴィルギンスキイ夫人が彼に向つて鋭く喚び掛けた。『私どもは皆あの質問に答へましたのに、貴方は默つて行つて仕舞はうと爲さるのですか。』

『貴方方は大分お氣に召したやうだが、私はあんな質問に答へる必要がない』と、スタフローギンは呟いた。

『だが、吾々は皆身を危くした、貴方は爲ないぢやないか』と、一時に數人の聲が叫んだ。

『貴方方が身を危くしようとしなからうと、私に關係はないのだ』と、スタフローギンは笑つた。が、彼の眼は閃いて居た。

『なに、關係がない？關係がない？』と、口々に叫んだ。

多くの人が皆椅子から立上つた。

『諸君、一寸諸君』と、跛の紳士が叫んだ。『ヴェルホーヱンスキイ君自身未だあの質問に答へませんよ。彼は只それを訊いたばかりだ。』

此注意は非常な結果を生じた。總ての人は互に顏を見合せた。スタフローギンは大聲を出して笑ひながら出て行つた。キーリロフもそれに續いた。ヴェルホーヱンスキイは二人の後から廊下へ駈出した。

『君は何を爲るのだ？』と、彼はスタフローギンの手を摑んで、全身の力を罩めながら囁いた。スタフローギンは默つて其手を振拂つた。

『直にキーリロフの宿へ行つて居て呉れたまへ、僕は後から行くよ……何うしても君に會ふ必要が僕に有るんだからね！』

『僕にそんな必要はないよ』と、スタフローギンは相手の言葉を遮ぎつた。

『スタフローギンは僕の宿へ來て居るよ』と、キーリロフが最後に言つた。『スタフローギン、君にも必要があるよ。そりやア僕が宿へ着いてから見せるよ。』

二人は出て行つた。

第七章　イヴァン太子

一

二人は行つて仕舞つた。ピヨートル・ステパーノヴィチは會場を整理しようとして、再び取つて返さうとした。が、恐らくはそんな事に係つらふ價値がないと思つたので有らう、何も彼も打捨つて置いて、二分間後には飛ぶやうに二人の後を追掛けた。途中で、不圖フィリポフの家に行く捷徑を想出した。で、膝の上迄泥水を揚げながら、遮二無二其道を走つた。そして、スタフローギンとキーリロフが門を這入らうとして居る瞬間には、最う其處へ着いて居た。

『君は最う遣つて來たのか』と、キーリロフが言つた。『宜しい。ぢや、お這入りなさい。』

『君は獨りで住んで居ると言つてたが、如何したのだ？』と、スタフローギンは廊下に沸つて居る湯沸器の傍を通りながら訊いた。

『いや、僕が誰と一緒に居るか、直に解るよ』と、キーリロフは呟いた。『お這入りなさい。』

『三人が連立つて這入るや否や、ヴェルホーヴェンスキイは直に衣嚢からレムブケの許から持ち歸つた無名の手紙を取出して、それをスタフローギンの前に置いた。三人はそれから漸と座に着いた。スタフローギンは默つて其手紙を讀み下した。

『で』と、彼は訊いた。

『あの無賴漢は屹度書いた通りに爲るよ』と、ヴェルホーヴンスキイは說明した。『處で、あの男は君の手の中に有るのだから、如何片附けて可いか言つて貰ひたいものだね。僕は斷言するがね、あの男は明日にもレムブケの許へ行くよ。』

『うむ、行かせて置いたら可いぢやないか。』

『行かせて置け！未だそれを停めることが出來る間にだぜ！』

『君は思ひ違ひをして居る。あの男は最う僕に凭つ懸つちや居ない。加之、僕は實際如何でも可いんだからね。彼奴は何の道僕を脅かすことは出來ないよ。只君を脅かすばかりだ。』

『君もだよ。』

『僕は左樣は思はない。』

『だが、他に君を許しちや置かれない人間も有るだらう、そりやァ確かに君にも解つてる筈だ。處で、スタフローギン、そんな事は只言葉の上の遊戯に過ぎないがね、君は眞逆金子を惜しむんぢやなからう？』

『何うして、それに金子が要るかね。』

『そりやァ要るよ。二千か、少くとも千五百留布はね。明日か、今日中にそれだけの金子を僕に渡したまへ、明日の晩には、僕が君の爲に彼奴を彼得斯堡へ送つて遣るよ。彼奴も又それを望んで居るんだね。で、君さへ好けりや、マーリャ・チモフェーヴナも一緒に伴れて行かせるよ。えゝ、如何だい？』

彼は如何やら毎もと容子が違つて居た。好く考へても見ずに、不用心に、べちやくちやと饒舌り立てた。スタフローギンは驚いて相手の顏を見守つて居た。

『僕がマーリャ・チモフェーヴナを遠ざける理由は少しもないよ。』

『では、遠ざけたいとも思はないのだね？』と、ピョートル・ステパーノヰーチは微笑しながら訊いた。

『まアそんな事も思はないね。』

『要するに、金子は出すのか出さないのか』と、彼は苛々しながら、殆ど命令するやうな聲の調子で叫んだ。スタフローギンは眞面目に相手の顏を見詰めた。

『金子は出さないよ。』

『おい、スタフローギン！君は或事を知つて居る、又既に或事を行ひもした！君は――亂暴な生活を送つて來たのだよ。』

彼の顏は引釣つて、唇の隅がぶる〳〵と顫えた。そして、不意に可笑しくもないのにけら〳〵と笑ひ出した。

『だが、君はあの土地に對する金子を親爺から受取つたらう』と、スタフローギンは徐かに言出した。『僕の母がステパーン・トラフィモーヰーチのために六乃至八千留布を君に送つた筈だ。で、君は自分の金子で千五百留布位拂へさうなものぢやないか、僕も他人のために金子を拂ふ氣はないよ。隨分是迄も拂つて來たからね。僕も大分困つて居るんだよ。』彼は自分で自分の言葉に微笑み漏らした。

『おゝ、君は又戯談を言ふのだ！』

スタフローギンは椅子から立上つた。ヴェルホーヴンスキイも卽座に飛び上つて、相手の道を塞がうとでもするやうに、機械的に扉口を背にして突立つた。スタフローギンは手眞似で相手を押除けるやうにして、既に出て行かうとしたが、不意に又立停つた。

『僕はシャトーフを君の爲るが儘には爲せて置かないよ』と、彼は言つた。ピョートル・ステパーノヰーチはぎくりとして飛び上つた。二人は互に顔を見合せた。

『僕は宵に何故君がシャトーフの血を必要と爲るかを君に言つて置いた』と、スタフローギンは火花の散るやうな眼をしながら言つた。『君は其血で以て五人の徒黨を一緒に繋いで置かうと云ふんだ。今も君は一種特別な手段でシャトーフを追出したよ。實際、君はあの男が密告しないなぞと約束はしない、君に嘘を吐くのは卑劣だと考へて居るのを十分知り抜いて居るからね。だが、それはそれとして、一體君は僕を如何しようと言ふのだ？　えゝ、如何する積りだい？　僕が外國で君に逢つてからといふもの始終僕に、へばり着いて離れない。君が僕に與へた辯解なぞは狂氣染みて居てお話に成らないよ。一方では又僕に迫つて、レビャードキンに千五百留布の金子を渡させようとする――畢竟、左樣してフェッカに彼奴を殺させる機會を與へようとするんだね。僕が妻の死を望んで居ると君が考へて居ることも、僕は知つて居るよ。君は其犯罪に依つて僕の手を縛つて、僕を君の藥籠中の物と爲ようと思つて居るのだ。えゝ、左樣ぢやないのか。そんな事をして、何が君のために成るのだい？　君は僕を如何しようと言ふのだ？　まア眼を開いて、好く僕の顔を見ろ！　一體、僕は君に使はれるやうな人間かい。それが解つたら、打捨つて置いて呉れよ。』

『フェッカが自分で君に會ひに行つたのか』と、ヴェルホーヱンスキイは息を切らしながら訊いた。

『あゝ、彼奴は來たよ。彼奴の言ひ値も矢張千五百留布だ……だが、彼奴は自分でそれを言ふだらうよ。彼奴は其處に立つて居る』と、スタフローギンは扉口の方へ手を伸ばした。

ピョートル・ステパーノヰーチは素疾く振返つた。閾の上に、一人の男の姿が暗闇から浮き出して來た――フェッカだ。彼は短い山羊の皮の上衣を着て、自宅にでも居るやうに帽子も被つて居ない。彼は其處に突立つたまゝ、白い齒を出して、にやゝ〳〵と笑つた。白眼の黄色と成つた黑い眼は、三人の紳士を見守りながら、用心深く室の中を、駈け廻つた。何やら解せないものが有るやうにも見えた。明かにキーリロフが目眴せして連れ出したものらしい。彼は不審さうな眼を後者に向けた。彼は閾の上に突立つたまゝ室の中へ這入らうとはしなかつた。

『君は何だね、僕等の取引を偷聽きさせるために、此男を此處へ連れて來たのだね。それとも、目の當り僕等の手に有る金子を見させるためかい。左樣ぢやないのか』と、スタフローギンは訊いた。そして、返辭も待たずにずんずん家の外へ出て行つた。ヴェルホーヱンスキイは殆ど狂人のやうに成つて、門の邊りで彼に追ひ着いた。

『待つて呉れ！　一歩も出ちや成らない！』と、彼は相手の腕を摑みながら叫んだ。スタフローギンは其腕を引離さうとしたが、旨く行かなかつた。彼は憤怒に驅られて、殘つた左の手でヴェルホーヱンスキイの髪の毛を摑みながら、力任せに相手を地面へ投げ附けたまゝ、門の外へ出て行つた。が、彼が三十歩も行かない間に、ヴェルホーヱンスキイは再び追ひ着いた。

『仲直りをして呉れたまへ。えゝ、仲直りをして呉れたまへ』と、彼は痙攣るやうな聲音で囁いた。

スタフローギンは肩を聳かした。が、何にも言はないで顔を背向けた。

『お聽きよ。僕は明日君の許へリザベータ・ニコラーエヴナを伴れて行くよ。えゝ、如何だい　可厭かい。何故君は返辭をしないのだ。如何したら可いか言つて呉れたまへ。僕は何でも爲るよ。ねえ、シャトーフを君に渡したら可いのか。えゝ、如何だい？』

『ぢや、君があの男を殺さうと思つたのは眞實だね？』と、スタフローギンは叫んだ。

『だが、君はシャトーフのやうな男を如何する積りだい？あの男が君に何の關係が有るのだい？』と、ピョートル・ステパーノヰーチは喘ぎ〳〵、早口に饒舌りながら續けた。彼は狂人のやうに成つて居た。そして、スタフローギンの臂を碇かり捕まへながら走り續けた。恐らく自分が何を爲て居るかも知らないらしい。『ねえ、僕は君にあの男を引渡すよ。だから仲直りをして呉れたまへ。君の價値は非常に大きいのだからね、だが……兎に角仲直りをして呉れたまへ！』

スタフローギンは到頭振返つて彼を見遣つた。そして、驚いて仕舞つた。眼も、聲も何時も見るやうなものでない。又今し方室の中で見たやうなものでもない。目の前に現はれたのは殆ど別人の顏で有つた。聲の調子も全然違つて居た。ヴェルホーヴェンスキイは切に求めた、懇願した。彼は氣の狂つた人でなければ、『此世で一番大切な物を奪はれようとする、若しくは既に奪はれた人のやうに見えた。

『一體君は如何したのだ？』と、スタフローギンは叫んだ、相手は返辭をしなかつた。只同じく訴へるやうな、而も飽迄屈しないやうな眼附で彼を見詰めながら、後から隨いて走つた。

『ねえ、仲直りをしやうぢやないか』と、彼は最一度囁いた。僕はフェッカと同じやうに、長靴の中に小刀を入れて居るんだよ。けれども、君とは仲直りがしたいのだ！』

『だが、君は僕を如何しようと言ふのだ、馬鹿な？』と、スタフローギンは怒りと愕きとに顫えながら叫んだ。『何か其處に祕密が有るのかい、僕は君に取つて護符のやうなものかね。』

『だがねえ、僕等は革命を起さうとして居るんだよ』と、相手は口早に殆ど熱に浮かされたやうに呟いた。『君は僕等が革命を起さうとして居るのを信じないのか。僕等は有ゆるものが根柢から覆へされるやうな騒動を起さうとして居るんだよ。カルマーヂノフが何にも捕まへて居るものがないと言つたのは正當だ、彼奴も悧巧な奴だからね。露西亞中に最うこんな集團が十個も有れば――大丈夫成功するよ。』

『あんな馬鹿者どもの寄合ひがか』と、スタフローギンは可厭〳〵ながら口を開いた。

『ねえ、スタフローギン、悧巧ぢや駄目だよ。君自身左樣悧巧ぢや駄目だよ！君は又決して他人を悧巧にしたいと願はねば成らぬ程悧巧ぢやないんだよ。君は只怖れて居るのだ、信仰を有たないのだ。君は僕等が斯んな大袈裟な仕事を始めるのを怖れて居るのだ、又何うして彼奴等が馬鹿なんだい？彼奴等もそれ程馬鹿ぢやないよ？近頃自分自身の理性を有つた人間なぞは一人も居ない。近頃は個性を具へた人間といふものは恐ろしく少ないのだよ。ヴィルギンスキイは純潔な男だ、僕や君よりもずつと純潔な男だよ。だが、あの男のことなぞは如何でも可いのだ。リーブティンは惡黨だよ。だが、僕はあの男の弱點を知つて居る。弱點を有しない惡黨といふはないものだよ……リャムジンだけはそれを有つて居ないがね、彼奴は又僕の掌中に有るんだよ。それから他に二三の集團だがね、僕は今に金子も通行券も手に入れる積りだ。少くとも、それだけは最う準備が出來て居るんだよ。只それだけだとしても如何だい？で、安全な隱れ家だがね、それは各自に所好な所を搜したら可いぢやないか。彼奴等は一方の集團から離れるかも知れない。が、又何にも知らずに次の集團へくつ着いて居るのさ。僕等は世間を沸騰させることが出來るよ……君だつて、實際僕等二人で足りないとは思はないだらう？』

『ジガーロフと遣るが可いや、僕は打捨つて置いて呉れ……』

『ジガーロフは天才だよ。あの男はフウリエーのやうな天才で、フウリエーよりも大膽な、勇敢な男だが知つてますか、僕はあの男に目を着けて居るよ。あの男は「均齊策」を發見したよ。』

『此男は熱に浮かされて居るのぢやないか、何か奇態な事が此男に起つたんだよ』と、スタフローギンは再び相手を見造りながら考へた。二人は足も停めずに歩いて行つた。

『あの男はあの草稿の中に豪い事を書いて居るんだよ』と、ヴェルホーヴンスキイは饒舌り續けた。あの男は探偵の組織を暗示して居る。あの男の說に據ると、結社の會員は皆互に他を探偵してそれを密告する義務が有るのだ。個々の會員が全體に屬すると共に、全體は又個々の會員に屬する、總てが奴隷で有つて、奴隷たることに於ては皆均一なんだね。極端な場合には、皆誹謗もすれば虐殺もする。が、一番大切な事は其の均一に有るんだね。第一には、教育と、科學と、能才の水平を低くするのだ。教育や科學の水平が高けりや、只大才を有つて生れた人間だけが達し得られることに成る、そんな大才は最う必要がないのだ、大才を有つて生れた人間は常に權力を攫んで、專制君主と成る。又、大才が專制君主に成らずには居られないからね。彼等は常に善よりはより多く害を爲したものだ。彼等は追放するか、又は死刑に處すべきものだよ。シセロは舌を拔かれ、コペルニクスは眼を剔抉かれ、シェクスピアは石で擲ち殺されるが可いのだ――斯ういふのがジガーロフィズムだよ。奴隷は均一でなければ成らぬ。專制主義なくしては、嘗て自由も均一も有り得ないのだ。が、獸の群には均一がなければ成らぬ。これがジガーロフィズムなんだよ、はゝゝゝ！君にはこれが可訝しく見えるかね。僕はジガーロフィズムに贊成だよ。』

スタフローギンは足を疾めて出來るだけ早く自宅へ歸らうとした。『此男が醉拂つて居るとすれは、何處で飲んだものだらう？』と、不圖考へて見た。『あのブランディか知ら？』

『ねえ、スタフローギン君。山を均らさうとするのは立派な考へだよ、決して笑ひ事ぢやない。僕はジガーロフに贊成するよ。教育が何だ。僕等は最う科學なんざ十分だ！科學なんざなくつても僕等は一千年位遣つて行かれるだけの材料を有つて居るよ。只服從といふことが必要だ。此世に缺けて居るのは服從ばかりだよ。教育に對する渴望なぞは貴族的渴望だ。君が家庭だの愛だのを有するやうに成れば、其瞬間から財產に對する慾望を生ずるのだ、僕等はそんな慾望を滅絕して仕舞ふんだよ。僕等は醉拂ひと誹謗と、探偵とを利用するんだよ、前代未聞の腐敗を利用するんだよ。僕等は有らゆる天才を搖籃の間に殺して仕舞ふんだよ。畢竟萬物を一の命名親に歸するのだ！完全な均一がそれだね！「吾々は一つの職業を學んだ、吾々は正直な人間である。吾々は此上何物をも要しない」といふのが、最近英吉利の勞働者に依つて與へられた返答ださうだよ。只必要なものが必要だ!!これが今後全世界の格言に成るんだよ!!!併し戰鬪は又必要だね。其點が吾々指揮官の心得なくちや成らぬ處だよ。何と成れば奴隷は指揮官を必要とするからね。絕對の服從……絕對の個性の缺乏……併し三十年に一度は戰鬪を許さなくちや成らぬと、ジガーロフも言ふんだよ、彼等は皆不意に立つて互に或點迄相反噬するんだよ、單にそりや退屈を避けるためだがね。退屈といふのは貴族的感覺だよ。ジガーロフィズムの信奉者には慾望といふものは許さない、慾望や苦痛は吾々のものだよ。が、奴隷に對してはジガーロフィズムが有る。』

『君は自分だけ取除けにして置くんだね』と、スタフローギンは再び呟いた。

『君もだよ。で、僕は此世を羅馬法王に渡して仕舞はうかとも考へたのだがね。法王をして裸足で現れて、『見よ、俺を如何するのだ！』と言ひながら愚民の前に立たしめよ。彼等は皆法王の後に隨いて走るよ。あゝ軍隊もだね。法王が先頭に立つて、僕等が其周圍を取卷き、僕等の背後には――ジガーロフィズムが隨いて來るのだ。此處で一つ心配しなけりや成らぬのは、萬國勞働協會が法王と一致するか如何かと云ふことだがね。まアそれも如何にか成るよ。お老爺さんに至つては二つ返辭で承知するさ。其他に奴さんの出やうはないのだからね。まア僕の言葉を記

憶えて置いて呉れたまへ、はゝ！馬鹿げて居るかい。馬鹿げて居るか居ないか、言つてお呉れよ。』

『最う澤山だ！』と、スタフローギンは當惑しながら呟いた。

『澤山だ！ねえ、お聽きよ。僕は法王も打捨つて仕舞つたよ。ジガーロフィズムなぞは如何でも可い、ジガーロフィズムが何だ、法王が何だ！吾々は最つと日々の糧を必要とする。ジガーロフィズムなぞは貴重な寶石に過ぎないからね。あれは理想だよ、理想は將來のことだよ。ジガーロフは寶石商で、有らゆる博愛家の如く馬鹿で有る。吾々は最つと粗雜な仕事を要求する。然るにジガーロフは粗雜な、重厚な仕事を輕蔑する。ねえ――法王は西歐のために有る、君は吾々のために――吾々のために君が有るんだよ。』

『僕のことは構つて呉れるな、此醉漢め！』と、スタフローギンは呟いた。そして、足を疾めた。

『スタフローギン、君は美だよ』と、ピョートルステパーノヰーチは蕩然として叫んだ。『君は自分が美だといふことを知つてるかい、君に一番拿とい處は、時として君がそれを知らないで居るらしいことだね。あゝ、僕は君を研究した　僕は始終内密で君を見て居た、君には未だ多くの單純と誠實とが有る。君はそれを知つて居るかい。未だ君に有るんだよ、有るんだよ。君は其單純のために正直に苦しんで居るのだ。僕は美を愛する！僕は虛無主義者だ。が、僕は美を愛するんだよ、虛無主義者は美を愛することが出來ないかい。彼等の嫌ふのは只偶像だよ、併し僕は其偶像を愛するのだ。君は僕の偶像だよ。君は何人にも害を加へない、然るに凡ての人が君を憎む。君は凡ての人を自分と同等として遇する、然るに凡ての人は皆君を怖れて居る。まアそれも好いよ。何人も君の肩を敲き得るものはないだらうからね。實際君は恐ろしい生れながらの貴族だ。貴族が民主主義者の間に這入つて行けば、向ふ處敵なしだよ。生命を犧牲にするなぞといふことは、他人のでも君自身のでも、君には何でもないのだ。實際、君は理想的に出來て居る。僕が要求するのも君のやうな人物なんだよ。僕は君を措いて何人をも知らない。君は指導者だ、君は太陽だ。僕は只君の蛆虫に過ぎない。』

彼は不意に相手の手に接吻した。ぞつとするやうな戰慄がスタフローギンの脊髓を傳つて走つた。彼はそつと手を後ろへ引いた。二人は默つて立つて居た。

『狂人！』と、スタフローギンは囁いた。

『成程、僕は狂人染みて居るかも知れない、僕は狂人染みて居るかも知れない』と、ピョートル・ステパーノヰーチは口早に饒舌りながら同意した。『だが、僕は第一歩を考へ出したのだよ。ジガーロフなぞは決してそれを考へ出すことは有るまい。世にジガーロフは幾許でも有る。だが、只一人が、露西亞で只一人が第一歩を編み出して、如何にそれに處すべきかを知つて居るんだよ。そして、僕が其人だ！何故君は僕の顏を見るのだ？僕は君を必要とするよ、君を。君なしぢや僕は何でもないのだ。君なしぢや僕は蠅だ。蠅取罎の中へ押詰められた思想だ。亞米利加のないコロムバスだ。』

スタフローギンは立停つて、凝乎と相手の狂人染みた眼を見込んだ。

『ねえ君、第一番に僕等は暴動を起すんだよ』と、ヴェルホーヴンスキイは絶えずスタフローギンの左の袖を掴みながら、死物狂ひに續けた。『僕は最う君に話して置いた。僕等は百姓の中へ突入して行くんだよ。僕等は既に怖ろしい勢力を有つて居るが知らないか。僕等の仲間は只人殺しや放火をしたり、在來の手段で拳銃を打つたり、上官の肩に嚙み着いたりする人間ばかりで出來て居るのぢやないよ。彼奴等は只邪魔に成るばかりだ。規律のない奴は、僕は決して受け容れないよ、勿論、僕は破落戸で決して社會主義者ぢやない！ねえ君、僕は彼奴等を皆勘定し

て見た。生徒と一緒に彼等の神や揺籃を嘲笑ふ教師は僕等の仲間だ。手に掛けられた者よりも手に掛けた者の方が、より多く教育が有る、從つて金子を得るために人殺しを爲ずに居られなかつたらうと云ふので、教育の有る殺人犯罪者を辯護する辯護士は吾々の仲間だ。只思ひ切つた事がして見たいといふので、百姓を殺したりする學校生徒は吾々の仲間だ。有らゆる犯罪者を釋放する陪審官は吾々の仲間だ。自分が進歩した思想を有つて居ないやうに思はれはせぬかと心配して、裁判のたびに顫えて居る檢事は吾々の仲間だ、吾々の仲間だ。其他士官や文學者の仲間にも吾々の仲間は幾許でも有る。只彼等は自分でそれを知らないばかりだ。一方には、學校の生徒や馬鹿者どもの服從心は極端な程度に達して居る。校長どもの如きは膽汁質の外に何物もない。到る處、常規を外れた功名心の勃興を見るではないか……ねえ、僕等は僅かな持合せの思想で何れだけでも黨與を捕まへて來ることが出來るよ。僕が露西亞を去つた時には、犯罪は癲狂なりと云ふリットルの原則が非常な物議を招いて居た。それが歸つて來て見ると如何だ、犯罪は雪に癲狂で有るばかりでない、常識で有る、殆ど義務で有るとまで見られて居る。兎に角華々しい抗議ぢやないか。幾許教育の有る人間でも金子に困つたら殺人罪を犯さないと、何うして決めることが出來やう？が、こんな事は只最初の收穫だよ。露西亞の神樣は既に安慣な火酒の前に遁出した。百姓は醉拂つて居る、阿母さんも醉拂つて居る、子供も醉拂つて居る。教會はがらんどうに成つて、裁判所ぢや、二百の答を打たれるか、それが可厭なら火酒の盞を持つて來い」と云ふやうな聲が聞かれる。あゝ、こんな時代の形勢はだん〳〵發展するばかりだ。只僕等が永く待つて居られないのは、何うも殘念な次第だ。左樣すりや、彼奴等を最つと、へべれけにして仕舞ふことが出來るんだがね。又僕等が一人も賤民を手に入れないのは遺憾の至りだよ。だが、今に手に入れるよ、手に入れるよ。僕等は其方へ進んで居るのだからね……』

『僕等がだん〳〵馬鹿に成つたのも、同樣に殘念の至りだね』と、スタフローギンは呟いた。そして、又歩き出した。

『ねえ君。僕は六歳の子供が醉拂つて居る母親を自宅へ伴れて行くところを見たよ、其間母親は口汚ない言葉で其子を罵つて居るんだね。君は僕がそれを見て悦んだと思ふのかい。僕等が權力を手に入れた時には、恐らくいろんな物を改良するだらうよ……必要と有れば、彼等を四十年間荒野の中へ追放しても可いんだね……だが、今の處一乃至二時代の罪惡は必須だよ。怪物のやうな、陋劣な罪惡で人類を厭ふべき慘酷な、利己的な爬蟲類にして仕舞ふんだね。それが吾々の必要とする處だよ。加ふるに若干の「新しい血」が必要なんだね、畢竟吾々がそれに慣らされるためなんだよ。何故君は笑ふんだい？僕は矛盾しちや居ない積りだ。僕は只博愛家や、ジガーロフイズムに反對して居るので、自分自身に反對して居るのではない！僕は破落戸で決して社會主義者ではない。はゝは！僕は只時日がないのを殘念に思つて居るのだよ。僕はカルマーヂノフに、五月に始めて十月には終る積りだと約束した。それぢや早過ぎるかね。はゝ！君は僕の言ふことが解るかい、スタフローギン？露西亞人は口汚ない言葉を使ふけれど、今日迄譏癖といふものは決してなかつたものだ。ねえ、奴隷でもカルマーヂノフよりは、より多くの自尊心を有つて居るよ。彼等は打たれても始終彼等の神を護つて來たものだ。が、カルマーヂノフはそんな事は爲ないね。』

『で、ヴェルホーヱンスキイ、僕は君がこんな風に話をするのを初めて聽いた。聽いて又驚いても居る』と、スタフローギンは言つた。『それぢや、君は實際社會主義者ではない、畢竟政事的……野心家だと云ふんだね？』

『破落戸だよ、破落戸だよ。君は僕が本來何者で有るかを氣にして居る。今に僕が何者で有るかを君に話すよ。

僕も漸つと此處迄漕ぎ着けた。僕が君の手を接吻したのは無駄ぢやなかつたのだね！だが、あの連中はね、相手方ぢや「棍棒を揮つて自分達の追隨者を毆る」外何にも爲ないのに、僕等は僕等の求めて居るものをちやんと知つて居ると信じて居なくちや不可ないよ。只最つと時日が有つたらね！僕等が時日を有たないのは唯一の遺憾だよ。僕等は破壞を宣言するのだ……何故、何故此の考へがこんなに魅力を有つて居るのだらうね。だが、人間も少許運動をしなくちや不可ないよ。眞個不可ないよ。先づ火を放けて廻るんだね……それからいろんな風說を立てるのだ。有らゆる「薄汚ない集團」が皆役に立つよ。左樣いふ集團の中から僕が何時でも鐵砲を打つことも辭しなけりゃ、左樣いふ仕事を名譽と心得て居るやうな、猛烈な手合を君のために拾ひ上げて來て上げるよ。で、左樣成ればいよ〳〵暴動だ！世界に嘗て見られなかつたやうな大騷動が始まるんだよ……露西亞は暗闇に成つて、此土は舊い神々のために泣くだらうよ……で、其時僕等は前へ連れ出すんだね……誰を？』

『誰を？』

『イヴン太子だね。』

『だーれだ？』

『イヴン太子だよ。君だよ。君だよ。』

スタフローギンは少時考へて居た。

『帝位僭望者だと云ふのか』と、彼は不意に訊いた。そして、深い驚愕の眼で狂人のやうに成つた相手を凝乎と見詰めて居た。『あゝ！ぢや、それが君の隱謀なんだね！』

『僕等は彼が「隱れて居るのだ」と言つて置くんだよ』と、ヴェルホーヴンスキイは本當に醉拂ひでもしたやうに、愛の囁きのやうな低い聲で言つた。『ねえ、君は「彼が隱れて居るのだ」といふ文句の魔力を知らないのか。「だが、彼は出て來るんだよ、彼は出て來るんだよ。」此風說はスコブトシ（露西亞の密敎）のそれよりも最つと好く傳播するよ。彼は生存して居る。が、何人も見た者はないのだ。ねえ、僕等は何んな風說を立てるだらうね！で、肝腎なことは、それが新しい勢力に成るんだよ。僕等は彼奴等が憧れて居るものを利用するのだ。社會主義に何が出來るかい。只舊い勢力を破壞したばかりで、未だ新しい勢力は一つも齎さないぢやないか。だが、此中には一つの力が有るよ。又何んな力だらうね！前代未聞の大勢力だよ。僕等は只世界を持ち上げるに、一つの擬を必要とするのだ。それさへ有りや——何も彼も持ち上がるんだよ。』

『で、君は眞面目に僕を勘定に入れて居るんだね？』と、スタフローギンは皮肉な微笑を泛べながら言つた。

『何故君は笑ふのだ、何故そんな笑ひ方をするのだ？脅かしちや不可ないよ。僕は今子供のやうに成つて居るのだ。そんな笑ひ方をされると、慄えて死んで仕舞ふよ。ねえ君、僕は何人にも君を見せないよ、何人にも、それが肝腎だからね。彼は生存して居る。だが、何人も彼を見た者はないのだ。彼は隱れて居るのだ。だが、十萬人の中の一人位には一寸見せて遣るんだね。左樣すると、「僕等は彼を見た、彼を見て來た」といふやうな風說が國中に擴まるんだよ。サバオスの神樣のイヴン・フィリッポギーチも、戰車に乘つて昇天した時には人間の眼で見られたんだよ。（フラゲラント宗派の中に傳はる傳說に據る。）彼等は彼等自身の眼でそれを見たのだ。だが、君はイヴン・フィリッポギーチのやうな者ぢやない。君は神の如く美で傲慢で有る、君は自分自身のためには何物をも求めない、君の周りには犧牲の圓光が輝いて居る。そして、君は「隱れて居るのだ。」一番肝心なのは此風說だね。君は彼等を征服するんだよ、只一目見たばかりで征服するんだよ。「彼は隱れて居る。」が、やがて新しい眞理を持つて出て來

るんだよ。同時に僕等はソロモンのそれの樣に賢い二三の判決を下すんだね。僕等はいろんな集團を有つて居る、例の五人組だよ――從つて新聞なぞは要らないのさ。で、若し一萬の中から只一つだけ許可してさへ遣れば、衆皆いろんな誓願を持つて押懸けて來るよ。有らゆる教區に於ける有らゆる百姓どもは、何處かに空洞の樹が有つて其中へ誓願書を入れて置くのだといふやうなことを知るやうに成るよ。こんな鹽梅で、陸には「新に正しい法律が來るぞ」といふやうな叫び聲が聞え、海は又海で騒いで、有らゆる喜劇役者の金ピカ衣裝は地に落ちるよ――左樣成つてから、僕等は大きな石の建築を建てることを考へるんだね。第一番目にだぜ！僕等がそれを建てるんだよ、僕等が、僕等だけが！」

『狂人！』と、スタフローギンは呟いた。

『何故、何故君はそれを遣らうと思はないのか。君は何が怖ろしいのだ？君は何物をも怖れない人だから、それだから僕は君を捕まへたんだよ。僕の言ふことが道理に適はないかね。だがねえ、君、僕は今日迄の處亜米利加のないコロンバスなんだよ。亜米利加のないコロンバスが道理に適つて見える譯がないぢやないかね。』

スタフローギンは何とも言はなかつた。其間二人は家に着いて、玄關の前に立停つた。

『ねえ君』と、ヴェルホーヱンスキイは俯向いて相手の耳に囁くやうにした。『僕は金子を貰はないでも、君のためにあれを遣附けるよ。僕は明日マーリヤ・チモフェーヴナを片附けて仕舞ふよ……金子を貰はないでだぜ。それからリザを君の許へ伴れて來るよ。君は明日リザを手に入れようとは思はないかい。』

『此男は本當に狂人かな』と、スタフローギンは微笑しながら一人で驚いた。玄關の戸が開いた。

『スタフローギン、亞米利加は僕等のものかね』と、ヴェルホーヱンスキイは最う一度相手の手を掴みながら言つた。

『何のために？』と、ニコラーイ・フシェヴォロードギーチは眞面目に嚴しく訊いた。

『戯談ぢやないよ。僕も左樣言はれるだらうとは思つて居た！』と、ヴェルホーヱンスキイは憤然として齒噛みをしながら言つた。『君は自己を伴づて居るのだ、此の天邪氣の放蕩者の卑劣な坊ちやん奴！僕は君の言葉を信じない、君は狼のやうな食慾を有つた男だ！……只、君がこれ迄僕に非常な値を拂はせたことは記憶えて置いて呉れ！僕は今と成つて君を手離すことは出來ないよ。君に代るものは此世に一人もないのだ！僕は外國に居た時から既に君を發明したのだ、最初君を一目見た時から發明したのだ。あの時分に僕が隅ッこから君を見張つて居なけりや、こんな事は一つだつて想ひ着きやしなかつたんだよ。』

スタフローギンは返辭もしないで階段を上つて行つた。

『スタフローギン！』と、ヴェルホーヱンスキイは背後から喚び掛けた。『僕は君に一日か……二日與へるよ。えゝ……三日でも可い。だが、三日以上は斷じて出來ない――其時に成つて君は返辭をするんだよ。』

第八章　家宅捜索

一

同時に又、私を驚かせ、ステパーン・トラフィモーギーチの心を打碎いた或事件が起つた。朝の八時前に、ナスターシャはいきせき私の許へ駈けて來て、主人が今『押込み』に這入られたと知らせた。最初は私も何の事か譯が解らなかつた。只押込みに這入つたものは泥棒ではない、お上の役人で有るといふことと、彼等は主人の書類を取上げて行つた、兵隊が其書類を束にして、『手車に載せて曳いて行つた』といふことだけが漸つと解つた。餘り突拍子もない話だ。私は取る物も取り敢へずステパーン・トラフィモーギーチの宅へ駈け着けた。

主人は不思議な狀態の下に有つた。非常に狼狽へて昂奮しても居たが、同時に又何處か得意けにも見えた。室の眞中の食卓の上には湯沸器が沸つて居た、又茶碗が一つ注がれたまゝ、手も觸れずに忘られて居た。ステパーン・トラフィモーギーチは食卓の周りを彷徨きながら、室の隅々を覗いて居た。何を爲て居るか自分でも氣が附かないらしい。彼は平常の赤い毛糸の襯衣を着て居た。が、私を見ると急いで胴衣と上衣を被つた——親しい仲の友達が彼の襯衣一枚で居るのを見ても、嘗てそんな事は爲なかつたので有る。彼は直に私の手を摑んで案内した。

『Enfin un ami!(到頭來て呉れたね!)』と、彼は深い溜息を漏らした。『Cher,(ねえ君)僕は君だけに使を出したのだよ、他には何人も知らない。戸口に鎖を卸して、何人も通さないやうに、ナスターシャに吩咐けて置かうね。勿論、彼奴等だけは仕方がないがね……Vous comprenez?(解つてるだらう?)』

彼は返辭を待つてでも居るやうに、不安らしい眼を私に向けた。勿論、私は急いで彼に訊いた。餘計な註釋に充ちた、連絡のない、途切れ〳〵の彼の言葉から、私は兎に角今朝の七時に、一人の州役人が不意に彼を訪ねて來たといふことを知つた。

『Pardon, j'ai oublié son nom. Il n'est par du pays.(御免なさい、僕は其男の名を忘れた。何うも此國の人ではない、)レムブケと一緒に此町へ遣つて來たものらしいんだね。Quelque chose de bête et d'Allemand dans la physionomie. Il s'appelle Rosenthal.(顔附に何處か鈍間で、獨逸人らしい處が有つたよ。ローゼンタールとか言つて居た。)』

『ブルーメルと言やしませんでしたか。』

『左樣だ、左樣いふ名だつたよ。Vous le connaissez? Quelque chose d'hébété et de très content dans la figure, pourtant très sévère, roide et sérieux.(君はあの男を知つてるのか。顔に何處か睫鈍な、滿足し切つた、それで居て非常に嚴格な、硬ばつた、そして生眞面目な處が有るんだよ。)巡査のやうな、屬官のやうな人間だよ。Je m'y connais.(僕もそりや知つてるさ。)僕は未だ寢て居た。で、如何だい、其男は僕の書物と草稿とを一覽したいと言出したんだよ。Oui, je m'en souviens, il a employé ce mot.(左樣だ、僕は記憶えて居るが、其男は左樣いふ言葉を使つたよ。)それから僕を逮捕はしなかつたが、書物だけ引上げて行つた。Il se tenait à distance.(其男は或間隔を置いて控えて居た。)で、其男が訪問の理由を說明しかけた時は、僕が何するとでも思つて居るやうに見えたよ……enfin il avait l'air de croire que je tomberai sur lui immédiatement et que je commencerai à le battre comme plâtre. Tout ces gens du bas étage sont comme ça(要するに、其男は僕が今にも飛び蒐つて、其男を漆灰の樣に打ちめすだらうとでも思つて居たらしいんだね。生れの惡い人間は皆左樣いふものだよ、)左樣いふ人間が紳士を取扱はなくちや成らない時にはだね。

言ふ迄もないが、僕は直にそれと悟つたよ。Voilà vingt ans que je m'y prépare.（僕は二十年來其覺悟をして居たのだからね。）僕は悉く抽斗を開けて、有らゆる鍵を其男に渡して遣つた。僕が自分で渡して遣つたのだよ、悉く其男に渡したのだよ。J'étais digne et calme.（僕は惡びれないで、平靜にして居た。）書棚の中から其男はヘルチエンの外國版と、「警鐘」の合本と、僕の詩を四つ許り持つて行つた。Enfin tout ça.（要するにそれだけよ。）それから其男は僕の手紙と書類とを持つて行つた、et quelques-unes de mes ébauches historiques, critiques et politiques.（畢竟僕の歴史的、批評的、並びに政治的草稿の一部分だよ。）彼奴等の持つて行つたのは、それだけさ。ナスターシャは兵隊が手車に載せて、膝被けで蔽ひながら引張つて行つたと言ふがね。Oui, c'est cela,（左樣だ、あれだよ、）膝被けだよ。』

全然曖昧のやうなものだ。何人が聞いたとて、これが解るものか。私は再び質問の矢を浴せ掛けた。ブルーメルは一人で來たのか、それとも他の者と一緒にか。何人の名に於て？何の權利に依つて？如何して彼がそんな事を敢てしたのか。何と彼はそれを辯解したのか。

『Il était seul, bien seul.（其男は一人だ、眞個一人だつた。）だが、立闕の間には何人か居たやうだよ。Oui, je m'en souviens; et puis……（左樣だ、僕はそれを記憶えて居るよ。で、それから……）尤も、其他にも何人か居たやうに思ふがね。それから入口には番兵が立つて居た。一つナスターシャに訊いて呉れたまへ、あの女は何でも僕より熟く知つてるからね。J'étais surexcité, voyez-vous. Il parlait, il parlait……un tas de choses,（僕は眞個昂奮して居たよ、そりやアね。其男は又いろんな事を饒舌つたよ……饒舌つたよ。）尤も、其男も餘まり口數は利かなかつた。好く饒舌つたのは僕だよ……僕は僕の一生を其男に話して遣つた。勿論、其見地から觀た点だけだがね。僕は眞個昂奮して居たよ。J'étais surexcité, mais digne, je vous assure……（僕は眞個昂奮して居たよ、併し惡びれはしなかつたがね。其點は斷言するよ……）尤も、如何かすると涙を瀉したやうには思ふがね。彼奴等は隣の店から手車を借りて來たよ。』

『一體、如何してそんな事が起つたのでせうね？だが、ステパーン・トラフィモーギーチさん、後生だから最つと精確に話して下さい。貴方の仰有ることは宛然夢のやうですよ。』

『ねえ君、僕自身も夢を見てるやうな氣がして居るんだよ……Savez-vous! Il a prononcé le nom de Telyatnikof.（如何だい！其男はテリャートニコフと云ふやうな名前を言つたよ。）想ふに、左樣いふ男が入口に隱れて居たんだね。左樣だ、僕は想出したがね、其男は又愉事とドミトリ・ドミトリイチとを喚んで來ると云ふやうなことを言つてたよ、想ふに……qui me doit encore quinze roubles,（それは未だ十五留布僕に借りて居る男なんだね、）僕が骨牌で贏つた金子だよ、soit dit en passant. Enfin, je n'ai pas trop compris.（序に言つて置くんだがね。要するに、僕には好く解らなかつたのだよ。）だが、僕も彼奴等には負けて居なかつたよ。それにドミトリ・ドミトリイチが僕に何の關係が有るのだい？尤も、僕は事を荒立てないやうに一生懸命其男に頼んだやうには思ふがね。特に、特にそれを頼んだよ。實際、何うも自ら卑しうして頼んだやうだよ。Comment croyez-vous?（君はそれを如何思ふかね。）Enfin, il a consenti.（到頭、其男も承諾したよ。）左樣だ、僕は記憶えて居るがね、其男は自分の方からそれを言出したよ——成だけ事を荒立てないで、靜乎として置く方が好からうとね。畢竟、其男も只「一應見に」來たので、其他には何でもない、何でもない……で、若し何にも發見しなかつたら、それ限りで何にも起らないと言ふんだよ。で、僕等は友人として萬事を終つたんだよ、je suis tout à fait content.（僕はすッかり滿足して居るんだよ。）』

『何うして、それぢや其男は斯かる場合に於ける普通の手續きを踏んで、正則の保證人を喚んで來ようかと言出

したのですよ。貴方はそれを態々斷つたのだ』と、私は友達としての憤怒に驅られて叫んだ。

『だが、そりや保證人なぞない方が可いのだよ。又何の爲に世間の誹謗を買ふのだい？出來る限りは、友人同志の中に藏つて置きたいものだね。知つての通り、此町ぢや、若し此事が世間にぱつとしようものなら……Mes ennemis, et puis, à quoi bon, le procureur, ce cochon de notre procureur, qui deux fois m'a manqué de politesse et qu'on a rosé à plaisir l'autre année chez cette charmante et belle Natalya Pavlovna quand il se cacha dans son boudoir. Et puis, mon ami, (……僕の敵ばかりだ。それから、あの檢事が、檢事の豚野郎が何に成るんだい。彼奴は二度も僕に禮を缺いだよ。それから彼奴は先年あの綺麗な、可愛らしいナターリャ・パブローヴナの宅で、いやと云ふ程毆られたことが有るよ。其時、彼奴はあの女の化粧部屋へ逃け込んだものだよ。で、それからだがね、)お願ひだから、何卒反對したり、僕を輕蔑したりして呉れたまふな。人間が困つて居る時、百人の友達が來て、如何に自分が馬鹿な眞似をしたかを指摘して呉れるよりも堪へ難いことはないからね。まア坐つて、お茶でも飲んで呉れたまへ。白狀すると、僕は恐ろしく勞れて居るよ……僕は寧そ横に成つて、錯酸を頭に塗つた方が好くはないか知ら？君は如何思ふね？』

『成程』と、私は叫んだ。『氷も好いでせう。貴方は實際狼狽へて被坐しやる。顏が眞蒼で手も顫えて居ますよ。横に成つて、お休みなさい。そして、談話は後の事になさいな。私は貴方の傍に坐つて待つて居ますよ。』

彼は稍躊躇した。が、私は强ひて横に成れと勸めた。ナスターシャは醋酸の洋盃を持つて來た。私は手拭を濕らして、彼の頭の上に載せた。それからナスターシャは椅子の上に登つて、隅の影像の前に燈明を點け出した。私は吃驚しながらそれを見て居た。從來ついぞ此家で燈明なぞ點けたのを見たことがない。急に今それが出現したのだ。

『僕は彼奴等が出て行くと、直にこれを用意したのだよ』と、ステパーン・トラフィモーギーチは流眄に私を眺めながら呟いた。『Quand on a de ces choses-là dans sa chambre et qu'on vient vous arrêter, (室の中に斯ういふ物を持つて居るとね、逮捕に來られた時、)これが屹度好い印象を與へるんだよ。彼奴等は又それを見たことを報告するに違ひないからね……』

ナスターシャは燈明を上げてから扉口迄出て行つたが、闕の上に立停つて、右の手で頰を押へながら、涙に泳ぐ眼に凝乎と主人の顏を見詰めて居た。

『Eloignez-la, (あの女を彼方へ遣つて呉れたまへ)何か用を吩咐けてね』と、彼は長椅子の上から私に目眴せした。『僕はあんな露西亞人らしい同情には堪へられないよ、et puis ça m'embête……(それに、僕はあれを見ると息が塞るやうな氣がするのだ。)』

が、彼女は自分で出て行つた。私は彼が絶えず扉口の方に眼を注ぎながら、廊下の物音に耳を澄まして居るのを氣附いた。

『Il faut être prêt, voyez-vous, (ちやんと用意してなくちや成らんよ、えゝ君)』と、彼は意味有りげに私を見ながら言つた。『Chaque moment (何時)……彼奴等が遣つて來て、伴れて行くか知れないからね、ふう！――一人の人間が消え失せるんだよ。』

『何を？誰が來るのです？誰が貴方を伴れて行くのです？』

『Voyez-vous, mon cher, (そりやァね、君、)僕はあの男が歸つて行く時、これから僕を如何する積りだと、直接に訊いて見たよ。』

『寧そ貴方は何處へ追放されるのだと訊くと、好う御座んしたね！』と、私は同じ憤怒の念から叫んだ。

『僕が訊いたのも左樣いふ意味だつたよ。だが、其男は返辭をしないで出て行つた。Voyez-vous』（えゝ君）襯衣だとか、着物だとか、特に暖かい物はだね、彼奴等も多分持つて行かせて呉れるだらうとは想ふがね――でなけりや、僕は恐らく兵隊の外套で送られるんだよ。だが、僕は三十留布だけ』と、彼はナスターシャの出て行つた扉口を眺めながら、不意に聲を落した。『こツそり胴衣の衣嚢へ入れて置いたよ、此處に、觸つて見たまへ……彼奴等も胴衣を脱がせるやうなことはないだらうからね。それから七留布だけ蝦蟇口に殘して置いて、それを僕の有つて居る總額だと思はせるやうにしたよ。ねえ君、それから卓子の上にも些と許り小錢を殘して置いた。斯うして置けば、何人も僕が他に金子を隱したとは思はない、これが悉皆だと思ふだらうからね。あゝ、僕は今夜何處で眠るか判らないよ。』

私は餘りの事に頭を垂れた。此人の言ふやうな方法で、一人の人間が逮捕されたり、搜索されたりするものでないことは言ふ迄もない。屹度何かをごツちやにして居るのだ。だが、實際それが起つたといふことは爭はれない。又、此人の談話に據つて見ても、其奴等が最も正則な手續きを履まうと言出したのを、此人が「負けて居ないで、」それを拒んだといふのも事實らしい……勿論以前には、極端な場合には知事が……だが、何うしてこれが極端な場合で有らう？これが私の心を亂した。

『屹度彼奴等は彼斯得堡から電報を受取つたのだね』と、ステパーン・トラフィモーヰチは不意に言出した。

『電報？貴方の身に就いて？ヘルチエンの著作と貴方の詩の爲にですかい。貴方は正氣でそんな事を言ふのか。貴方を逮捕するやうなことが其中に有りますかい。』

私は心から憤つて仕舞つた。彼は妙な顏をして鬱いで居た――私が叫喚いたからではない、逮捕の理由がないと言はれたのが氣に入らないのだ。

『何人がこんな時代に、何の爲に逮捕されるなぞと云ふことが言はれるものか』と、彼は謎のやうに呟いた。

馬鹿ゆた、迚も有り得ないやうな考へが私の頭腦を過ぎつた。

『ステパーン・トラフィモーヰチ、友人として私にお話しなさい』と、私は叫んだ。『眞の友人として、私は貴方を裏切るやうなことは有りませんよ。貴方は何か或祕密結社に屬して被坐しやいますか、それとも、そんな事は有りませんかい。』

此處で驚いたことには、彼は自分が或祕密結社の會員で有るか如何か、自分でも確かでないらしいのだ。

『そりやア何次第だよ、えゝ君。』

『「何次第だ」とは、如何いふことですか。』

『人間が全心を擧げて進歩主義に從つて居るとすれば……何人だつて、それに返辭は出來ないよ。君は自分が何にも屬して居ないと思つて居るかも知れない。が、不意に君が何かに屬して居るといふやうなことにも成り得るんだよ。』

『何うしてそんな事が有るんです　これは然りか否かの問答ですよ。』

『Cela date de Pétersburg（彼得斯堡以來のことだよ）あの女と僕とが彼處で雜誌を出さうとして居た――あの時代から、これが根ざして居るんだね。あの時僕等は旨く遁れて來たよ。で、彼奴等も僕等のことを忘れて居たのだが、今に成つて想出したのだね。Cher, cher,（ねえ君、君）君はそれぢや僕を知らないのだ』と、彼は不意に病的に

昂奮して來た。『彼奴等は僕達を伴れて行つて、囚人馬車に乘せて、永久に西伯利亞へ搬び去つて仕舞ふか、さもなけりや監獄の中へ入れたまゝ、僕達のことを忘れて仕舞ふだらうよ。』

斯う言つて、彼は不意におい〳〵泣き出した。實際涙が頰を傳つた。彼は例の赤い絹の手巾で顏を蔽ふたまゝ、五分間許りも眉を搖ぶりながら咽び泣きに泣いて居た。私もそれを見ると胸苦しく成つた。これが二十年間吾々の間に豫言者として立つた人で有つた、指導者として、主教として、吾々の前に高く、莊嚴に自ら標置した人で有つた。其人の前には、吾々は心から崇敬の念を抱いて頭を下げ、又左樣するのを誇りとして居た——處が、不意に、此處に其人が泣いて居る、先生が毆るとて答を取りに行つたのを待つて居る惡戯な子供のやうに泣いて居る。私は恐ろしく彼が氣の毒に成つた。彼は私が彼の傍に坐つて居るのを信じて居ると同じやうに、あの「囚人馬車」の實在を信じて居るのだ。彼は其朝直にも、次の瞬間にも、それが遣つて來るものと信じて居るのだ。而もそれが皆ヘルチェンの著作と二三の詩の爲だといふから憫れる！こんな日常の生活に對する完全な、絕對的な無知は氣の毒でも有れば、同時に稍不愉快なものでも有る。

到頭彼は泣き止んで、長椅子から起き上つて、再び室の中を彼方此方歩き出した。其間始終私と談話を仕續けて居る。尤も、一分間毎に窓の外を覗いて、門口の足音に耳を傾けたものだ。二人の談話には矢張連絡がなかつた。私の保證や、彼を慰めようと思つて云ふ言葉は壁に豌豆を打附けるやうに跳ね返された。彼は殆ど聽いては居なかつた。而も彼は私から慰めて貰ひたいのだ。そして、其目的のために談話を仕續けて貰ひたいのだ。私は彼が今や私なしでは如何することも出來ないのだと見て取つた。又何んな事が有つても私を放つて歸すことは有るまい、私は其儘居殘つて、二時間以上も一緒に談話をして居た。談話の中で、彼はブルーメルが二通の革命の檄文を見附け出して持ち歸つたのを想出した。

『檄文！』と、私は頓狂な聲を出した。『貴方が其の何だと仰有るのですか……』

『あゝ、何人か十枚だけ此家へ投げ込んで行つたよ』と、彼は苦し相に答へた。彼は私と談話をしながら、時としては尊大に、時としては訴へるやうに、時としては卑屈に成つた。

『だが、僕は既に八枚だけ處理したよ。ブルーメルの見附けたのは二枚だけだ。』

斯う言つて、彼は不意に憤然として顏を赧くした。

『Vous me mettez avec ces gens-là ! (君は僕をあんな奴等と一緒にするんだね！) 君は僕があんな破落戸どもと一緒に仕事を爲るものだと想ふのかい、あんな無名の誹謗者どもと、僕の伴のピヨートル・ステパーノヰーチなどと、avec ces esprits forts de la Ilchelé? (あの臆病な自由思想家どもと？) おゝ、神樣！』

『えゝ、そりやァ彼奴等も多分貴方を一緒にしては居ないでせう……加之、そりや無意味だ、そんな事は有る筈が有りませんよ』と、私は言つた。

『Savez-vous. (ねえ、君)』と、彼は不意に言出した。『僕も時として que je ferai là-bas quelque esclandre (自分が何か世間で笑はれるやうなことを仕出かすだらう) といふやうな氣はするがね。おゝ、行つちや不可ない、僕を一人置いて行つちや不可ない！ Ma carrière est finie aujourd'hui, je le sens. (僕の生涯も今日で終つた、僕はそんな氣がするよ。)ねえ君、僕は其邊の何人かに飛ひ蒐つて、あの少尉のやうに肩に嚙み着くかも知れないよ。』

彼は自分でもぎよつとしながら、同時に相手を駭かせまいとするやうな、一種妙な顏附をして私を見て居た。彼は確に時の進むに伴れて、或人に對して、又或事に就いて、だん〳〵昂奮して來るやうに見えた。が、囚人馬車は

却々現れなかつた。彼はいよ〳〵苛々して來た。不意に何かの用で厨を出て門口へ來たナスターシャが干物臺を引つくり返した。ステパーン・トラフィモーギーチは顕え上つた。そして、下に坐つた彼の顔を見ると、怖ろしさに化石して居るやうに見えた。が、物音の理由が解つた時、彼は頭からナスターシャを呶鳴り附けて、足踏みをしながら、又厨へ追ひ遣つた。少時して、彼は落膽したやうに私を見ながら言つた。

『僕は最う駄目だよ。Chen,（ねえ君）』と、彼は不意に私の傍へ坐つて、凝乎と私の顔を見入つた。『Chen,（ねえ君、）僕が怖れて居るのは西伯利亞ぢやないよ、それは斷言するがね。Oh, je vous jure!（あゝ、僕は君に斷言するよ。）』――實際涙が彼の眼に溢れて居た――『僕が怖れて居るのは他の事だよ。』

私は彼の顔附から今迄言ふことを控へて居た何か重大な事柄を到頭切り出さうとするのだなと察した。

『僕は不名譽を怖れて居るのだよ』と、彼は謎のやうな言葉を囁いた。

『何が不名譽です？それ處ぢや有りませんよ。ねえ、ステパーン・トラフィモーギーチさん、何も彼も今日中に判りますよ、而も結局貴方の利益に成るでせうよ……』

『君は彼奴等が僕を赦して呉れるだらうと思つて居るのかい。』

『貴方を赦す？何を！何といふ言草です！貴方は何を爲たのですか。私は貴方に言つて置きますがね、貴方は何にも爲たのぢや有りませんよ。』

『Qu'en savez-vous.（君が何知つて居るんだい？）僕の一生は何だつたよ……ねえ君……彼奴等は何も彼も記憶えて居るよ……で、若し何にも見附けないとすれば、そりや一層惡いだらうよ』と、彼は不意に思ひも寄らないことを言出した。

『一層惡いと云ふのは如何いふことですか。』

『一層惡いのだよ。』

『解りませんね。』

『ねえ君、西伯利亞でも、アルチャンゼルでも、權利の喪失でも構はない――殺すといふなら、僕は殺されもするさ。だが……僕は他に或事を怖れて居るんだよ。』再び囁くやうな聲、悸々した顔、又謎のやうな其容子。

『ですが、何を？何を？』

『彼奴等は僕を苔で打つよ』と、彼は絶望したやうな眼附で私を見詰めながら囁いた。

『誰が貴方を笞で打つのです？何の爲に？何處で？』と、私は彼が氣が狂つたのぢやないかと思つて、ぎよつとしながら叫んだ。

『何處でと云つて、彼處だよ……「それ」が爲れる處だよ。』

『ですが、何處でそれが爲れるのですよ？』

『あゝ、君』と、彼は殆ど私の耳にくつ着くやうにして囁いた。『不意に足下の床板が外れて、腰の邊迄落ツこちる……そりやア何人でも知つてるよ。』

『傳說だ！』と、私は相手の意味を推察しながら叫んだ。『舊い譚ですよ。貴方は今迄そんな事を信じて居たのですか。』斯う言つて、私は笑つた。

『傳說！だが、左樣いふ譚は全然根據なしぢや起るものでないよ。僕は……何千度となく、それを想像に描いて見たよ。』

『ですが、如何して貴方が、貴方が左樣成るのですよ。實際貴方は何にも爲ないぢや有りませんか。』

『それだから一層惡いのだよ。彼奴等は何にも見附けないとすれば、それが爲に僕を笞で打つよ。』

『で、貴方は何うしても彼得斯堡へ伴れて行かれると思つて被坐しやるのですか。』

『ねえ君、僕は先刻から最う何にも悔まないと言つてるよ。Ma carrière est finie.（僕の生涯は既に終つたのだ。）あの女がスクヴォーレジュニキで僕に最後の分袂を告げた時から、僕の生活は僕に取つて何の價値もなく成つたよ。だが、不名譽、不名譽、あの女がこれを聞いたら、que dira-t-elle?（何と言ふだらうね？）』

彼は遣瀬のないやうな眼に私を見詰めた。可哀相に、火の出る程顏を赧くして居るのだ。私は思はず眼を落した。

『あの女の耳には這入りませんよ。貴方の身に何にも起る氣遣ひは有りませんからね。私は生れて始めて貴方に話をして居るやうな氣がして居ますよ。ステパーン・トラフィモーギーチさん、今朝貴方は本當に私を吃驚させましたよ。』

『だがねえ、君、それが別に怖ろしいのぢやないよ。縱令僕が赦されるにしてもだね、又縱令再び此處へ歸されて、何にも僕の身に起らなかつたとしてもだね……矢張僕はお仕舞ひに成るんだからね。Elle me soupçonnera toute sa vie（あの女は一生涯僕を疑ふだらうよ）——僕を、僕を、此詩人を、思想家を、あの女が二十二年の間崇拜して來た男を！』

『そんな事はあの女は決して想ひも着かないでせうね。』

『いや、着くよ』と、彼は深く信ずる處あるものゝ如く囁いた。『僕等は彼得斯堡で、彼處を去る前だね、二人なから怖れて居た時に、幾度も其事を話合つたからね……Elle me soupçonnera toute sa vie（あの女は一生僕を疑ふだらうよ）……僕は如何してあの女の前に嫌疑を解くことが出來るかい。何と言つたとて眞實とは思はれないよ。又、此町でも何人がそんな事を信ずるかい、ce qui est invraisemblable（そりやア迚も駄目だよ）……Et puis les femmes（それに女どもだね）……あの女は屹度悅ぶだらうよ。あの女は眞の友達として心から悲しんでは呉れるだらうがね、併し内々では悅ぶだらうよ……僕はこれから死ぬ迄僕を遣附ける武器をあの女に與へるだらうからね。あ、僕も萬事終れりだ！僕もあの女と共に幸福な二十年を送つて來た……で、今は！』

彼は兩手に顏を隱した。

『ステパーン・トラフィモーギーチさん、寧そ直に此一件をヴルヴーラ・ペトローヴナに知らせたら何んなものでせうね？』と、私は言つて見た。

『飛んでもない事を！』と、彼は身顫ひをして、座から飛上りながら叫んだ。『決して、何んな事にも、スクヴォーレジュニキで、別れにあんな事を言はれた後ぢや——決して！』

彼の眼は閃いた。

二人はなほ一時間も、或はそれ以上も一緒に談話を續けて居た、始終何事かを心待ちに待ちながら——それが最う二人の固定觀念と成つたのだ。彼は再び横に成つて、眼を嘆りさへした。そして、二十分間も一言も發しないで寢て居た。私は彼が睡眠に就いたのぢやないかと思つた。が、彼は不意に起上つて、頭の手拭を振拂ひながら、長椅子から飛上つて、顫える手で頸帶を結び〳〵、鏡の前へ駈け着けた。そして、雷のやうな聲でナスターシャを喚び附けながら、外套と、新しい帽子と、洋杖を持つて來るやうに吩咐けた。

『僕は最う堪へられないよ』と、彼は顫える聲音で言つた。『僕には出來ない！出來ない！僕は最う自分で出掛け

るよ。』

『何處へ行くんです？』と、私も跳ね起きながら言つた。

『レムブケの邸へさ。Cher,（ねえ君）僕は行かなくちや成らんよ、行く義務が有るよ。僕は市民だ、男子だ、これでも屑のやうな人間ぢやないよ。僕も權利を有つて居る。僕は僕の權利を要求するのだ。僕は二十年の間自分の權利を捨てゝ來た、一生涯容赦の出來ない程自分の權利を顧みなかつたものだ・・・・だが、僕も今はそれを要するのだ。あの男は何も彼も僕に語らなくちや成らんよ――何も彼も。あの男は電報を受取つたのだ。あの男も僕を責め苛みは得爲まい。若し左樣なら、直に僕を逮捕するが可い、逮捕するが可い！』

彼は地團太踏みながら、狂人のやうにわい〳〵呶鳴つた。

『私も其點は貴方に贊成しますよ』と、私は心中彼のために非常に怖れながら、故と出來るだけ平氣な顏をして言つた。『成程、こんな風にして此度に坐つて居るよりは、其方が好いでせうね。だが、貴方の心的狀態には何うも感服されませんよ。まア何んな顏をして被坐しやるか、見て御覽なさい。貴方は何んな風采をして彼處へ被坐しやるのです？ Il faut être digne et calme avec Lembke.（レムブケに對しては、惡びれないで、心持を穩やかにして被坐しやらなくちや不可ませんよ。）實際、貴方は其邊へ飛出して、何人にでも嚙み着き相ですよ。』

『僕は最う如何成つても構はないのだ。僕は獅子の顎へ飛込まうとして居るのだよ・・・・・』

『私も貴方と一緒に參りませう。』

『君は左樣言つて呉れるだらうと思つて居た。僕は君の犧牲を、眞の友人としての犧牲を有難く受けるよ。だが、彼處の門迄だよ、彼處の門迄だよ。君は僕の同類だなぞと目指されて、此上君自身を危くする必要はない、又そんな權利もない。Oh, croyez-moi, je serai calme.（あゝ、大丈夫だよ、僕は平靜にして居るからね。）僕は自分が此瞬間à la hauteur de tout ce qu'il y a de plus sacré.（有りと有らゆる神聖なるものゝ高御座に）立つて居るやうな氣がするよ。』

『私も多分貴方と一緒に家の中迄這入つて行かれるでせう』と、私は相手の言葉を遮ぎつた。『昨日私の許へヴィソトスキイを通じて、あの馬鹿げた委員會から言傳が有りましたよ。あの連中は明日のお祭に幹事の一人として、私を招待しようと言ふんですね。兎に角・・・・・私の役は皿の番をしたり、貴婦人連の御機嫌を伺つたり、お客を席へ案内したりして、赤と白との絹紐で造つた薔薇の花を左の肩に着けて居る六人の若い者の一人だと言ふんでさ。私も最初は斷わらうと思ひましたがね、斯う成つては、其事でユーリヤ・ミハイローヴナにお目に懸りたいといふのを口實にして、私が家の中へ這入つて行くに差支へはないぢや有りませんか・・・・・ですから、二人が一緒に這入つて行きませうよ。』

彼は點頭きながら聽いて居た。が、何一つ耳へは這入らなかつたらしい。私どもは闕の上に立つた。

『Cher,（ねえ君）』――彼は影像の前の燈明の方へ手を伸ばした――『Cher,（ねえ君）僕はこれ迄斯んな物を信じたことはないのだよ、だが・・・・・まア可い、まア可いよ。』彼は胸に十字を切つた。『Allons!（さア行かう！）』

『うむ、却てそれが好いかも知れない』と、私は一緒に階段の上迄出ながら一人で考へた。『戸外の空氣に當つたら途中で快く成つて、心が落着くと共に、又戻つて來て、寢床へ這入つたら可いだらうよ・・・・・』

が、私は此主人のことを全然忘れて居たのだ。途中で又ステパーン・トラフィモーヰチを一層昂奮させるやうな事件に出逢つた。到頭彼は斷じて行くことに決心した・・・・・私は實際此人に此朝彼が不意に表はしたやうな、あ

れだけの勇氣が有らうとは思ひも寄らなかつた。憐れな友よ、好々爺よ。

第九章　命數の朝

一

途中で起つた吾々の冒險といふのが又吃驚するやうなもので有つた。だが、私は先づ事の順序から述べて懸らなければ成らない。ステパーン・トラフィモーギーチと私とが街の中へ遣つて來た一時間前に、シュピーグリン工場の職工だといふ、總勢七八十人の一群が町中を押廻つて、山のやうな見物人の好奇心の的と成つて居た。彼等は態態列を作りながら、殆ど聲も立てないで進行した。其後、是等七八十人の同勢は、工場主の留守の間に、支配人が勝手に工場を閉ぢて職工を解傭しながら、賃銀の支拂に關して破廉恥な詐欺を働いた――これは今日では最早疑ひのない事實で有る――と云ふので、知事の邸へ押懸けて、其の裁斷を仰ぐために、殆ど九百人にも垂んとする職工全體の中から撰拔されたものだと確められた。尤も、或人々は、撰拔されたものとしては七十人は餘りに人數が多い、あの群集は單に一番酷い目に遭つた職工どもから成立つて居たので、只彼等自身のために援助を請ひに來たのだ、從つて後に喧ましい問題に成つたやうな工場の職工の「一般的反抗」なぞは決して存在した譯ではないと主張して、今でも代表者の撰拔を極力否定して居る。が、或人々は又是等七十人の同勢は單なる同盟罷工ではない、立派な革命の徒で有る、卽ち彼等は單に一番先走りのした暴徒と云ふだけではない、潛に配布された煽動的革命の檄文に促されて立つに至つた者どもで有ると、激烈に主張したものだ。實際の處、外部の或勢力又は煽動が加はつたものか如何かは未だ能く判らない。個人としての私の考へを言へば、職工どもは革命の檄文なぞ全然讀んだこと

もないのだ。縱し又それを讀んだにしても、彼等には一言も解るまい。當時左樣いふ物を書いた作者は其文體の大膽なのにも拘はらず、極めて曖昧な文章を書いたものだ。だが、職工としては實際困難な狀況の下に居た。警察へ訴へた處で、迚も彼等の訴訟を取上げて呉れないとすれば、出來る事なら、一團と成つて「大將自身」に會ひに行かう、請願書を眞先に押立てゝ、列を正して知事の玄關前へ押懸け、知事が顏を出すや否や、皆神樣の前へでも出たやうに膝を折つて其の救ひを求めようと想ひ附くのは、固より自然の數では有るまいか。私の考へでは、これを一つの反抗若しくは委員の派遣と見る必要は少しもない。これは全く傳說的な、歷史的な動作で有る。露西亞の人民といふものは、昔から結果が如何成らうと頓着せず、只左樣するだけの滿足から、「大將自身」と直接に談判することを好んだものだ。

で、私はピョートル・ステパーノギーチや、リーブティンや、其他の者どもが——恐らくはあのフェッカすらも——職工どもの中を飛び廻つて、何かひそ〳〵談合して居たものゝ（此事に就いては今や確かな證據が有る）それに據つて彼等を動かすことは全然無効に歸したものと確信して居る——尤も、彼等も二、三乃至五人の職工と談話をすることしか出來なかつたのだけれど。況んや彼等の慫慂する反抗に至つては、工場の職工どもが一言たりとも其傳道を理解することが出來たら、直に自分達とは何の關係もない馬鹿げた事柄として、それに耳を藉すことを止めたに違ひない。フェッカだけは全然行方が違つて居た。想ふに、彼はピョートル・ステパーノギーチよりもより多くの成功を收めたらしい。今では二人の職工がフェッカを援けて、三日後に起つた町の中の火事を出したといふ事實も一般に知れ渡つて居る。又一箇月後には、嘗て工場に働いて居た三人の男が町の郊外で泥棒や放火をしたと云ふので捕まへられた。が、是等の事件に於て、フェッカが彼等を誘惑して斯かる行爲に出でしめたものとしても、只其五人だけに留まつて、其外には何一つそんな樣な話を聞かなかつた。

それはそれとして、職工の一群は到頭知事の邸の正面に有る廣場に到着して、矢張押默つたまゝ秩序整然と集合した。それから、ぼんやり口を開いて玄關を見詰めながら待つて居た。私は彼等が其處へ着くや否や帽子を脫つたといふ話も聽いた。卽ち運惡く其時自宅に居なかつた知事が顏を出す半時間も前から左樣して待つて居たのだ。巡査は眞先に遣つて來た。最初は一人々々で、後では集められるだけ多人數の隊を作つて遣つて來た。勿論、彼等は威嚇して職工どもを解散させようとした。が、勿論職工どもは垣根の中へ着いた羊の群のやうに、頑として動かない。そして、自分等は「大將自身」に會ひに來たのだと、法三章的にきつぱり答へた。彼等が非常に堅い決心を有つて居ることは明白で有つた。巡査どもの怒罵の聲は止んだ。やがて商議や、妙な囁くやうな命令や、警部どもの眉を顰めさせるやうな、嚴格な、騷々しい混雜がそれに代つた。警務長は「知事自身」の到着を待たうと決心した。此警務長は三頭立の馬車で、全速力で其場へ馳着けて、未だ馬車を降りない間から右に左に群集を打据ゑたといふ噂が有るのは嘘だ。尤も、彼はこんな場合黃色の蓋ひの馬車に乘つて、全速力で群集の中へ突込んで行くのを常として居た。そして、本當に氣が狂つたかと思はれる程頭を擧げて駛るやうに馴らされた三頭の馬が兩側の店の商人どもの眼を欺てしめながら、いよ〳〵狂氣のやうに成つて馳ける間に、悠々車の橫に整へた革紐を握りながら馬車の中に突立つて、好く銅像に有るやうな恰好に右の手を伸ばしながら、傲然として町中を乘廻すのが所好でも有つた。が、此場合には、彼も別に拳骨を用ひなかつた。尤も、馬車を降りた時は、一寸權平づくな言葉を使はずには居られなかつたやうだが、それは只自分の聲譽を保つために餘儀なく使つたのだ。此外兵隊が銃鎗を持つて馳け着けたとか、砲兵隊やコサックの騎兵隊に電報を打つたとかいふやうな途方もない話も有る。が、それ等は今ぢやそ

んな噂を立てた當人ですら信じて居ないやうな風説に過ぎない。又、消防隊から數多の水槽を持つて來て、それが爲に群集はづぶ濡れに成つたと云ふやうな馬鹿げた話も有る。が、事實は單にイーリヤ・イーリイチが熱心の餘り一人も水に濡らさずには歸さないぞと呶鳴つただけで有つた。恐らくはこれが基礎に成つて、彼得斯堡や莫斯科の新聞に迄載せられた水槽の風説を生んだので有らう。想ふに、一番懸値のない報道は、最初集められるだけの巡査が群集の周りに哨兵線を張つた。それから半時間程前にスクヴォーレジュニキへ馬車で出懸けたレムブケに對して急使が發せられた、卽ち一人の警察署長が警務長の馬車に乘つて駈け出した。先づこれだけなのだ。

が、何れにしても、如何して彼等が一目見て、最初の瞬間から、此の無意味な、別狀のない請願者の群を、縱しや其中に二三の異分子が混じて居たにもせよ、國家の基礎を轉覆しようと企てゝ居るやうな大逆罪にして仕舞つたかと云ふ質問に對しては、私は未だ返答の出來ないことを自白しなければ成らぬ。如何してレムブケ自ら三十分後使者と一緒に到着した時、そんな考へに突進したので有らうか。想ふに――尤も、それも個人としての私の意見に過ぎないのだが――それは工場主の親友で有つたイーリヤ・イーリイチが、レムブケを阻んで深く此事件を穿索させないために、左樣いふ事に此群集をして仕舞はうと云ふ考へから出たものらしい。それにレムブケ自らも左樣いふ考へを頭に有つて居たのだ。二日の間に、彼は此警務長と二度も常ならぬ不思議な會話を取交はした。其會話は極めてほんやりしたもので有つた。が、イーリヤ・イーリイチは知事が、政治上の檄文が現はれて、シュピーグリン工場の職工どもが社會主義的暴動を敎唆されて居るものと堅く思ひ詰めて居る、で、若し其話が何でもない事に成つて仕舞つたら、恐らく彼は失望するだらうと思はれる程、一生懸命に思ひ込んで居るのを見て取ることが出來た。知事は彼得斯堡で名聲を揚げたいと思つて居るのだ』と、狡猾なイーリヤ・イーリイチはフォン・レムブケの許を出ながら一人で考へた。『うむ、其方が俺にも都合が可いよ。』

が、私はあの憐れなアンドレイ・アントノーギーチが、縱しや自分の名聲を揚げるためにもせよ、反亂を望んで居たなぞとは斷じて信じない。彼は極めて心懸けの好い役人で、細君を貰ふ迄は只無邪氣にほんやりと暮して來たものだ。で、四十の春を送り迎へした夫人が、そんな呑氣な政府からの森の扶持位に滿足しないで、所天を自分と同じ水平に引上げようとした處で、それが彼の罪過で有らうか。此の憐れなアンドレイ・アントノーギーチを、瑞西に於ける有名な瘋癲病院へ伴れて行くやうなことに成つた精神狀態の爭はれない徵候が、其朝初めて明白に成つたことは殆ど疑ひを容れない。(聞く處に據れば、彼は近頃其處で追々精力を恢復して來たといふことだ。)で、一度左樣いふ爭はれない徵候が其朝人の眼に立つたことを許すとすれば、同じ徵候がそれ程明白でなくとも、前の日にも表れて居たことが許されるだらう。私は最も個人的な筋から、(其後ユーリヤ・ミハイローヴナが一人私に對して、決して得意ではなく、まづ〳〵悔恨して――何と成れば女性が根本的に悔恨するといふ事は有り得ないものだから――其一部分を洩らしたのだと思はれても差支ない)アンドレイ・アントノーギーチが其前の夜の眞夜半、朝の二時過ぎに、夫人の室へ行つて彼女を搖り起した、そして自分の「最後通牒」を聽いて吳れと言張つたといふ話を聞き込んだ。餘りにしち冗く言はれるので、彼女もぷり〳〵しながら、髮の毛を紙で押へたまゝ、寢床から起上つて、長椅子の上に腰掛けながら、皮肉な侮蔑の色を見せながらも、餘儀なく所天の談話を聽いて居たと云ふことだ。其時始めて彼女は所天が何んな心持に成つて居るかを理解した。そして、潛かに恐怖を感じた。彼女も自分の身を考へて見て、少しは穩やかに出れば可かつたのだ。が、彼女は自分の恐怖を隱して、前よりは一層頑固に振舞つた。世の有らゆる細君と同じやうに、彼女もアンドレイ・アントノーギーチを取扱ふ彼女獨得の手段を有つて居

た。彼女は既に一度ならずそれを試みて、いよ〳〵所天の亂心を增長させた。ユーリヤ・ミハイローヴナの手段といふのは一時間でも、二時間でも、一日中でも、時には三日三晩引續いて、さも輕蔑したやうに、默りこくつて居るのだ。何んな事が起らうと、所天が何を言はうと、何を爲ようと、縱しんば三階の窓から身を投げようと叫喚いても、凝乎と默りこくつて居るのだ——敏感な男に取つては堪へられない手段に相違ない！ユーリヤ・ミハイローヴナは此の數日の間所天の犯した過失やら、此町の最高權威たる身で、彼女の政治的手腕に對して、彼の抱いた嫉妬心やらに對して、所天を懲罰しようと思つたのか、又、若い者どもや、一般交際社會に對する彼女の態度を所天が批評したり、又は彼女の微妙な、遠くの見える政治上の目的に對して全然理解を缺いたりするのを憤つて居たためか、それとも又ピョートル・ステパーノヰーチに對する所天の馬鹿げた、無意味な嫉妬を憤つて居たためか——何れにしても、彼女は夜半の三時だと云ふのに、又アンドレイ・アントノーヰーチが從來嘗て見なかつたやうな、昂奮した精神狀態に有つたにも拘はらず、今に及んでなほ心を柔げようとは思はなかつた。

彼女の化粧室の絨氈の上を矢鱈に彼方此方と歩き廻りながら、彼は我を忘れて、有らゆる事を、有らゆる事を、胸の中にもやくやして居る有らゆる事を、連絡もなく饒舌り散らした——彼の言葉に從へば、『最う何うにも我慢が出來ないので有る。』彼は先づ自分が有らゆる人の胡盧に成つて、『鼻を摘んで引廻されて居るのだ』といふことから始めた。『そんな言草は如何でも可い』と、彼は相手の薄笑ひに氣が附くと、大きな聲で呶鳴つた。『尤も文字通りに「鼻を摘んで」とは言はないが、兎に角それは事實だよ！……いや、奥さん、最う時が來ましたよ、私は貴方に言つて置くが、今は決して笑つたり女の技巧を弄したりして居る時ぢや有りませんぞ。私どもは、へら〳〵嬌態をつくる女の化粧室に坐つて居るのぢやないのだ。眞實の事を言ふために、輕氣球の中で相會した二個の抽象的生物のやうなものだ。』——彼は疑ひもなく混亂して、正しい考へが有つても、それを正しい言葉で言ひ表はすことが出來ないのだ——『奥さん、貴方ですよ、私の幸福な過去を滅したものは貴方ですよ。私は只貴方のために、貴方の野心のために此地位に著いたのだ……貴方は皮肉な笑ひ方をして居ますね？そんなに威張つて居るものぢやない、餘まり遽てなさんな。敢て言ふが、奥さん、敢て言ふが、私は此地位に相應するだけの人間ですよ。えゝ、此地位ばかりでない、こんな地位が十個有つたつて遣つて行かれる人間ですよ。私は私だけの才幹が有りますからね。だが、貴方と一緒ぢや、奥さん、貴方と一緒ぢや——そりやァ駄目ですよ。貴方と一緒に此處に居ちや、私の有る才幹もなく成りますからね。二つの中心といふことが有るものでない、それを貴方は二つ遣りましたよ——私のが一つ、貴方の化粧室に一つ——二つの權力の中心、奥さん、だが私はそれを許しませんよ、斷じて許しませんよ。政務には、結婚と同じく、中心は一つでなければ不可ない。二つは不可能で有る。……貴方は何を爲て私に酬ひましたか』と、彼は續けた。『私どもの結婚は、貴方が私に始終、一時間毎に、私が役に立たずで有る、馬鹿で有る、卑劣で有るとさへ證據立てようとして居た外に、何にもないぢや有りませんか。又、私は私で始終、一時間毎に、自らを卑しくするやうな手段で、私は役に立たずでない、決して馬鹿でもない、私は私の廉潔な性格を萬人に認めさせることが出來るのだと、貴方に證據立てることを強ひられて來たのだ。こりやァ二人に取つて互に自らを卑しくする業ですよ。』

此處迄言つて來て、彼は急に兩脚で絨氈をばたん〳〵〳〵蹴り出した。ユーリヤ・ミハイローヴナも已むを得ず嚴格な威嚴を裝ひながら立上つた。彼は直に鎭まつた。が、今度は感情的な態度に變つて、五分間許りも自分で自分の胸を打ちながら、ユーリヤ・ミハイローヴナの底の知れない沈默にいよ〳〵激して來ながら、めそ〳〵と泣出した。

本當に泣いたので有る！最後に彼は致命的な大失敗を遣つて、ピョートル・ステパーノヴィッチを嫉んで居るといふやうな意を一寸漏らした。斯うして自分で自分を取返しの附かない大馬鹿にして仕舞つたことに氣が附くと、彼は野獸の樣に猛り狂つて來た。自分は『彼奴等が神を否定するのを其儘に許しては置かないぞ』とも叫喚いた、容赦し難い不信者どもの集まつて居る彼女の客間を一網に掛けて追ひ散らして仕舞ふぞとも、州知事は神を信ずる義務が有る、從つて其細君たる者も左樣で有るぞとも、彼は最早あの若い者どもには辛抱が仕切れないとも叫喚いた。又『貴方は、奥さんは、自分自身の威嚴を保つためにも、所天のことを考へなくちや成らぬ筈だ。縱しんば所天が才幹のない男で有るにしても――處が、私は決して才幹のない男ではないのだ！――所天の聰明を辯護して懸らなくちや成らぬ筈ではないか。それに貴方は何を爲た！此土地の有らゆる人間が私を輕蔑するやうにしたのは、貴方の仕業だ。貴方が彼奴等を皆左樣爲せたのだ』彼は又有らゆる婦人問題を根絶して、其痕跡を殘して置かない積りだとも叫喚いた。明日はあの馬鹿な、保姆どものために開かれる祭なぞ禁止して、解散させて仕舞ふから可い。明日の朝最初に出逢つた保姆をコサック兵の力で州外へ放逐して仕舞ふ積りだ！『私は故と左樣するんだよ』と、彼は叫喚いた。『貴方は知つてるか、貴方に隨いてる惡漢どもは工場の職工どもを煽動して居るが知つてるのか。私はそれを知つてるんだよ。ねえ、私は其惡漢どもの四人の名前迄知つて居るのだ。あゝ、私は氣が狂ひさうだ、最う駄目だ、駄目だ！……』

が、此時ユーリヤ・ミハイローヴナは不意に沈默を破つて、自分はそんな罪跡に就いては、最う疾くから知つて居るのだ。が、それもこれも皆馬鹿げた話で、貴方は餘り眞面目にそれを取るのだ、又左樣いふ惡獸者の名は四人處ぢやない、皆知つて居るのだ――それは嘘だ――が、自分はそんな事のために氣が狂はうなぞとは夢にも思はない、反對に、いよ〳〵自分の聰明に信賴して、萬事を好都合に納めようと望んで居る。卽ち若者どもの勇氣を勵まして、再び彼等を理性に齎らすと共に、不意に、彼等の豫期しない間に其計畫が露顯したことを告げ知らせ、それから最つと合理的で高潔な行動に對する新しい目的を指示して遣るのだと、嚴然として言ひ放つた。

あゝ、これがアンドレイ・アントノーヴィッチの上に與へた影響は何んなもので有つたらう！ピョートル・ステパーノヴィッチが再び自分を誕かして、こんなにも無遠慮に自分を馬鹿にしたと、自分よりも早く、自分に話したよりも一層詳しく彼女に話して居るのだと、恐らくはピョートル・ステパーノヴィッチ自ら斯かる罪蹟の主たる煽動者で有ると知つた時――彼は憤然として狂ひ出した。『えゝ、此の意地惡の馬鹿女奴』と、彼は一度に綱を切つて離しながら叫んだ。『お前に言つて置くが、私は卽座にお前のあのけちな戀人を捕まへて遣るよ、彼奴に繩を掛けて監獄へ打込んで遣るか、でなけりゃ――私は今お前の眼の前で此窓から飛んで見せるよ。』

ユーリヤ・ミハイローヴナは憤怒に燃えて、眞蒼な顔をしながら、卽座に長く引延ばしたやうな、室中に鳴り渡る高笑ひで、此の長說法を打ち返した。其の高笑ひたるや、コケットの役を演ずるために十萬留布の報酬で輸入された巴里の女優が、彼女に對して嫉妬を敢てしたと云ふので、所天の面前で高笑ひして見せる時に、佛蘭西の芝居で始めて聞くことの出來るやうな、轔々と響く怖ろしい高笑ひで有る。

フォン・レムブケは窓の外へ突進した。が、急に胸の上で腕組みをしたまゝ、其場へ根が生えたやうに立停つた。そして、死人の樣に眞蒼な顔をしながら、陰欝な險しい眼に笑ふ女を見詰めて居た。『お前は知つてるか、ユーリヤ、お前は知つてるか』と、彼は喘ぐやうな、懇願するやうな聲で言つた。『私だつて或事を爲し得るが、お前は知つて居るか。』が、彼の最後の言葉に續いて、再び新にされた高笑ひを聞くと、彼は齒を咬ひ縛つて呻いた。不意に窓の

方へではない、妻の方へ、拳骨を振り上げて突進した　彼は其拳骨を振り下しはしなかつた――否、私は繰返して言ふが、否。が、それは最後の藥で有つた。彼は自分が何を爲て居るかも知らないで、自分の室へ駈け込んだ。そして、着物を着たまゝ、顏を下に寢床の上に俯伏せに成つて、頭から寢衣を引被りながら、二時間餘りも左樣して寢て居た――眠ることも出來なければ考へることも出來ない、胸には重石を置いたやうで、魂には白けた、動かすことの出來ない絶望が横はつて居た。時々彼は胸苦しい、熱病染みた戰慄に全身顫へ上つた。何にも考へては居ない、が、始終連絡のない事柄が彼の頭の中を往來した。時には、彼は十五年前彼得斯堡の彼の室に懸つて居た古い柱時計のことを想ひ出して居た。あの時計には長針が折れて居たッけ。又時には面白い同僚のミルボアのことを想ひ出して、一度二人がアレキサンドローヴスキイ公園で一緒に燕を捕まへたが、不圖彼等の一人が既に大學顧問と稱ばれて居たことに氣が附いて、餘りの子供らしさに、公園中に響き渡るやうな高笑ひをしたことなぞ考へて居た。想ふに、彼は朝の七時頃自分でもそれとは氣附かないで熟睡に落ちたに違ひない。そして、快い夢に耽りながら、愉快な睡眠を續けたのに違ひない。

十時頃眼を覺まして、彼は寢床から飛び起きた。直に何も彼も想ひ起しながら、自分で一つ頭を撲つた。彼は朝飯を斥けた、ブルーメルにも、警務長にも、彼が今朝或會議を支配することに成つて居ると念のために知らせに來た書記にも會ふまいとした。彼は何にも聽いて居なかつた、又何にも理解しようとは思はなかつた。彼は物に憑かれた人のやうに、ユーリヤ・ミハイローヴナの室へ駈けて行つた。其處で、年久しくユーリヤ・ミハイローヴナと一緒に棲んで居る、生れの好い老婦人のソーフィヤ・アントロボーヴナが彼に向つて、『奥さんは今朝十時に、大勢と一緒に三臺の馬車に乘つて、スクヴォーレジュニキなるヴルヴーラ・ペトローヴナ・スタフローギンの別邸へ、二週間後催されることに成つて居る二度目の祭に關して、場所を檢分に出掛けたと告げた。今日の訪問は三日前にヴルヴーラ・ペトローヴナと相談の上決められたと云ふのだ。此報知に顚倒しながら、アンドレイ・アントノーヰーチは自分の書齋へ戻つて來て、衝動的に馬車の用意を命じた。彼は其用意が出來るのさへ待ち兼ねた。彼の魂はユーリヤ・ミハイローヴナに飢ゑて居た――一目彼女が見たい、五分間でも可いから彼女の傍に居たい。彼女は恐らく自分を一目見て自分の容子に氣が附いて、毎もの樣に微笑しながら自分を宥して吳れるだらう……『うーう！馬の用意は出來ないか。』彼は機械的に卓子の上に載つて居た厚ぼッたい書物を開いた。彼は時々こんな風にして書物で自分の運を占つて見た、手當り任せにそれを開いて、右側の頁の一番上の三行許り讀むのだ。出たのは斯うで有つた。『Tout est pour le mieux dans le meilleur des mondes possibles.（有らゆる物が有らゆる世界の最上の中の最上に有る。）――ヴォルテーユの「カンディッド」』彼は何だと言ふやうな舌打をした。そして、馬車に乘らうとして駈出した。『スクヴォーレジュニキだ！』

其後馭者の語る處に據れば、途中主人は絶えず『駈けろ、駈けろ！』と催促した。が、先方の邸へ近づくや否や、不意に方向を轉じて町へ戻れと命じながら、矢張『疾く駈けろ、何卒疾く駈けて吳れ！』と迫つたものだ。二人が町の城壁に着く前の處で『旦那は又私に停めるやうに吩咐けて、馬車から降りた。で、途を横にどん〳〵、〳〵、〳〵野原の中へ這入つて行くんですね。私は又何處かお加減でも惡いんだらうと思つてましたが、旦那は又立停つて周圍の花を眺めて居るぢや有りませんか、えゝ、少時左樣して立つて居ましたよ。眞個變でしたね、私も眞個心配に成りましたよ。』これが馭者の證言で有つた。私は其朝の天氣を記憶えて居るが、晴れては居たが、風の吹く、寒い九月の空合ひで有つた。アンドレイ・アントノーヰーチの前には、ずつと前に穀物の刈取られた裸の野の凄じい景色が横は

つて居た。二三の凋み掛けた黄色い花が木枯に吹き殘された遺物のやうに、ちよんぼり咲いて居た。彼は自分と自分の運命を秋の霜に虐げられた、そんな哀れな花に比較しようと思つたらうか。私は左樣は思はない。實際、私はそんな事はなかつたものと信じて居る。馭者の證言や、恰度其時駈け着けた署長なぞも、其後知事が手に黄色い花束を持つて居る處へ出會したと公言はして居るが、彼は恐らく花のことなど全然氣が附かないで居たのだ。署長は名をフリブステーロフと云つて、熱心な官權の擁護者で有つた。近頃此町へ赴任して來たばかりだが、既に職務の勵行に於ける過度の熱心と猛烈さ加減とに依つて、又其の常習的酩酊に依つて有名なものと成つて居た。彼は馬車から飛出しながら、知事の容子を見ても一向頓着する處なく、一息に、狂氣染みた言葉で、而も飽迄自信の有る態度を持しながら、『町に騒動の起つた』旨をべら〳〵とまくし立てた。

『えゝ？何だ？』と、アンドレイ・アントノーヰーチは嚴しい顔を署長の方へ向けながら、毫も愕いた容子もなければ、馬車や馭者のことも忘れて、恰度自分の書齋にでも居るやうに訊き返した。

『警察署長フリブステーロフ、閣下よ。町には暴動が起りました。』

『海賊だ？』と、アンドレイ・アントノーヰーチは考へに沈みながら言つた。

『左樣ですよ、閣下。シュビーグリンの職工どもが暴動を起したので御座います。』

『シュビーグリンの職工ども！……』

シュビーグリンの名が何事かを彼に想ひ起させるやうに見えた。彼ははつとして指を額に當がつた。『シュビーグリンの職工ども！』默つて、矢張考へに沈みながら、彼は急ぎもせずに馬車の方へ歩いて行つた。それから馬車に乘ると、町へ駛るやうに馭者に命じた。署長も四輪馬車に乘つて後から續いた。

想ふに、彼は途中いろんな興味を惹く物のぼんやりした印象を殘した。が、自分の邸の前の廣場へ駈け着けた時は、別に判然した考へも、一定した計畫も有つて居なかつたやうだ。が、彼は徒黨の靜かに列を組んで待つて居る樣子と、巡査の哨兵線と、警務長の困り切つた顔——故とそんな顔をして居たものらしい——と、自分を待ち構へて居る一般の期待とを見るや否や、身體中の血が彼の頭へ上つた。眞蒼な顔をして、彼は馬車から降り立つた。

『脱帽！』と、彼は息も忙しく殆ど聞えない位の聲で言つた。『衆皆跪いて！』と、彼は金切聲を立てゝ、四邊の者を愕かせた。彼自身も愕いたらしい。恐らくは、此事情の想ひ懸けなさが、引續いて起つた事件の說明と成る外有るまい。謝肉祭に於ける自働鐵道の上の橋が小山を下り掛けたら、途中で停まることが出來ようか。更に都合の惡いのは、アンドレイ・アントノーヰーチは一生涯朗かな性格で通して來たので、何人に對しても叫喚いたり蹴つたりしたことは一度もない。斯ういふ人が、何かの事情で一度小山の橋を辷らせ掛けたら、それこそ一番危險なもので有る。何も彼も彼の眼の前をぐる〳〵廻つて居た。

『海賊！』と、彼は一層鋭どく、馬鹿げた叫喚を揭げた。彼の聲は其處でぷつつり切れた。彼は自分が何を爲ようと思つたかといふことも忘れて、同時に何事かを今直に爲なければ成らぬといふことを身體中に感じながら、ぼんやり立つて居た。

『殿樣！』と喚ぶ聲が群集の中から聞えた。一人の少年が胸に十字を切り出した。三四人の職工は實際地に跪かうとした。が、全團體は三歩許り前へ進んだ。不意に、衆皆が一時に饒舌り出した。『閣下よ……俺們は一期の約束で傭はれて居ました……支配人が……貴方が口を利いて下せへましよ』なぞと、口々に言ふので有る。何を言ふのか薩張解らなかつた。

あゝ！アンドレイ・アントノーヰーチは何事とも辨へ得なかつた。手には未だ花を握つて居た。暴動は彼に取つて、ステパーン・トラフィモーヰーチの囚人馬車と同じやうに實際で有つた。而も『、、、、ほんやり口を開いて自分を眺めて居る徒黨』の群の中を彼方此方駈け廻りながら、何やら周旋して居るピョートル・ステパーノヰーチの姿を認めたものらしい――日頃から憎んで居る、特に昨日から片時も忘られないピョートル・ステパーノヰーチの姿を。

『棍棒！』と彼は又一層想ひ懸けないことを言出した。少時死んだやうな沈默が續いた。

私は自分で見聞したり、若しくは推察した事實から言へば、事件の起りは斯んな風で有つたに違ひない。が、それからの成行に就いては、是程確かな報道も有つて居なければ、又左樣容すく推察することも出來ない。が、兎に角、或事實は有つた。

第一に棍棒が不思議な程迅速に其場へ持つて來られた。何うも悧巧な警務長の手で豫め用意して置かれたものらしい。尤も、實際毆られた者は二人か、高々三人より以上はなかつた。私は此事實を力說して置きたいと思ふ。徒黨の群全體、又は少くとも其半分が毆られたなどと云ふのは絕對に虛構で有る。又一人の貧しげな、乍併上品な貴婦人が通り懸りに捕まへられて、突然毆られたなどと云ふのも、根據のない說で有る。而も私は、其後彼得斯堡の新聞の田舍欄で、そんな記事を見たものだ。又、此町の多くの人々は墓地の傍の施療院に棲んで居るアブドーチャ・ペトローヴナ・タラービギンと稱ばれた婆さんのことを好く噂した。彼女は友達を訪ねて歸る途すがら、好奇心に誘はれて、見物の群集の中に割込んで行つたが、其場の光景を見て、思はず『まア酷いわねえ！』と叫んで地面へ唾を吐いた。其爲に彼女は捕まへられて、突然袋叩きに爲れたと云ふのだ。此話は新聞に出たばかりでない、皆昂奮して居た際だから、吾々は實際彼女の爲に寄附金を募つたものだ。私自身も二十哥寄附した。で、如何でせう　今に成つて見ると、其施療院にはタラービギンといふやうな婆さんは嘗て居たことがないと云ふのだ！私は自分で墓地の傍の其施療院へ訪ねて行つて見た。彼等はタラービギンといふやうな名前を聞いたことがないばかりでなく、甚だしいのは私から世上に行はれて居る話を聞いて、そりやア失敬だとばかり憤つて仕舞つた。私がわざ、わざ斯んな虛構譚を書いたのは、彼女の身に起つた事柄が――彼女が實際存在したものとすれば――其儘殆どステパーン・トラフィモーヰーチの身に起らうとしたからだ。實際又彼の冒險が此の馬鹿げた話の根柢に成つたのかも知れない。卽ち人の口から口へ傳つて行く間に、彼が其婆さんに作り變へられて仕舞つたのだ。

私が今日なほ了解に困難を感じて居ることは、二人が其廣場へ到着するや否や、彼がこツそり私から脫け出したことで有る。私も何か不慮の事が起りはしまいかと兼々案じて居たので、廣場を周つて、眞直に知事の立關へ彼を伴れて行かうとした。が、私自身の好奇心も刺戟せられた。で、私はほんの一瞬間立停つて、最初に出會した人に仔細を訊ねようとした。不意に振返つて見ると、最うステパーン・トラフィモーヰーチは私の傍には居ないので有る。直覺的に私は一番危險な場所へ行つたら一番早く彼を見附けられるだらうと思つて、其方へ駈け出した。何となく彼の樣も小仙の腹を辷り出したやうな氣がしたので有る。實際又私は彼を物の中心で見附け出した。今でも記憶えて居るが、私は彼の腕を摑んだ。が、彼は靜かに、如何にも權威を備へた人のやうな態度で私を見返つた。

『Cher（ねえ君）』と、彼は何處か張り切つた糸の鳴るやうな聲で言つた。『彼奴等が吾々の前に、公けの廣場で、是程無體に人民を取扱ふものとすれば、例へば、あん、な男からは何を爲れるか知れたものぢやないよ……彼奴が自分の權力の上に働かうとしたらばだね。』

斯う言つて、憤怒と、何人にでも挑戰しようとする張り詰めた希望に顫えながら、彼は二歩許り離れた處に立つ

て、私どもを見詰めて居たフリブステーロフを威嚇するやうに指差した。

『あんな男だ！』と、署長は憤怒に眼も晦んだやうに叫んだ。『何があんな男だ？　お前は何人だ？』彼は劍を握りながら傍へ近づいて來た。『お前は何人だ？』と、彼は病的な職務の熱中から、絶望的に昂奮して、病犬の樣に吠えた――私は彼がステパーン・トラフィモーギーチを十分見覺えて居る筈だといふことを一言して置く――次の瞬間、彼は相手の襟髪を掴んで引据ゑたに違ひない。が、幸ひにも彼が叫喚くのを聞いて、レムブケは頭を此方へ向けた。彼は何か考へてでも居るやうに、ぼんやりステパーン・トラフィモーギーチを見詰めて居た。不意に、彼は激しく手を振つた。フリブステーロフも漸と手を控へた。私はステパーン・トラフィモーギーチが一人引返さうとするのも頓着しないで、群集の中から引張り出した。

『自宅へ、自宅へ歸りませう』と、私は主張した。『私どもが毆られなかつたのは確かにレムブケのお蔭ですよ。』

『君歸りたまへ、ねえ君。斯んな危險な目に君を遭はせたのは僕の失念だよ。君は未來が有る、未來に或生活を有して居る。それに僕は――mon heure est sonné.（僕の時代は濟んだのだ。）』

彼は斷乎として知事の玄關を上つて行つた。取次の男は私を見知つて居た。私は二人がユーリヤ・ミハイローヴナに會ひに來たのだと告げた。二人は應接室に腰掛けて待つて居た。私は友達に眼を離すことが出來ないとは思つた。が、此上彼と談話をするのは無駄なやうな氣がした。彼の容子は祖國のために一身を死に捧げた人の樣に見えた。二人は並んでどなく、別々に隅の方に腰掛けて居た――私は入口へ近い處に、彼は稍離れて私に面しながら、何か考へて居るやうに頭を垂れたまゝ、輕く洋杖に恁れて居た。彼は左の手に緣の濶い帽子を持つて居た。二人は斯うして十分間も腰掛けて居た。

二

不意に、レムブケが警務長に伴はれて、ぼんやり私どもを見廻しながら足早に這入つて來た。そして、私どもには氣が附かないやうに、右手の自分の書齋へ這入つて行かうとした。が、ステパーン・トラフィモーギーチは彼の前に立塞がつた。一風變つたステパーン・トラフィモーギーチの身丈の高い姿が彼の眼に留つた。レムブケは立停つた。

『こりや何人だ？』と、彼は一寸麻誤つきながら、警務長に訊ねるやうに呟いた。尤も、彼は警務長の方へ頭は向けないで、始終ステパーン・トラフィモーギーチを見詰めて居た。

『前の大學助教授、ステパーン・トラフィモーギーチ・ヴェルホーヱンスキイです、閣下よ』と、ステパーン・トラフィモーギーチは應揚に頭を下げながら言つた。が、閣下は氣の脫けたやうな顏附をしながら、ぼんやり彼を見詰めて居た。

『何だと？』何か請願書を懷中して遣つて來た普通の人間とでも思つたので有らう、彼は大官らしい粗略を見せながら、さも面倒臭いと云つたやうに、ステパーン・トラフィモーギーチの方へ耳を向けた。

『私は閣下の名に依つて働く或役人のために、今日家宅搜索を受けました。それだから私はお願ひに……』

『名は？　名は？』と、レムブケは不意に何か想ひ當ることでも有るやうに、苛々しながら訊いた。ステパーン・トラフィモーギーチは更に威容を整へながら其名を繰り返した。

『あゝ　あれだ……あの溫床……貴方は彼樣いふ風に取られても仕方がないのだ……貴方は大學教授ですか、教授ですか。』

『私は嘗て、X大學の青年に對して或講義をする名譽を擔ひました。』

『青年！』と、レムブケは飛び上るやうに見えた。尤も、彼が此場の何物をも了解しない、恐らくは自分が何人と談話をして居るのだといふことも知らずに居たのだとは、私は賭をしても構はない。

『そりやァ許しませんよ』と、不意に恐ろしく昂奮して猛り立ちながら、彼は叫んだ。『私は何んな青年でも許しませんよ。こりやァ皆檄文の所爲ぢやないか。ねえ貴方、そりやァ社會に對する侵掠ですよ、海賊的侵掠ですよ、あゝ海賊……貴方は何を要求するのですか。』

『そんな筈はない、奥樣は私に明日お祭で何か講演して呉れるやうにお賴みに成つたのですからね。尤も、私は何にも要求に來たのではない、只私の權利を……』

『お祭で？　お祭なぞ有りやしない。私はお祭なぞ許しませんよ。講義？講義？』と、又彼は憤然として叫んだ。

『貴方も私に對して最少し鄭重に談話をして頂きたいものですね、閣下。私も子供ぢやないから、足踏みをしたり叫喚いたりされても困りますよ。』

『恐らく君は何人と談話をして居るのか解つて居るでせうね？』と、レムブケは眞赧に成りながら言つた。

『好く解つて居ります、閣下。』

『私は、君等が破壞しようと懸つて居る社會を保護して居るのだ！……君は……あゝ、僕は君のことも知つて居る。君はスタフローギン夫人の許で家庭教師をして居たのでせう？』

『左樣、私はまア……家庭教師の地位に居りました……スタフローギン夫人の許で。』

『で、二十年間、今日斯んな事に立到つた有らゆる物の溫床に成つて居たのでせう……其結果は……私は今廣場で君を見たやうに思ひますよ。君は用心した方が可いね、えゝ、用心した方が可いね。君の考へ方は好く知れ渡つて居るよ。私は君に眼を着けて居るから、左樣思つて居るが可い。私は君の講義なぞ許さない、斷じて許さない。そんな要求を持つて、私の許へ來たのですか。』

彼は再び書齋へ這入らうとした。

『閣下は、眞個思ひ違ひをして居られる。明日お祭で私に講義ぢやない、文學上の朗讀をして呉れるやうに賴んだのは、貴方の奥さんですよ。だが、私も今と成つては斷然お斷りしますよ。私は如何いふ譯で、何の爲に、何の理由で今日家宅搜索を受けたのか、一應貴方から說明して頂きたいといふことを切にお願ひ致します。私の書物や草稿や、私の許へ來た私信が、私から取上られて、手車に載せて、街中を引張られて行つたのですよ。』

『誰が君を搜索した？』と、レムブケは吃驚して飛び上りながら、始めて此場の地位をはッきり意識し得たやうに言つた。彼は急に顏中眞赧にした。そして、警務長の方へ振向いた。其時、ブルーメルの身丈の高い、前屈みの醜ともない姿が闕の上に現れた。

『えゝ、此處に居る此役人ですよ』と、ステパーン・トラフィモーヰチは彼を指差しながら言つた。ブルーメルは自分の責任を承認するやうな、同時に平氣な顏をして前へ出て來た。

『Vous ne faites que des bêtises,（君はそんな馬鹿な眞似しか爲ない男だ）』と、レムブケは憤怒と困惑の色を見せながら、彼に飛び兎つて行つた。不意に、彼は再びわれに反つたやうに全然一變した。

『いや、御免なさい』と、彼はすッかり萎げていよ〳〵眞赧に成りながら吃いた。『これは皆……恐らく間違ひですよ、誤解……誤解に過ぎませんよ……』

『閣下』と、ステパーン・トラフィモーギーチは言つた。『私は若い時分嘗て斯ういふ面白い出來事を目擊しました。或劇場の廊下で、一人の男が他の男に飛び蒐つて行つて、公衆の前で其男の横面をいやといふ程毆り着けた。直に相手は自分が毆つて遣らうと思つた人ではない、顏だけは一寸似て居るが、全然違つた人だと氣が附いて、彼はぶり〳〵しながら寸刻も猶豫するのが惜しいと云つたやうに――恰度今閣下が言はれたと同じことでさ――「私は間違ひをした……御免なさい、誤解ですよ、誤解に過ぎませんよ」と言ひましたね。で、毆られた男が腹を立てゝ叫喚き出した時、其人も到頭癇に觸つて言ひましたよ、「何うして？　僕は誤解だと言つてるぢやないか、何を君は叫喚くことが有るんだい？」と。』

『そりやア……大層面白い話ですがね』と、レムブケは唇を歪めて言つた。『ですが……ですが、貴方は私自身何んなに困つてるかゞ解らないのか。』彼は殆ど泣くやうに言つて、兩手で顏を蔽ひさうに見えた。

此の思ひ懸けない、殆ど嗚咽するかと思はれるやうな、憫れな絶叫は殆ど堪へられないやうな感を聞く者に與へた。恐らくは、前の日以來彼が凡ての起つた事柄に就いて、はッきりした意識を有つたのは、これが始めてで有らう。そして、それが蔽す處のない、可悼しい絶望と成つて表れたのだ――次の瞬間、彼が聲を揚げて泣き出さないとは誰が言へやうぞ。始めてステパーン・トラフィモーギーチも吃驚したやうな顏をして、彼を見遣つた。それから彼は不意に頭を下げて、同情に充ちた聲で言出した。

『閣下、私の詰らない不平なぞで、そんなに心配されることは有りませんよ。只、何卒私の書物や草稿を再び取返すことが出來るやうに命令して下さい……』

彼は途中で遮ぎられた。其瞬間、ユーリヤ・ミハイローヴナが歸邸して、一緒に行つた仲間を引連れながら、がや〳〵と這入つて來た。が、私は此點に於て出來るだけ委しく物語を進めて見たい。

三

先づ三臺の馬車に分乘した一行がどや〳〵と應接室へ這入つて來た。ユーリヤ・ミハイローヴナの部屋へ這入る入口は特に玄關の左手に設けて有つた。が、此際彼等は皆應接室を通つたものだ。想ふに、ステパーン・トラフィモーギーチが其處に居ると聞いたからに相違ない。彼の身に起つたこと、並にシュピーグリン事件は皆町へ歸る途すがらユーリヤ・ミハイローヴナの耳へ這入つたのだ。リャムジンは何か又不都合な事を仕出來して、一行の中へ招待されなかつた處から、何人よりも先に町で起つた事件を知つて、それを彼女に知らせに行つた。内心悦に入りながら、彼はよほ〳〵のコサック馬を傭つて、スクヴォーレジュニキに到る道を還つて來る團體に會はうとして駛らせた。想ふに、ユーリヤ・ミハイローヴナも日頃の「高邁な決心」は決心として、斯んな報知を聞いては稍退避いだで有らう。が、それもほんの一瞬間だ。例へば、此事件の政治的方面では彼女に不安を起させなかつた。ヒョートル・ステパーノギーチは三度乃至四度も、シュピーグリンの無賴漢どもは一つ打し附けて遣らねば成らぬと、彼女に勸めて置いた。又ピョートル・ステパーノギーチが近來彼女の眼に於ける唯一の權威で有ることは言ふ迄もない。『か……兎に角、私はあの人に思ひ知らせて遣らなければ置かない』と、彼女は一人で考へた。勿論、あの人と云ふのは彼女の所天のことだ。序ながら、私は此際ピョートル・ステパーノギーチが故意とでも有るやうに一行に加はらなかつたことを一言して置きたい。彼は一日中何人にも姿を見せなかつた。なほ私はヴルヴーラ・ペトローヴナが來客どもと一緒に――ユーリヤ・ミハイローヴナと同じ馬車で――町へ戻つて來たことを附け加へて置

きたい。明日の祭の準備のために開かれる最後の委員會に出席しようといふのだ。彼女は又リャムジンの知らせに來たステパーン・トラフィモーギーチの噂を聞いて、興味も感ずれば、恐らくは又昂奮もしたに相違ない。

アンドレイ・アントノーギーチの所謂思ひ知る時が直に遣つて來た。あゝ！彼は細君の顔を一目見た時からそれを感附いて居た。相手の心を蕩かすやうな微笑を漾へながら、彼女は直にステパーン・トラフィモーギーチの傍へ近づいて、手套を穿めたまゝの手を差出した。そして、媚びるやうな言葉を驟雨のやうに浴せ掛けながら挨拶した——到頭自分の宅でステパーン・トラフィモーギーチに會ふことの出來た嬉しさを述べて、相手の機嫌を取るのが此朝彼女の念頭に有る唯一の願ひでも有るやうに。其朝の家宅捜索に就いては何にも言はない、彼女は全然それを知らないやうにも見えた。又、所天に對しては一言も物も言はなければ、其方を振返つても見ない——彼が全然室の中に居ないかのやうに。更に甚だしいのは、彼女は直樣ステパーン・トラフィモーギーチを取上げて、客間へ伴れて行つて仕舞つた——彼がレムブケと全然會見をして居ない、若しくはして居ても、それを何時迄も待つて居る値打がないかのやうに。繰返して言ふが、私は此點でユーリヤ・ミハイローヴナが、貴族的な調子で物を言つて居たにもせよ、又大間違ひを遣つたものと考へる。カルマーヂノフが又特に其間違ひを大きくしたものだ。彼はユーリヤ・ミハイローヴナの特別の要求に依つて、此一行に加はつて居た。(それに依つて又偶然にも、ワルワーラ・ペトローヴナに訪問を拂ふことに成つた。彼女は又それを非常に悦んだ程憫れな氣持に成つて居た。)彼は一行の一番後から這入つて來たが、ステパーン・トラフィモーギーチの姿を見るや、先づ閾の上から聲を掛けた。そして、ユーリヤ・ミハイローヴナさへ遮ぎるやうにしながら、相手を抱擁するとて前へ乘り出して行つた。

『何年振かね、幾春秋かね！到頭……Excellent ami.(優れた友よ。)』

彼は相手に接吻しようとさへした、勿論頰を身替りにしてだけれど。ステパーン・トラフィモーギーチが又それに應ずることを避け得なかつた程媚びられたものだ。

『Cher(ねえ君)』と、彼は其晩一日の出來事を想ひ起しながら私に言つた。『僕は其瞬間自分ながら何方が一層下劣で有るかと考へて見たよ。只僕を見下げるために僕を抱擁して居るあの男と、あの男も、あの男の顔も蔑視しながら、傍を向くことが全然出來なかつたやうに、其場でそれを接吻した僕と……う——う！』

『さア、貴方の話をして下さい、何も彼も私にね』と、カルマーヂノフは二十五年の生涯の物語が、左樣容すく出來ることか何ぞのやうに、舌ッたるい言葉で言出した。が、そんな馬鹿な事が「お世辭」の頂點で有つた。

『えゝ、莫斯科のグラノーフスキイさんの宴會でお目に懸つたのが最後ですよ。あれから最う二十四年にも成りますかね……』と、ステパーン・トラフィモーギーチは穏やかに言出した——從つて高尚な「お世辭」らしい處は少しもなかつた。

『Ce cher homme,(此の親愛な友)』と、カルマーヂノフは誇大した親しさの下に、相手の肩を摑みながら、例のきい〳〵した聲で遮ぎつた。『ユーリヤ・ミハイローヴナさん、急いで二人を貴方の部屋へお伴れ下さい。彼處に腰掛けて、此人は何も彼も話して呉れますよ。』

『而も僕はあんな慣りッぽい、お婆さん見たやうな男と、些とも親しくはなかつたのだ』と、ステパーン・トラフィモーギーチはぶり〳〵しながら、其晩私に不平を言ひ續けた。『二人とも未だ子供だつたがね、僕はあの時分から彼奴が嫌ひに成つた……勿論、彼奴も僕が嫌ひだよ。』

ユーリヤ・ミハイローヴナの客間は直樣一杯に成つた。ワルワーラ・ペトローヴナは一生懸命冷靜に見えようと力

めながら、殊に昂奮して居た。私は彼女が一二度憎惡の眼でカルマーヂノフを、又憤怒の眼でステパーン・トラフィモーヰーチを――前以て慣つて置くので有る、嫉妬と愛から出た憤怒で有る……誰がそれを知らうぞ――ステパーン・トラフィモーヰーチを見遣るのに目を留めた。若し此際彼が失敗つて、大勢の前でカルマーヂノフに見下げられるやうなことを仕出來したら、彼女は屹度飛び出して彼を打据ゑたかも知れない。私はつい言ひ忘れたが、リザも又其處に居合せた。私は彼女が是程華やかにして、輕々しくはしやいで、幸福にして居たのを見たことがない。マヴーリキイ・ニコラーエヰーチも勿論其處に居た。ユーリヤ・ミハイローヴナの不斷の隨伴を形造つて居る若い婦人や、寧ろ粗野な若い紳士の間に――此人達の中では粗暴が快活と取られ、廉ッぽい皮肉が機智と取られる――私は二三の新顔を認めた。近頃此町を見物に來た如才のなささうな波蘭人や、自分で自分の頓智を面白相に大きな聲を出して笑ひ續けて居る巌疊な爺さんの獨逸人の醫者や、最後には彼得斯堡から來た、自働人形のやうな、いやに濟ました、恐ろしく高い襟を着けた貴公子なぞで有る。が、ユーリヤ・ミハイローヴナは此客を非常に鄭重にして、自分の家の客間に集まる人達が彼に與へる印象さへ大分氣に懸けて居るやうに見えた。

『Cher M. Karmazinov(わが愛するカルマーヂノフの君)』と、ステパーン・トラフィモーヰーチは給に畫いたやうな恰好をして長椅子に腰掛けながら、急に相手のカルマーヂノフと同程度に甘へた聲を出して語り始めた。『Cher M. Karmazinov（わが愛するカルマーヂノフの君よ、）吾々時代の人間といふものは、特に其人が一種の確信を抱いて居る場合には、二十餘年の歳月を隔てゝも一向變らないものゝ樣で御座いますね……』

例の獨逸人は、ステパーン・トラフィモーヰーチが何か滑稽なことでも言つたやうに思つたので有らう、突然大きな聲を出して馬の嘶くやうに笑ひ出した。後者は氣取つた吃驚の色を見せて、相手を見返して遣つた。が、先方は一向感じがないらしい。貴公子も襟と一緒に頭を向けて、鼻眼鏡を懸けながら其獨逸人を見遣つた。尤も、好奇心らしい色は露許りも見せない。

『……一向變らないものゝ樣で御座いますね』と、ステパーン・トラフィモーヰーチは一語々々出來るだけ無頓着に引張りながら、態と繰り返した。『で、私の生活も一世紀の此の四分の一を通じて矢張左樣でしたよ、et comme on trouve partout plus de moines que de raison,（それに、到る處坊主は有り過ぎる程有るんですからね。）私は全然左樣いふ說を持して居る處から、一世紀の此の四分の一を通じて、私は……』

『C'est charmant, les moines,（坊主は好う御座んしたね、）』と、ユーリヤ・ミハイローヴナは自分と並んで坐つて居るヴルヴーラ・ペトローヴナに囁いた。

ヴルヴーラ・ペトローヴナは尊大な眼附で見返したまゝ默つて居た。が、カルマーヂノフは此の佛蘭西語の成功を我慢し切れなかつたと見えて、卽座にステパーン・トラフィモーヰーチの言葉を遮ぎつた。

『私としては、左樣いふ方面ぢや眞個安んじて居ますよ』と、彼は例のきい〳〵するやうな聲で叫んだ。『過去七年間といふもの、私はカルヽスルーエに土着した。去年、新に水道を敷設する件が市會の議に上つた時も、私は心の中でカルヽスルーエの水道問題が、わが愛する祖國の有らゆる問題よりも、私に取つて一層重大でも有れば緊切でも有ると感じましたよ……此の所謂露西亞に於ける革命の時代に於てですね。』

『何うも御同情を禁じ得ないやうに思ひますよ、尤も、私の衷情に反對はして居ますがね』と、ステパーン・トラフィモーヰーチは意味有りげに頭を下げながら溜息を漏らした。

ユーリヤ・ミハイローヴナは得意氣に見えた。會話は政治的色彩を帶んで、愈々意味深く成つて來た。

『下水道？』と、例の醫者は大きな聲で訊いた。

『えゝ、水道ですよ、水道の方ですよ。私は其計畫を立てる際、彼等に一臂の力を貸しましたよ。』

醫者は又大聲を揚げて哄笑した。他の人々も目の前で其醫者を笑ひながら、それに倣つた。が、醫者はそれとも知らずに、衆皆が笑ふから、いよ〳〵愉快さうに見えた。

『貴方のお言葉には意味が有りますね、カルマーヂノフさん』と、ユーリヤ・ミハイローヴナは急に口を挾んだ。『カルヽスルーエはそれで好いにして、貴方は人を煙に巻くことがお所好ですよ。今度は私どもも貴方のお言葉を信じませんね。あれだけ多くの近代的典型を描いて、あれだけ多くの現代的問題を提供して、新しい活動的人物の典型を形造る近代の最も緊切な諸點に指を觸れたのは誰でした、何といふ露西亞の文學者でした？貴方ですよ、貴方ですよ、貴方の外に何人も居ないぢや有りませんか。貴方が幾許御自分の生れた國に對する冷淡を裝つてカルヽスルーエの水道に熱中するやうな風をしても、そりやァ駄目ですよ。はゝゝゝ』

『成程、それはね』と、カルマーヂノフは甘へた聲を出した。『私はボゴーチェフの性格に依つてスラヴ民族主義者の有らゆる缺點を描いた、又ニコーヂモフの性格では西歐讃美者の有らゆる缺點を描いた……』

『殆ど總てを描いた譯だね？』と、リャムジンが側から囁いた。

『だが、私は只暇潰しに、同胞の切なる要求を滿足するために、そんな事を遣つたのですよ。』

『貴方も最う御存じでせうね、ステパーン・トラフィモーヰチさん』と、ユーリヤ・ミハイローヴナは熱心に言葉を續けた。『明日私どもがあの美しい詩を讀んで聽かせて頂くことを……セミオン・ヤコヴレーヰチの優れた文學的產物の最後の一つで、「Merci（多謝）」と言ふんですよ。作者は其詩の中で、今後は最う筆を執るまい、何んな事が有つても、縱令御空の天使が、いや、有らゆる社交界の人々が思ひ直して下さるやうにお願ひしても、決して此の決心は翻へさない積りだと言つて居るんですよ。實際、あの方は今後ペンをお捨てに成るんですよ。で、此の美くしい「Merci（多謝）」は、多年の間自分の露西亞思想界に對する撓まない忠實を熱心に歡迎して呉れた公衆に對して、感謝の意を述べたものなんですね。』

ユーリヤ・ミハイローヴナは熱中の頂點に有つた。

『左樣、私は分袂を告げるんですよ。私は私の Merci（多謝）を述べて、此處を立つ。それから彼處で……カルルスルーエで……私は靜かに眼を瞑るんですよ。』カルマーヂノフはだん〳〵涙脆く成つて來た。

我國の大文學者の多くと同じ樣に――實際又我國には大文學者の多數が有る――彼も讃歎には敵し兼ねた。で、あれ程智性を有しながら、直にぐにやゝ〳〵と成りかけた。が、私はこれを恕すべきことゝ考へる。

『私はカルヽスルーエで眼を瞑るでせうよ。吾々が自分の義務を成し果てた時は、報酬なぞ求めないで、急いで眼を瞑る外に、吾々大人物に取つて爲ることは殘つて居ませんからね。私も左樣爲るんですよ。』

『何卒お住所を聞かせて下さい。私もカルヽスルーエへ行つたら、貴方のお墓を訪ねませうよ』と、獨逸人は無遠慮に笑ひながら言つた。

『近頃鐵道で死骸を送りますからね』と、不意にさのみ目立たない若い一人の紳士が言つた。

リャムジンは又愉快さうな聲を揚げた。ユーリヤ・ミハイローヴナは顏を蹙めた。其處へニコラーイ・スタフローヰギンが這入つて來た。

『如何したんです、私は貴方が收監されたと聞きましたよ』と、彼は大勢の前でステパーン・トラフィモーヰー

チに話し懸けながら、大きな聲で言つた。

『なに、そりやア……收……秋官の間違ひでしたよ』と、ステバーン・トラフィモーギーチは戯談に紛らした。

『ですが、そんな事が、豫て貴方にお願ひして置いたことに影響を及ぼすやうなことはないでせうね』と、ユーリヤ・ミハイローヴナは再び口を挾んだ。『私は貴方が全然私の知らなかつたそんな御迷惑のために、明日の文學會での講演をお斷りに成つて、折角樂しんで居る私どもを落膽お爲せに成るやうなことはなからうと信じて居ります よ。』

『私は何うも、今と成つては……私も……』

『ねえ、私は本當に困つて仕舞ひますよ、ヴルヴーラ・ペトローヴナさん……まアお察し下さい、私は此の露西亞でも最も有名な、獨立した思想家のお一人とお近附に成らうとして、是程憧れて居る際に――御覽なさい、ステバーン・トラフィモーギーチは不意に私どもを捨てゝ去らうと仰有るのですよ。』

『其の御挨拶は眞個恐縮の次第では御座いますが』と、ステバーン・トラフィモーギーチは叮寧に言つた。『併し私のやうな者の出席が、明日の貴方方の會にそれ程なくて成らんものだとは、何うも信じられませんね。それに、私も……』

『いや、貴方方は此人を增長させて仕舞ひますよ』と、ピョートル・ステバーノヰーチは室の中へ飛び込んで來ながら叫んだ。『私は今漸つと此人を捕まへた――ねえ、一朝の中に、此人は家宅搜索をされ、逮捕され、巡査に襟髮を掴まれ、此處では又貴婦人連が知事の客間で、此人の御機嫌を取つて居るぢや有りませんか。此人の身體中の骨が、嬉しさに痛んで居ますよ。夢にだつて、斯んな好い幸福を見たことはないでせうからね。これぢや如何しても社會主義者の内通を始めますよ。』

『そんな事はないでせうよ、ピョートル・ステバーノヰーチさん。社會主義もステバーン・トラフィモーギーチに認められないやうな、そんな小さな思想では有りませんからね』と、ユーリヤ・ミハイローヴナは力を罩めて後者の辯護をした。

『あゝ、それは偉大な思想だよ。だが、其の代表者は必ずしも偉大な人物とは限らないからね。Et brisons-là mon cher（で、其話は最う止さうぢやないか）』と、最後にステバーン・トラフィモーギーチは自分の息子に對して話し懸けながら、徐かに座から立上つた。

が、此時全然思ひも寄らぬ事情が降つて湧いた。フォン・レムブケは少時前から此室へ這入つて來て居た。皆彼が這入つて來るのを見たけれど、何人もそれに氣を留めないやうに見えた。前からの計畫に從つて、ユーリヤ・ミハイローヴナは矢張彼を無視して居た。彼は扉口に近く座を占めて、嚴格な顏をしながら會話に耳を傾けて居た。談、朝の出來事に及んだのを聞くと、彼は不安相に身體を搖振り始めた。特にあのしやちこ張つた高い襟に膽を奪はれでもしたやうに、貴公子の顏を見詰めて居た。それからピョートル・ステバーノヰーチの聲を聞いて、彼が飛び込んで來たのを見ると、不意に飛上るやうに見えた。ステバーン・トラフィモーギーチが社會主義者に關する一句を吐くや否や、レムブケは前に居たリャムジンを突き退けながら、つか〳〵と彼の傍へ行つた。リャムジンは故と愕いたやうな振をして、肩を摩擦つて、酷く打身を受けたやうな容子を裝ひながら、直に傍へ寄つた。

『默れ！』と、フォン・レムブケは吃驚したステバーン・トラフィモーギーチの手を掴んで、兩手で力一杯それを

捩ぢ上げながら言つた。『默れ！現代の海賊どもは最う露顯したぞ。何にも言ふな。私は最うそれ〴〵處置を取つた……』

彼は室中に聞えるやうな大きな聲で言ひながら、力を罩めて言葉を結んだ。其言葉の齎らした印象は普通成らぬもので有つた。總ての人は皆何か惡い兆せのやうに感じた。私はユーリヤ・ミハイローヴナが眞蒼に成つたのを見た。此結果は最一つ些細な出來事のために一層不好く成つた。それ〴〵處置を取つたと宣言した後で、レムブケはぐるりと向直つて、足早に扉口の方へ出て行つた。が、二足歩くか歩かない間に彼は絨氈に躓いて前へのめりながら殆ど倒れ相に成つた。一瞬間彼は自分が躓いた絨氈を見詰めながら默つて立つて居た。それから大きな聲で『取代へろ！』と言ひながら、室の外へ出て行つた。ユーリヤ・ミハイローヴナは其後から駈けて行つた。彼女の退出に續いて、何人とも、何事とも聞き分けられないやうな喧囂が起つた。或者は「氣が狂つたのだらう」と言つた。又或者は「好く發作の起る質だ」とも言つた。又或者は額に指を當がつた。リャムジンは隅の方で二本の指を額に當がつて居た。人々は何か家庭内の不和が有るのだらうと暗示した——勿論低い聲ぢや有るが。何人も帽子を取つて出て行くものはない、皆待つて居た。私はユーリヤ・ミハイローヴナが如何いふ風に處理したものか知らない。が、五分間後には、努めて平靜な顏を裝ひながら戻つて來た。彼女は細かな穿索を避けるやうに、アンドレイ・アントノーヰーチは少許昂奮しました。が、別に何でもない、あの人は子供の時分から左樣でした、明日のお祭にでも出席したら屹度氣分も引立つて來るだらうと返辭をした。それから二三のお世辭をステパーン・トラフィモーヰーチに振撒いて、では直に會議を開くからと、大きな聲で委員會の委員を招待した。其時始めて、委員會の會員でないものは皆自宅へ歸る仕度をした。が、此日の可恻しい出來事は未だそれで終ひには成らなかつた。

私はニコラーイ・スタフローギンが這入つて來た瞬間から、リザが目疾くそれを見附けて、凝乎と彼を見詰めたまゝ、其眼を離すことが出來ないで居るのに氣が附いて居た。餘り永く見詰めて居るので側の者も氣が着いた。私はマヴーリキイ・ニコラーエヰーチが背後から彼女の上へ負ひ被さるやうにするのを見た。何か彼女に囁かうと思つたものらしい。が、急に氣を變へて、惡い顏をして四邊の人を見廻しながら、直に身を退いた。ニコラーイ・フシェヴォロードヰーチも又側の好奇心を惹いた。彼の顏は平常よりも蒼く、眼には妙にぼんやりしてるやうな容子が見えた。前にステパーン・トラフィモーヰーチに質問を投げた後、彼は全く相手のことを忘れて仕舞つたらしい。私は彼が此家の女主人に挨拶をすることを忘れたのぢやないかと思つた。彼は一度もリザの方を見なかつた——見まいとして見ないのではない、彼女のことも同樣に氣が附かないのだとしか思はれなかつた。で、不意に、ユーリヤ・ミハイローヴナが會議を開かうとして、委員會の委員を麾いだ後、一寸沈默が續いた時、リザのわざ〳〵張上げた、鈴のやうな聲が猶豫なく響き渡つた。彼女はスタフローギンを喚び懸けた。

『ニコラーイ・フシェヴォロードヰーチ、貴方の奥樣の兄さんだと云つて、自分で貴方の親戚だと稱してる大尉が、えゝ、其人の名はレビャードキンと云ふのですよ、貴方のことを惡く言つては執拗く私に手紙を寄越して、事情に據つては貴方の祕密をお話しても可いと言つて來るんですがね。あれが本當に貴方の御親戚でしたら、何卒最う二度とそんな手紙を寄越さないやうにして、斯んな不愉快な目から私を救つて下さいませんでせうか。』

女の言葉には思ひ切つた挑戰の響が籠つて居た。總ての人が又それを認めた。此非難は確かに利いた——恐らく彼女自身も思懸けなかつたらうけれど。彼女は眼を瞑つて屋根から飛び降りる人のやうに見えた。

が、ニコラーイ・スタフローギンの返辭が又一層思ひ懸けないもので有つた。第一不思議なのは、彼は少しも愕

いたやうな容子を見せなかつた。そして、一絲亂れない注意を拂つてリザの言ふことを聽いて居た。彼の顏には迷惑の色もなければ、憤怒の痕も見えなかつた。單純に確乎とした、寧ろ待ち設けて居たやうな態度で、彼は致命的な返辭をした。

『左樣、私は不幸にもあの男の親戚に成つて居ます。私は最う五年も前からあの男の妹と夫婦に成つて來ました。御安心なさい、私は出來るだけ早く貴方の使命をあの男に傳へませう。私は諦合つて、今後再び貴方に御迷惑を懸けさせないやうに致しますよ。』

此時ヴルヴーラ・ペトローヴナの顏に表れた恐怖の色を私は生涯忘れることは有るまい。誰かに打たれるのを避けでもするやうに、右の手を擧げながら、彼女はふら〳〵と立上つた。ニコラーイ・フシェヴォロード・ギーチは彼女を見遣つた、リザを見遣つた、見物人を見遣つた。それから、不意に無限の侮蔑を罩めたやうな微笑を漏らした。彼は碇かりした步調で室の外へ出て行つた。彼が出て行くや否や、リザは長椅子から飛び上つて、明かに彼の後を追はうとするやうな擧動を見せた。が、彼女は自ら制して駈け出しはしなかつた。彼女は何人にも挨拶をしなければ、見返りもしないで、只彼女の後から駈け出したマヴーリキイ・ニコラーエヴィーチに伴はれながら、徐かに室の外へ出て行つた。

其晩町で起つた喧囂と風評とを、私は更めて書かうとはすまい。ヴルヴーラ・ペトローヴナは町の邸に閉籠つて居た。ニコラーイ・フシェヴォロード・ギーチは、噂に聞けば、母親にも會はないで、眞直にスクヴォーレジュニキへ行つたさうな。ステパーン・トラフィモーヴィーチは其夜 cette cher amie（わが親愛なる友）の許へ私を使者にして、一度會ひに行くことを許して貰ふやうに請はせた。が、彼女は私にも會はうとしなかつた。彼は恐ろしく顚倒して、涙さへ流した。『そんな結婚！家庭の中にそんな怖ろしいことが！』と、彼は何時迄も繰返した。が、彼は又カルマーヂノフのことを想出して、怖ろしく彼を罵詈した。彼は又一生懸命朗讀の用意に取懸つた。そして――これが藝術家氣質と云ふので有らう！――彼は鏡の前でそれを諳誦した。又、次の日の朗讀の中へ挿入するために、一生の間に自分の言つた警句や戯談の備忘錄に書き留めて有るのを片端から讀返したものだ。

『ねえ君、僕は大いなる主義のために斯んな事も爲るんだよ』と、彼は言譯らしく私に言つた。『Cher ami（ねえ君）、僕は二十五年の間凝滯して居た。處で、不意に動き出した――何處へ行くのか、僕も知らない――が、兎に角僕は動き出したんだよ……』

第三卷

第一章　祭の第一部

一

前の日のさま〳〵な混雜にも怯けず、祭はいよ〳〵執行はれた。縱令前の夜レムブケが死んだとしても、其祭は次の朝執行はれたに相違ない――其位までユーリヤ・ミハイローヴナはそれに重きを置いて居たのだ。あゝ、最後の瞬間まで彼女は盲目で有つた。公衆の感情狀態に就いて何等の豫想をも有たなかつた。何人も此祭の日が何か知ら起らないで、人々の言ふ處に從へば、何か知ら『大破綻』が起らないで濟むものとは思つて居なかつた。實際多くの人々は眉を顰めて、外交的な顏附を裝つたものだ。が、一般に云へば、露西亞人といふものは公けの誹謗や騷動を過度に嗜むもので有る。尤も、吾々も單に騷動が起れば可いと思ふ外に、眞面目に何事かを感じては居た。一般に人心が苛々して、和解し難い憤怒の情が有つた。有らゆる人が、有らゆる事を憎んで居るやうに見えた。一種の迷亂した皮肉、强ひられた、緊張した皮肉が有らゆる人の心を支配した。左樣いふ迷亂に拘はらない人といふのは只婦人連ばかりで有つた。彼等は只一點に於て明かで有つた。卽ちユーリヤ・ミハイローヴナに對して悔ゆる處のない憎惡の念を抱いて居る。婦人連の意見も區々に違つては居たが、此點に於ては皆一致して居た。そして、彼女は可哀相にそんな事とは露ほども知らないのだ。最後の瞬間まで、彼女は自分が『追隨者に取卷かれて居る、』

又其追隨者は『彼女に對して狂的に心服して居る』ものと信じ切つて居た。

さま〳〵な種類の下劣な連中が吾々の町へ出現するやうに成つたとは、既に前にも言つて置いた。過度時代には、常に下劣な人間が到る處幅を利かすもので有る。私は所謂首領連に就いてこれを言ふ者ではない。彼等は兎にも角にも一定の目的のために働いて居る。私は寧ろ只やくざ者に就いてのみ言ふので有る。如何なる過度の時代にも、有らゆる社會に存在する此のやくざ者が出しやばつて來る。彼等は嘗に一定の目的を有しないのみならず、思想の一片すら有つて居ない。それで居て、無暗に時代の不安や病弊を云爲するのだ。加之、此のやくざ者どもは屹度知らず〳〵、或主領連の支配下に落ちるのだ。そして、其の主領連が飛び離れた馬鹿でない限り——左樣いふことは間々有得る——心の儘に此のやくざ者どもを使役することが出來るのだ。何事も終つた今では、吾々の中にピョートル・ステパーノヰーチが萬國勞働協會の主領連に率ゐられ、ユーリヤ・ミハイローヴナはピョートル・ステパーノヰーチに率ゐられ、其又ユーリヤ・ミハイローヴナは有らゆる種類のやくざ者を率ゐて居たといふやうな噂が行はれる。中にも比較的眞面目な醒めた人達は、如何して自分が一時あんな馬鹿な心持に成つたらうと審りながら、今更自分で自分を驚いて居る。

一體吾々の時代の騷擾が何から成立して、吾々が何んな過度時代を通過して居たかといふことは、私は知らない、又何人も知らないだらうと信ずる。而も何等の價値もない奴等が不意に勢力を得て、從來口を開くことも敢て爲なかつた有らゆる神聖なる物を聲高に批評し始めた。それに反して、是迄滿足に權力を握つて居た連中は、口を噤んで其奴等の言ふことを聽いて居るやうに成つた。中には恥しげもなく賞讃の馬鹿笑ひを惜しまない人達も有つた。リャムジンとかテリャートニコフとかいふやうな連中を始めとして、其他生れながらの無賴漢や破落戸ども、鐵面皮な猶太人、馬鹿笑ひをする旅客、首都の進歩した傾向を輸入して來た詩人、思想も才能もない處から、百姓の着る外套や破れ靴で間に合せて居る藝術家、服務の無意味を嘲笑しながら、何時でも剩餘金のために劍の鞘を脱しようとして居る士官ども、進歩した思索家や、進歩しつゝ有る商人ども、無數の神學書生、婦人問題の代表者たる婦人連——斯ういふ者どもが不意に吾々の町で權力を揮ふやうに成つた。一體何人の上に？俱樂部の上に、眞面目な役人の上に、義足の老將軍の上に、地方の社交界に於ける最も嚴格な、近つき難い貴婦人どもの上に。例のヴルヴーラ・ペトローヴナですら、息子との大破綻の時が來るまで、殆どこんなやくざ者どもの掌中に有つたとすれば、他の地方的ミネルヴァどもが一時行く道を誤つたとて、深く咎めるにも當るまい。

繰返して言ふが、吾々の中にも、尙最初から遠く離れて居て、甚だしいのは戸を鎖して、人と接しないやうにして居た少數の一團も有つた。が、何んな戸を鎖した處で、自然の方則には勝たれない、何んな注意深い家庭の中でも、娘どもは成長する。成長した娘どもに取つては、舞踏は嘗て見ないやうな、華やかな催しで有らうと豫想されて居た。いろ〳〵眼を瞠るやうなことが語られた。の人々は矢張保姆教育の資金へ寄附することに成つた。

舞踏は嘗て見ないやうな、華やかな催しで有らうと豫想されて居た。いろ〳〵眼を瞠るやうなことが語られた。鼻眼鏡を懸けた遠方の貴公子も澤山有るといふやうな噂も有つた。左の肩に薔薇の花を附けた、皆若い洒落者の幹事が十人も有るといふやうな噂も有つた。彼得斯堡からわざ〳〵遣つて來て、萬事を指揮するといふやうな噂も有つた。又カルマーヂノフが、資金の寄附を增すために、保姆の衣裳を着て例の Merci（多謝）を朗讀することを承知したといふやうな噂も有つた。それから皆衣裳を着けて文學的四部曲を演ずると云ふのだ。各々の衣裳が思想上の特殊な時代を象徵化したものだと云ふので有る。最後に『眞正な露西亞の思想』が衣裳を着けて踊る——こればか

りでも珍らしい觀物に相違ない。何人か寄附せずに居られようか。誰も彼も皆寄附した。

二

祭の番組は二部に分たれて居た。正午から四時迄が文學會、其後十時から徹宵舞踏會が續く。が、此番組の中に既に混亂の種子が藏されて居た。第一最初からして、文學會の直ぐ後で、勿論無代で、三壺酒を添へて開かれる筈の小やかな晩餐に關して、公衆の間に一種の風說が立つた。三留布といふ切符の莫大な値段が此の風說に勢を添へた。『人が無代でも寄附するか何ぞのやうに、祭は二十四時間懸るといふぢやないか、左樣すりや食物の用意も有る筈だ。皆腹が減つて仕舞ふだらうよ。』斯んな鹽梅に、町の中では皆理窟を揑ねた。實際、ユーリヤ・ミハイローヴナは自分でも輕躁な心から此の厄介な風說に勢ひを添へるような眞似を幾許もして居たのだ。一箇月も前から、此大計畫の符呪にかゝつて、彼女は會ふ人毎に其話をして居たが、終ひには彼得斯堡の或新聞へ、自分の祭のために豫約された祝辭と演說とに就いて、一片の報道を寄せたものだ。當時最も深く彼女の心を惹いたものは、それ等の祝辭で有つた、彼女は自分でも祝辭を述べようと思つて、絕えずそれを心の中で準備して居た。先づ自分達の旗幟を世に明かにしなくては成らない――何が旗幟だ？ 私は彼女が要するに何にも準備して居なかつたことを公言しても可い――それが彼得斯堡や、莫斯科の新聞にも出て、權門勢家の感動を惹かなければ成らない。それから其思想が露西亞の各州に擴まつて、人々の驚歎と模倣とを促がすやうに成らなければ成らない。

で、祝辭が有るとすれば、三壺酒が必要で有る。又三壺酒も空腹では飲まれないからして、是非晩餐が必要といふことに成る。其後、彼女の盡力に依つて、委員會が開かれ、眞面目に此問題を研究し始めた時、斯ういふ事が彼女にも解つて來た、若し彼等が晩餐なぞゑ夢みて居たら、幾許寄附金が集つたにしても、保姆教育の資金には極めて僅少の金子しか殘らないと。此の困難から遁れる道は二つしかない。祝辭や演說を盛にした嘶鑵を張つて、保姆のためには九十留布位殘して置くか。それとも巨額の金子を殘して、祭は只それを集める形式だけにして置くか。尤も、委員會は只彼女を脅かして見ただけで、別に第三の手段を編み出した。卽ち兩方の利益を立てようとする極めて合理的なもので、三壺酒だけは拔きにするが、祭も相應に遣つて、金子も九十留布處でない、相應の金額を殘して置く。が、ユーリヤ・ミハイローヴナはそれに同意しなかつた。彼女の自尊心はそんな些々たる妥協を容れないので有る。若し原案が實行出來ないものとすれば、直に反對の極端に馳る、卽ち他の州の羨望の的と成るやうな莫大の寄附金を殘して置くべきだと主張した。『公衆も理解して呉れなくちや成りませんよ』と、彼女は委員會に於ける火のやうな演說の結論として言つた。『一般人類の利益を圖るといふことは、一時の肉體的享樂なぞとは較べ物に成らぬ程、高尙な事業で御座いますからね。祭も其精神に於ては大きな思想の宣言に過ぎない。從つて私どもも單に象徵としての極めて乏しい獨逸式の舞踏に滿足しなくちや成りませんよ――若し私どもが如何してもそんな厭ふべき舞踏會を止める譯に行かないとすればで御座いますね。』彼女が舞踏會に對して不意に抱いた憎惡の念は、眞個激しいものが有つた。が、彼女も終ひには漸つと宥められた。『文學的四部曲』や其他の美的條目が、內體的享樂の代償として催されることに成つたのも、其時で有つた。カルマーヂノフが到頭『Merci（多謝）』の則讃を承知して――其時迄彼は何かと躊躇して、相手を焦らして居たものだ――それに依つて、不攝生な公衆の心から喰ひ物なぞと云ふ考へを根こぎにしようと企てたのも、其時で有つた。斯くの如くにして、舞踏會は別樣の體裁とは云へ再び華やかなものと成つた。又餘り精神的に成つても好くなからうといふ處から、檸檬を入れたお茶と圓いビスケット

を舞踏會の初めに出して、其後檸檬水に水を混ぜて振舞ふといふことに成つた――が、其他には何にもない。何處でも始終空腹を感じて、特に飲料を欲しがる連中のためには、別に一番端れに酒保を開いて、それを倶樂部の料理番の頭のプロホローギーチに一任して置く。料理番は委員會の嚴重な監督の下に、何でも望まれるものを一定の値段で供給する。そして、喰べ物は餘分で有るといふ張札を食堂の扉に貼つて置かうと云ふのだ。が、朝の間は、朗讀の邪魔に成るだらうといふ懸念から、一切酒保は開かないことに成つた。尤も酒保はカルマーヂノフが『Merci（多謝）』を朗讀しようといふ大廣間とは、室が五つも隔つては居たけれど。

委員會が、其中の最も實際的な人々ですら、此朗讀に法外な結果を豫期して居たのは、著しい事實で有つた。詩的傾向を有つた人としては、例へば州會議長の夫人の如きカルマーヂノフに對して、朗讀が濟んだら、自分は直に大廣間の壁に大理石の石板を張り着けて、其上に何年何月何日、此處で、此場所で、露西亞並びに歐羅巴の一大文學者が一代の筆を擱かうとして、『Merci（多謝）』を朗讀した、そして、それに依つて始めて、此町の主なる市民に依つて表された露西亞の公衆に分袂を告げたと云ふことを金字で表はして置く、從つて其記念は其夜の舞踏會で卽ち『Merci（多謝）』が朗讀された後五時間にして、衆皆の眼に觸れるだらうなぞと言つて居た。實際、委員會の會員から、寧ろ自分達が從來の習慣に反するものとして、二三の抗議が有つたにも拘らず、何んな事が有つても朝自分が朗讀をする間は酒保を開かせないと主張したのは、カルマーヂノフ彼自身で有つた。

町の中では人々が未だ委員會に依つて用意された饗筵を豫期して居る間に、事件の成行は斯くの如きもので有つた。町の人々は最後迄それを信じて居た。若い婦人連ですらなほ菓子や氷や、其他自分達の想像にも及ばない物が出るだらうと夢想して居た。人々は皆寄附金が非常な額に達したことを知つて居た。町中が擧つてそれに赴いた。

近隣の田舎からもどし〳〵遣つて來て、切符が最う足りない。又切符代として拂はれた金額を外にして、少からぬ寄附金が集まつたといふことも知れ渡つて居た。例へば、ヴルヴーラ・ペトローヴナは切符代として三百留布を支拂つた外に、殆ど溫室の花卉を擧げて室の裝飾に供給した。州會議長の夫人は又委員會の一員として、建物と、燈火とを提供した、倶樂部は音樂と給仕人とを供給して、プロホローギーチをも全一日貸與することにした。其他それ程ではないにしても、さま〳〵な寄附の申込みが有る。眞個三留布の切符代を二留布に引下げたら可からうといふやうな說が出た位で有つた。實際、委員會は最初三留布は若い婦人の身としては多きに過ぎやしまいかと心配して、家族切符を出さうかと言出したことも有つた。卽ち一軒の家庭では一人の娘に對して支拂へば可い、他の婦人連は縱令一軒に十二人の女が出るとしても無代で入場を許さうといふので有る。が、そんな懸念は盡く無用で有つた。來る者は皆其若い婦人連で有る。赤貧の書記ですら皆其娘を伴れて來た。若し其娘がなかつたら最初から切符代なぞ寄附しようとは思はなかつたに違ひない。或名もない小祕書官の如きは七人の娘を盡く伴れて來た。それも細君と一人の姪とを別にしてど有る。それ等の婦人連が手に〳〵三留布の入場切符を握つて居たものだ。

何んな騷ぎが町の中に起つたかは想像するに難くない。祭が二部に分たれたため、婦人連は皆朝の文學會と夜の舞踏會と、二對の晴着を必要としたと云ふだけでも思ひ遣られやう。中流の家庭では、後で判つたことだが、其日のために皆自分達の所持品を何でも彼でも、亞麻布や、毛布や、蒲團迄、二三年前から此町へ多數入込んで來て、年々〳〵數の殖えて行く猶太人の店へ質入した。役人といふ役人が皆月給の前借りをした、地主の或者は手離し難い家宅を賣却した。それが皆單に自宅の娘や細君どもを侯爵夫人のやうに仕立てゝ伴れて行かう、人並に負けないやうに爲ようためばかりで有る。服裝の立派なことは、此の近隣ぢや前代未聞の盛事に屬して居た。二週間も前から町

中が滑稽な話でごつた返して居た。それを又猪口才どもが一々ユーリヤ・ミハイローヴナの許へ知らせに行つたものだ。戲畫は手から手に移つて行つた。私もユーリヤ・ミハイローヴナの畫帖の中で、其種の畫の二三を見たことが有る。左樣いふ事が又戲談の種子にされた家族の耳へも這入るのだから堪らない、ユーリヤ・ミハイローヴナに對する憎惡の念が町の中で一般に激しく成つたのも、それが因を成したのだ。尤も、今ぢや大抵の人は彼女のことを鼻の先で冷笑して居る。が、當時に在つては、委員會が一すでも彼等に不快の感を抱かせたり、若しくは舞踏會で何か間違つた事でも有つたら、愕くべき勢で憤怒が破裂しさうな形勢で有つたことは爭はれない。それなればこそ、各人密に事有れかしと豫期して居たのだ。又それ程豫期されて居たら、事が起らずに濟む譯も有るまい。

奏樂部はかつきり十二時に打出した。幹事の一人として、卽ち「薔薇の花を附けた十二人の若者」の一人として、私は此眼で其日の恥づべき追憶の次第を見たものだ。先づ入口へ大浪のやうな群集が押寄せた。巡査を始めとして、何も彼も其日都合惡く行つたのは如何した譯で有らうか。私も眞當面な公衆を非難するものではない。家々の父親どもは妻子を伴れて來ながら、別に騷ぎもしなければ他人を押退けて前へ出ようともしなかつた。反對に、私は彼等が入口を取圍んで、先を爭つて入場しようとして居る、此町ぢや聞いたこともないやうな押合ひへし合ひの群集を見ながら、街の眞中に迷惑さうに立つて居たといふ話も聞いた。其間には追々馬車も詰め掛けて來て、終ひには街を塞いで仕舞つた。私がこれを書いて居る今では、此町の最下層の破落戸どもが、リャムジンやリープティンの手で、恐らくは又私と同じやうな幹事の或人々の手で、切符なしに伴れ込まれたといふ事實も明白に擧つて居る。兎に角、何處から來たとも判らないやうな、全然知らない顏の連中が押掛けて來た。左樣いふ連中は會堂へ入るや否や、前以て敎唆されでもしたやうに、突然酒保は何處に有るかと訊いたものだ。で、酒保はないと言はれると、其奴等は正面から遠慮會釋もなく罵り出した。彼等の或者は這入つて來る前から醉拂つて居た。又或者は嘗てそんな立派な物を見たことがないのでも有らう、野蠻人のやうに會堂の莊麗に見惚れて居た。で、一瞬間は口を開いてそれに見惚れながら鎭まつて居た。此の大廣間は、建物は少しく崩れ懸つて居たが、眞個莊麗なもので有つた。大きさも素張しく、窓が二列に成つて、古風な天井は鍍金した彫物で蔽はれて居た。兩側の壁には幾つも鏡が懸つて、赤や白の窓掛が下つて、其下に何かは知らぬが、兎に角大理石の立像が數多並んだものだ。家具は眞紅の天鵞絨の布片を張つて、白に金鍍金をした那翁時代のどつしりした物で有つた。室の一端には、一段高い臺を設け、吟詩や朗讀をする文學者連の座席にして、其他は劇場の土間の樣に聽衆の通路を除いて廣間全體に椅子が並べて有る。

が、最初の驚歎が濟むと、今度は馬鹿げた質問や抗議が續いたものだ。『俺達は何も朗讀が聽きたい譯ぢやない：：：俺達は錢を拂つて來たんだよ：：：：喰ひ物は何處に有るんだ？：：：：瞞したら承知しないぞ：：：：俺達がお客樣だ、レムブケ一家ぢやない！』實際、彼等は騷がせるために伴れて來られたやうにも見えた。私は特に和蘭人形のやうな顏をしたハイカラ貴公子――昨日の朝私がユーリヤ・ミハイローヴナの邸で會つた――の名を擧げた一問着を記憶えて居る。彼は彼女の切なる望みに任せて、左の肩に薔薇の花を附けて、幹事の一人と成ることを承諾した。此のむツつりした蠟人形は物こそ言はないが、働けば働ける男だといふことが判つて來た。一人大きな圖體をした痘痕面の大尉が一群の破落戸どもを後へに從へながら、『酒保は何處だ、何處へ行くのだ？』と、騷ぎ立てよ困らせた時、彼は通り懸りの巡査に合圖をした。彼の合圖は卽座に應じられて、醉拂ひの大尉がじたばたするにも頓着せず室の外へ引張り出された。其間にはおひ〳〵眞面目な公衆も繰り込んで來て設けの席に着いた。がや〳〵言ふ連中も一時鎭まつて來た。が、公衆は極めて眞面目な人々でさへ何やら不滿足らしい、きよと〳〵當惑した容子

をして居た。婦人連の中には實際悸惧を抱いたのも有つた。

兎に角一同席に着いた。奏樂も止んだ。人々は皆四邊を見廻しながら、鼻を啜つた。彼等は皆餘りに嚴肅な態度で待つて居た。左樣いふのは何時も餘り好い徴候ではない。が、如何したのやらレムブケ一家は未だ見えない。絹や天鵞絨や金剛石が、彼方にも此方にもぴか〳〵した。香水の匂ひが空中に漲つた。勳章の有る者は皆それを着けて遣つて來た。老人でさへ制服を着けたものだ。最後に州會議長の夫人がリザを伴れて這入つて來た。其朝ばかりリザが眼も眩むやうな、華かな服裝をして出たことは嘗て有るまい。彼女の髪は捲髪に縮らされて、眼は輝き、微笑は彼女の顏を晴やかにした。彼女の姿は眞個人目を引いた。人々はじろ〳〵と彼女を見遣つては、又何か囁いて居た。彼等は、彼女がスタフローギンを捜して居るのだと言つた。が、スタフローギンもヴルヴーラ・ペトローヴナも其處には居なかつた。一時、私は何うしても彼女の顏の表情を理解することが出來なかつた。如何してあんな愉快さうな、嬉しさうな、生々とした顏をして居るのか。私は前の日の出來事を想出して、何うしても合點が行かなかつた。

が、未だレムブケ一家は遣つて來ない。これは確かに失策で有つた。私はユーリヤ・ミハイローヴナが最後の瞬間迄ビョートル・ステパーノヰーチを待つて居たのだといふ話を聞いた。此男が居なくては、彼女は手も足も出ないので有る。尤も、左樣言つたら、彼女は自分ぢや承知すまいが。序ながら言つて置きたいのは、前の日の最後の委員會でビョートル・ステパーノヰーチが飽迄幹事の薔薇の花を附けることを拒んで、殆ど泣かんばかりに彼女を失望爲せたと云ふことで有る。加之、彼は朝の間姿を隱して、文學會には全然顏を見せなかつた。何人も晩迄彼を見た者がない。これには彼女も愕いた。愕いた許りでなく、後には狼狽して來た——尤もこれは後の話だけれど。で、公衆も終ひには苛立たしいやうな不安の徴候を見せて來た。何人も未だ壇の上へは現れない。背後の方では、劇場と同じやうに、がや〳〵喧鳴り始めた。年老つた紳士や貴婦人どもは顏を蹙めた。『レムブケ一家は勿體振るのも好い加減にするが可い。』上品な聽衆の中にも、恐らく祭は中止に成るかも知れない、レムブケは屹度身體が良くないのだなぞと云ふやうな、途方もない囁き聲がだん〳〵勢力を得て來た。が、有難いことにはレムブケ夫妻も、夫人は所天の腕に凭りながら、到頭遣つて來た。私は自分でも彼等の出席に對して、非常に危惧を抱いて居たことを告白しなければ成らぬ。が、風評は消えて事實が勝利を得た。聽衆はほつと息を吐いた。レムブケ其人も極めて壯健に見受けられた。想ふに、何人も彼も左樣思つたらしい。多くの眼が彼の上に注がれて居た。實際又上流の人々の中には、彼の身に何か異變が有りはせぬかと疑ふやうな者は殆ど一人もなかつた。これが此町の社交界に於ける特徴でも有る。彼等の眼には、此知事の遣口も極めて當然の事として映つて居た。加之、彼が昨日の朝官邸の前の廣場で取つた處置の如きも、正常なものとして賞讃されるのだから堪らない。

『そりや如何したつて左樣するのが當然だよ』と、上級の役人どもは言つて居た。『何人でも最初は博愛家として乘出すものゝ、終ひにはあんな事に成るんだよ。博愛其者の見地から見ても、あれが必要なんですからね。』——斯う云ふのが、少くとも倶樂部の意見で有つた。彼等は只知事が餘りに昂奮したと云ふので、それを非難して居た。

『あれは最う少し冷靜に處置すべきものだよ。尤も、あの人も未だ慣れないのだらうがね。』

總ての人の眼は同じくユーリヤ・ミハイローヴナの上にも熱心に注がれた。勿論、前の晩彼女と所天との間に何んな事が有つたか、詳しいことを私に聽かれた處で仕方がない。只、私もこれだけの事は知つて居る。前の夜彼女はアンドレイ・アントノーヰーチの書齋へ行つて、夜半過ぎる迄其處に談話をして居た。アンドレイ・アントノー平

ーチは慰めもされ、罪も宥された。二人はすッかり仲直りが出來て、何も彼も忘れて仕舞つた。で、此會見の終りにレムブケが前夜の最後の出來事を想出しながら跪いて、宥恕を乞はうとした時、妻の柔かい手が、後には其唇が此の騎士的な、乍併感情に弱い所天の火のやうな懺悔の繰言を喰ひ留めた。誰も彼も彼女の顏に幸福の色を讀んだ。彼女は莊麗な服を着けながら、心置ない態度で徐々と歩んで來た。彼女は希望の頂點に有つた。祭は、彼女の外交術の目標でも有れば、王冠でも有つた祭は實現されたので有る。二人は壇の正面なる自分達の席へ歩み寄つた、彼方へも此方へも挨拶した、又挨拶を返した。二人は直に取捲かれた。州會議長の夫人は二人を迎へに立上つた。

が、其瞬間恐るべき間違ひが起つた。奏樂部が突如として或前奏曲を打出した。それが何かの進行曲でもなければ、體を成した一曲でもない、普通倶樂部なぞで祝盃を擧げる時に奏せられる樣な前奏曲で有る。私は今に及んでこれがリャムジンの仕業で有る、幹事の職權として、彼かレムブケの入場を盛にするためにこんな事を爲たのだといふことを知つて居る。勿論、彼はこれを間違ひだとも、餘りに熱中した失策だとも辯解することが出來た……あゝ！私は當時知らなかつたが、最早何人も辯解なぞといふことを氣に懸けては居ない、そんな事を氣に懸けるのは今日から時代後れに成つて居たのだ。が、其前奏曲が終りではなかつた。此の迷惑な吃驚と、聽衆の微笑との最中に、不意に室の外れから『萬歳』の聲が聞えた、又廊下からも、それが皆レムブケを歡迎する意らしい。萬歳の數は多くなかつた。が、少時の間續いて居た。ユーリヤ・ミハイローヴナは顏を赧らめた。彼女の眼は閃いた。レムブケは椅子の傍に立停つて、聲する方へ向きながら、嚴然として聽衆を眺め遣つた……人々は遽てゝ下に坐らせた。私は彼の顏に昨日の朝、夫人の應接間で、彼かステパーン・トラフィモーギーチを引立てようとして、少時

睨まへた時と同じやうな、危險な微笑を認めて、思はずぞつとした。私には今又彼の顏に不吉な、殊に好くないのは、寧ろ滑稽な表情、細君の高い理想を滿足させるために、甘んじて自己を犧牲にした所天の表情が有るやうに思はれたのだ……ユーリヤ・ミハイローヴナは急いで私を麾きながら、カルマーヂノフの傍へ行つて、始めて貰ふやうに賴んで呉れと囁いた。で、私が向き直るや否や、最一つ前よりも一層不快な恥づべき事件が生じた。

壇の上に、空の壇の上に――有らゆる聽衆の眼と期待とが結び着けられながら、それ迄は正面の小さな卓子と椅子との外には、卓子の上の盆に載せた洋盃と水甕の外には何一つ見られなかつた空の壇の上に、不意に燕尾服を着て白い頸飾をしたレビャードキン大尉の大きな圖體が顯れた。私は愕いて仕舞つて、少時自分の眼を信ずることが出來なかつた。大尉は何やら含羞んだやうに、壇の後ろの方に立つて居た。其時不意に『レビャードキン、君かい』と言ふ聲が聽衆の中から聞えた。大尉はそれを聞いて、眞赧に醉拂つた間抜面を延ばしながらにやゝと笑つた。彼は片手を擧げて額を摩擦りながら、もぢやゝと毛の生びた頭を振つた。それからいよゝ決心が着いたやうに二三歩前へ出たが、不意に眼を釣上げて身體を搖振りながら、げらゝと愉快相に引延ばしたやうな高笑ひを仕出した。此光景は聽衆の殆ど大部分を笑はせた、中には喝采するものも有つた。眞面目な聽衆は互に眼を見合せて、苦い顏をして居た。が、これはほんの半分間位續いたばかりだ。幹事の徽章を着けたリーブティンは二人の給仕人と一緒に壇へ駈け上つた。給仕人が大尉の兩腕を捕まへて居る間に、リーブティンは何やら彼の耳に囁いた。大尉は顏を蹙めながら、『あゝ、うむ、左樣いふ事なら！』と呟いた。それから手を振つて、公衆に大きな脊中を向けながら、三人に護衛されて姿を隱した。が、一分間もすると、リーブティンが再び壇の上へ飛上つた。彼は例の醋酸と砂糖を想出すやうなお愛想笑ひを滴たるばかりに滿しながら、手に一枚の紙片を持つて居た。そして、小刻みに

壇の端迄駈け出して來た。

『淑女幷に紳士諸君』と、彼は聽衆に向つて言つた。『私どもの不注意から、御覽の如き滑稽を演じましたが、それは最う濟みました。が、私は或地方詩人の最も熱心な、又最も敬虔な要求の下に、或事を身に引受けました。此の人道的な、高尚な目的に深く感動して……彼樣いふ容子はして居ますが……此州の教育は有りながら貧苦に惱んで居る若い婦人どもの涙を拭ひ去らうとして……皆さん方を始め私どもを一同に會せしめた目的で御座いますね……此高尚な目的に感動して、あの紳士は、卽ち其地方詩人で御座います……名前だけは何卒匿名にして置いて頂きたいのですが、此會……卽ち文學會の始めに當つて、自作の詩を讀んで御淸聽を煩はしたいと言ふので御座います、此詩は今日の目錄の中へは這入つて居ませんが……漸く半時間前に受取つたので御座いますから……而も私どもには』――私ども？私どもとは誰のことだ？私は只彼の混亂した途切れ〳〵の言葉を其儘傳へるので有る――『此詩が單に感情の自然を有するばかりでなく、著しく表現の快適なるものが有るために、眞面目な作品としては如何か存じませんが、此場合に、此祭に應はしいものとして――其思想がですね、特に其中の二三行がですね――此處に讀み上げても差支ないものゝやうに思はれるので御座いますが……で、私は諸君のお允許を得て……？』

『讀めよう！』と、背後の方から一人の聲が呶鳴つた。

『では、讀んでも宜しう御座いませうか。』

『讀め〳〵ッ』と、聽衆は口々に叫んだ。

『諸君のお允許を得ましたから、私は此處に讀み上げようと思ひます』と、リープティンは例の砂糖のやうな微笑を續けながら、再び言ひ愼く相に言つた。彼は未だ躊躇するやうに見えた。私は彼が何處か昂奮して居るのぢやないかとさへ思つた。此種の人間は平常の鐵面皮に似もやらず、時としては極めて神經質なもので有る。神學書生だつて、それ位の事は目瞬き一つせずに遣つて退けるだらう。が、リープティンも要するに前時代に屬する人間で有つた。

『私は先づ序言のやうな體裁で、これだけの事を言つて置かなければ成りませぬ。卽ち此詩は好く祭の場で讀上げられる祝ひの歌といふやうなものではない、寧ろ一つの戲れとでも言ひませうか。尤も眞面目な精神にも、同時に面白い滑稽にも滿ちて居る、謂はゞ最も現實的な心理に滿ちたものなんで御座いますね。』

『早く讀め、讀めッ！』

彼は手に持つた紙を擴げた。何人も今差當つてそれを停めようとする者はなかつた。それに、彼は辭事の徽章を着けて居るのだ。澄んだ聲で彼は讀出した。

『祖國の保姆達へ、祭の場にて或詩人より――

　お早う、保姆さん方よ、
　唄ひ囀せや此の祭日を。
　保姆を止めるか、獨身主義か――
　構ふこたない、唄へや踊れ！』

『そりやレビャードキンだ、レビャードキンの詩だ』と、二三の聲がした。どつと笑ひの聲に交つて、數多くはないが、喝采の聲さへ聞えた。

『洟ッ垂らしの坊ちやま方に、
明け暮れ佛蘭西語を敎へる身ぢやが、
切めて持ちたや寺男でも――
寺の男でも男は男！』

『萬歲！萬歲！』

『處で、開化の今日此頃は、
お氣の毒だが、寺男でも
なか〳〵君等の手に入らぬ――
金子のないのが身の塞り！』

『左樣だ、本當に左樣だ、それが現實だよ。持參金なしぢや亭主を釣る譯にや行かないからね！』

『處で、今日の饗宴からは、
お金子もどん〳〵寄つて來て、
持參金着け、踊の場から
出して遣るぞへ婚取りに。
保姆を止めるか、獨身主義か――
構ふこたない、唄へや踊れ！
君等は持參金附の保姆さんぢや、
惡く言ふ奴嗤かけて遣れ！』

私は自分で自分の耳を信ずることが出來なかつた。餘りに人もなげな振舞ひで、幾許リーブティンが間抜けだからこんな事を仕出かしたのだと言つても、最早辯解の餘地がない。それに、リーブティンは決して間抜けぢやないのだ。兎に角、其計企は明白に判つて居る、彼等は大急ぎに急いで混雜を起さうとして居るものらしい。あの馬鹿な詩の中の數行、例へば最後の一句の如き、何んな間抜けだからと云つて其儘には許し難いものだ。リーブティン自身も餘り遣り過ぎたやうに感じて居るらしかつた。彼は其仕事を遣り遂げた時、自分で自分の鐵面皮に壓倒されて、何か未だ言ふことが殘つてゞも居るやうに、少時は壇の上を去りも得やらず立盡して居た。彼は恐らく何か未だ違つた結果を生ずるものと想像して居たので有らう。が、朗讀の間頻りに喝采して居た破落戸の一團ですら、何か又壓倒されでもしたやうに、不意に默つて仕舞つた。殊に愚を極めたのは、彼等の多くが此挿話自體を眞面目に取つた、卽ちあんな詩を落首だとは思はないで、本當にそれを現實的なもの、保姆に取つて眞實なもの――實際、或傾向を有つた詩だと考へたことで有つた。が、此詩の餘りと云へば甚だしい自由は最後にそんな連中をすら驚かせた。一般の聽衆は啻に迷惑と云ふばかりでなく、自分達の面目を傷つけるものだとさへ考へた。私は此印象に關して自分が誤まつて居ないことを斷言して憚らない。ユーリヤ・ミハイローヴナは其後最少しで自分は氣絕する處だつたと言つて居た。極めて眞面目な老紳士の一人は老夫人を扶け起して、聽衆の昂奮した眼に送られながら會堂を出て行つた。で、若しカルマーヂノフが燕尾服に白い頸飾を着けて手に草稿を携へながら、其瞬間壇の上に現はれなかつたとすれば、老紳士夫妻の例が他の者にも傳染しなかつたとは誰が言へやうぞ。ユーリヤ・ミハイローヴナは自分の救主として、惚れ〳〵としながらカルマーヂノフを見遣つた。尤も、私は其時舞臺の後ろに居た。私は

リーブティンを問ひ詰めて居た。

『君は故とあんな事をしたのだ！』と、私は相手の腕を掴みながら、憤然として言つた。

『僕は決してこんな事に成らうとは思はなかつたのだよ、それは斷言するよ』と、彼は自分が如何にも不幸なやうな容子を裝ひながら言出した。『此詩は今漸つと持つて來られたのだからね。僕は只それを面白い滑稽だとばかり思つたのだよ……』

『君はそんな事を思つたのぢや有るまい。君だつてあんな謎語を面白い滑稽だなぞと思ふ筈がないぢやないか。』

『だが、僕は思つたよ。』

『君は嘘を吐いてるのだ。それに、あの詩も今持つて來られた譯ぢやない。君は多分昨日邊りレビャードキンを扶けてあの詩を作らせたんだよ、騒動を起すためにね。最後の一句の如き確に君の思想だよ、それから又あの寺男の條も。何故あの男は燕尾服を着て來たのだい？君はあの男が醉拂つてさへ居なけりや、あの男にそれを讀ませる積りだつたんだらう？』

リーブティンは冷やかな、皮肉を籠めた眼で私を見返した。

『それが君に何んな關係が有るんだい？』と、彼は不意に異樣な平靜に還りながら訊いた。

『僕に何んな關係が有る　君も幹事の徽章を着けて居るぢやないか……ピョートル・ステパーノヰチは何處に居るのだい？』

『僕は知らない、何處か其邊に居るだらうよ。何故又君は訊くんだ？』

『僕は最うそれがすツかり解つたからさ。如何しても今日の祭を滅茶――にして仕舞はうとする、ユーリヤ・ミハイローヴナに對する隱謀に違ひないよ……』

リーブティンは再びぢろりと私を見返した。

『だが、それが君に如何したと言ふんだい？』と、彼はにや〳〵笑ひながら言つた。彼は肩を聳かしながら歩み去つた。

私は思はずぞつとした。私の疑惑は全然確められた。其時まで、私は未だ自分が間違つて居れば可いと望んで居た！で、私は如何したら可からう？私は駛つて將にステパーン・トラフィモーヰチの助言を求めようとした。が、彼は姿見の前に立つて、絶えず朗讀の草稿と首ッ引をしながら、いろんな笑ひ方を演つて見て居た。彼はカルマーヂノフの後で直に演壇に立たなければ成らない、從つて今そんな話を聞いて居る處の騒ぎぢやないのだ。では、ユーリヤ・ミハイローヴナの許へ駈け着けようか。だが、彼女の許へ行くのは未だ早過ぎる。彼女が『追隨者』を有つて居る、有らゆる人が『狂熱的に自分を信奉して』居るといふ確信から癒される爲には、未だ〳〵最つと嚴しい仕置を受けねば成るまい。縱令言つた處で、彼女は私を信じまい、私が夢を見て居るのだと考へるに違ひない。加之、彼女が何の補助に成らう？『えゝ』と、私は考へた。『要するに、俺と何の關係が有るのだ？そんな事が始まつたら、俺は徽章をかなぐり捨てゝ自宅へ歸るばかりだ。』私は心の中で本當に『そんな事が始まつたら』と考へた。今でもそれを記憶えて居る。

が、私は先づカルマーヂノフの朗讀を聽きに行かなくちや成らない。最後に舞臺の後ろを一目見廻しながら、私は局外者の多數が出たり這入つたりうろ〳〵して居るのを見た。舞臺の後ろは稍狹い空地で、聽衆からは帷幄で仕切られ、扉口で他の室々と通ずるやうに成つて居た。此處に今日の朗讀者は各自順番の來るのを待つて居た。が、

私は其時ステパーン・トラフィモーヰーチの後へ出る筈に成つて居た一人の朗讀者に眼を惹かれた。彼も亦何かの教授で有つた――實の處、私は未だ今日に至る迄本當に彼が何者だか知らない――何でも學生の間に騷擾が有つた後自分から或教育機關を退いて、數日前に此町へ來たばかりだと云ふことで有る。彼は又ユーリヤ・ミハイローヴナに推擧されて、彼女の方でも恭しく彼に應接した。彼は此朗讀の前只一晩だけ彼女の仲間へ這入つて費したと云ふことだ。で、一晩中物も言はないで、にや〳〵妙な笑ひ方をしながら、ユーリヤ・ミハイローヴナを取捲く仲間の戲談や、一般的調子に耳を傾けて居た、そして、彼の傲慢な態度と、同時に良ともすればぶり〳〵憤り出しさうな氣色に依つて、有らゆる人の上に不愉快な印象を與へたものだ。彼に朗讀を強ひたのは、ユーリヤ・ミハイローヴナ其人で有つた。で、彼は今や室の隅から隅へ歩きながら、ステパーン・トラフィモーヰーチと同じやうに、何やら一人で呟いて居た。尤も、彼は姿見の前には立たないで、始終床を見詰めて居た。彼は時々一人で物凄い笑ひを漏らしながら、微笑を研究して見るやうなことはなかつた。彼も亦物を言ひ掛けて見た處で、明かに無駄のやうに見えた。年輩は四十格好で、身丈は低く、頭は禿げて、灰色の髭を生しながら、端然とした服裝をして居た。が、一番人目に立つたのは、彼がぐるりと廻つて歩みを回す毎に、頭の上迄右の手の拳を振上げながら、不意に敵手を粉末に打碎きでもするやうに、それを打卸すことで有つた。彼は絶えず此演技を續けて居た。それが何となく私を不安にした。私は急いでカルマーヂノフの朗讀を聽きに行つた。

三

會堂の中には又何か紛紜を招くやうな患れが有つた。先づ私をして言はしめよ、私は天才に對して深い敬虔の念を抱いて居る。が、如何して我國の天才どもは其の華々しい生涯の終りに當つて時々子供のやうな不間な眞似をするので有らうか。縱令それがカルマーヂノフにしても、又五人の侍從を一緒に圍めたやうな威風を備へて出て來ても、それが何だ？ 如何して彼は吾々のやうな聽衆を全一時間の間一片の紙に傾聽させることが出來やうなぞと思つたので有らう？ 實際、何んな天才でも、輕躁な文學會なぞで聽衆の注意を二十分間以上恙なく獨占することは出來ないものだと、私も氣が附いた。尤も、此の大文學者の登壇は甚深の敬意を以て迎へられた。嚴格な老人ですら賞讃と興味の色を見せた、又婦人連は一種の熱情をさへ表したものだ。が、喝采は短かつた。何處か不確で、一般的でなかつた。而もカルマーヂノフが饒舌り出す迄は、後方の列にさへ不謹愼な態度は見えなかつた。別に好くない事が起つたといふ譯でもないが、一種の誤解がそれに續いて起つた。彼がきい〳〵した、殆ど婦人のやうな聲を有ちながら、同時に生れながらの貴族らしい片言を言ふことは、前にも擧げて置いた。で、彼が一言二言言出すや否や、何人かど厚顏にも聲を擧げて笑ひ出した――恐らくは何にも世の中のことを知らない、先天的に笑ふ傾向の有る、無學な痴漢の所爲で有らう。が、別に敵對的示威運動らしいものが有るのでもなかつた。反對に、人皆『しいッ！』と言つた、笑つた奴は卽座に默らされた。が、カルマーヂノフ氏は容體振つて聲に力を罩めながら『最初自分は絶對に朗讀をお斷りした』なぞと言出した。何の爲にそんな事を言ふ必要が有るか解らない！『此中には迚も聲に出して讀上げられないやうな、深い衷心から出た數行が有る。從つて左樣いふ神聖なものを公衆の前に曝け出すに忍びない。』――それぢや、何の爲に曝け出したのだ？ 『が、自分は何でも朗讀して呉れるやうに懇請されたから、已むを得ず朗讀するので有る。それに自分は永遠に筆を投じて、今後再び筆を執るまいと誓つたから、今一度最後の告別を書くことにしたのだ。又自分は斷じて、何んな事が有つても、再び公衆の前で朗讀なぞすまいと誓つ

たから、最後に此處に朗讀をするのだ。』尚こんな風な文句が何處迄も續くので有る。

が、そんな事が別に影響する筈はないのだ。何人でも作者の序詞が何んなものだと云ふことは知つて居る。只、聽衆の教育が缺けて居ることと後列の苛々した昂奮を眼中に置けば、そんな事でも或は影響が有つたと言はざ成るまい。實際、彼が過去に書いた短い作でも朗讀したら、却つて好かつたかも知れない――餘りに彫琢を施して氣取つたやうな處は有るが、兎に角未だ精神が籠つて居る。左樣したら、或は此形勢を救つたかも知れない。が、これは全然違つた作で有つた！宛然演說のやうなもので有つた！これぢや何うも仕方がない。氣取り切つた、的もない無駄言が三十頁や、吾々でなくとも、彼得斯堡の聽衆でもけッそりしたに違ひなからう。殊に不好ないのは、此紳士が恩に被せたやうな、一種憂鬱な自屈の態度でそれを讀み上げたことだ。それぢや、殆ど聽衆に侮辱を加へるやうなものぢやないか。で、內容はと云へば……何人にあれが解つたらう？一種の印象と追憶との並列で有つた。が、何の？何に關して？最初朗讀の上半の間、此州の主なる知識階級の人々は全力を擧げて聽いて居たが、何が何やら薩張解らなかつた。下半では、只禮讓の念から聽いて居た。大部分は戀愛に就いて、實際此天才の或婦人に對する戀愛に就いて語られた。が、私はそれが寧ろ間の拔けた印象を與へたと云はざるを得ない。何となれば、此の大文學者が自分の最初の接吻に就いて吾々に語るといふことは、何うも私には彼の身丈の低いづんぐりした姿と似合はないやうに思はれたからだ。最一つ不愉快なことには、其接吻が普通の人間がするやうな具合に行はれたのではない。其處にはゑにしだの枝交叉した並木がなくては成らぬ――ゑにしだか、それとも外の植物か、兎に角植物譜の中で搜さなくちや解らないやうな木だ――其處には又これ迄人間が見たこともないやうな、縱しや何人かが見たとしても氣が附かずに濟んだやうな紫の色が空に顯れて居なければ成らぬ。それを彼は一人だけ見て、馬鹿者どもよ、お前等のために恰も普通有り觸れたやうに描いて居るのだ。二人の興有る戀人同志が其下に坐つた樹は、勿論香橙色をして居なければ成らぬ。二人は何處か獨逸の國に坐つて居たのだ。不意に二人は鬪ひの前夜のポンペイかカシウスに逢つて、二人ながらぞく〳〵するやうな法悅の感に打たれた。或山姬が草叢の中で泣いて居れば、グルック（獨逸の作曲家）が葭の中でヸオリンを彈いて居る。彼の彈いて居る曲の表題は明かに與へられた。が、何人も知らない、從つて音樂辭書の中で搜して見なくちや成らないのだ。其間に霧が立上つて、二人は其霧の中に包まれた。霧と云はむよりは、無數の小枕と云つた方が可いやうな霧で有る。不意に何も彼も消失して、大天才は霙の中に凍つたヴォルガの河を渡つて居た。此渡河のために二頁半が費された、而も彼は氷の破目から落つこちた。天才が溺れる――貴方は本當に彼が溺れたと思ひますか。そんな事はない。それは只彼が溺れかゝつて居る時、最後の息を吐かうとする間際に、豌豆位の大きさでは有るが『凍つた涙の樣に』純潔な透徹つた氷の碎片を見附けて、其涙の中に獨逸、詳しく云へば獨逸の空が反映する。そして、其の虹のやうな光に因んで、彼の心の中に『お前はおぼえて居るか、二人が綠柱玉の樹の下に坐りながら、お前は娛しげに「世に罪惡はない」と叫んだ。「否」と、私は涙ながらに答へた。「若し罪惡がなければ、世に正しいものもないのだ。」かうして二人が咽び泣きながら、永遠に別れた時、お前の眼から落ちた』其涙を想出させたい爲ばかりで有つた。女は別れてから何處かの海岸へ行つた。彼は又一人或洞窟を求めて落ちて行つた。不意に彼は其洞窟の中に洋燈が點火れて居るのを見附けた。洋燈の前には一人の隱者が跪いて居る。其隱者は祈つて居るらしい。天才は小さな鐵の窓に凭れながら見て居た。不意に溜息が聞えた。貴方は隱者が溜息を吐いたと想ひますか。大層彼は隱者のことを氣に懸けて居るのですね。いや、そんな事はない。此溜息は只彼の心の中に三十七年

前、獨逸で、お前はおぼえて居るか、二人は瑪瑙の樹の下に坐りながら、お前が私に『戀ですつて？ 周りに咲いて居る秋葵の花を御覽なさい。私は貴方を愛して居る。が、あの花が散つたら、私も愛しなく成るでせうよ』と言つた時の其溜息を想出させるばかりだ。其時又霧が立上つて、ホフマンが舞臺に顯れる、山姫がショパンの曲を奏でる、不意に又霧の中からアンクス・マルシウス（羅馬四代目の王）が月桂樹の冠を着けながら、羅馬の屋根の上に顯れる。『法悅の寒さが二人の脊を馳せ下つた、二人は永劫に別れた』――なぞと續く。

恐らく私は正確にそれを傳へて居るのではない、又如何したら正確にそれが傳へられるかも知らない。が、此贅言の斷片はそんな樣なもので有つた。要するに、我國の大文學者とも云はれる程の人達が所謂高遠な意味で戲謔を述べたがる傾向は如何にも見苦しいものだ！ 歐羅巴の大哲學者も、大科學家も、發明家も、殉教者も――有らゆる自ら勞して重荷を背負つて居る人々も、此の露西亞の大天才に取つては自家の廚房にうよ〳〵して居る料理番どもに過ぎない。彼は主人で有る、彼等は帽子を手にして彼の前に御用を承はつて居るのだ。尤も、彼も鷹揚な態度で露西亞を謗ることは有る。恐らく歐羅巴の大思想家の前に有らゆる點に於て露西亞の破產を示すよりも彼の所好なことは有るまい。が、彼自身に關しては――いや、彼は有らゆる歐洲の大思想家の標準以上に有る、彼等は只彼の戲謔の材料に過ぎないのだ。彼は他人の思想を取つて、それに其の對　偶を附け加へる。其處に警句が出來上るのだ。世に罪惡といふものが有る、世に罪惡といふものは有る、世に正義といふものが有る、世に正義といふものはない。無神論、ダヴィニズム、莫斯科の警鐘……が、彼は最早莫斯科の警鐘も信じて居ないのだ。羅馬、月桂樹……が、彼は月桂冠すら毫も信じては居ないのだ、私どもはバイロンめいた憤懣や、ハイネらしい厭世や、ベツチョリンのやうな或物の數々を聞かされた――機關は笛の音を立てながら、全速力で回轉して行く。『だが、諸君は私を賞讃するが可い、私を賞讃するが可い、私はそれが所好なのだ、私がペンを拋つといふのは、ほんの言つてみづくだ。實際の處、私はこれから三百篇でも書いて諸君を惱まして上げるよ……』

勿論、これが混亂なしには濟む譯がない。殊に不好ないのは彼自身それを招いたので有る。聽衆は大分前から足摺りを仕出した。鼻をひつた、咳嗽をした、其他何人にもせよ、講演者が文學會なぞで二十分以上聽衆を引止めて置いた時に衆皆の爲るやうな、いろんな事を遣り出した。が、吾々の天才は全然それに氣が附かなかつた。彼は聽衆を眼中に置かないで、何時迄ももじ〳〵と片言を言ひ續けた。今度は聽衆の方で愕いた位だ。不意に、後方の列で一人限りの聲高な聲が聞えた。

『まア何といふ詰らない話だ！』

此の絶叫は自然に出たので、決して示威運動のために故と發せられたものではないらしい。其男は單に退屈したのだ。が、カルマーヂノフ氏は朗讀を中止して、皮肉な眼で聽衆を見遣つたが、不意に自分の權利を犯された侍從のやうな態度で片言を言出した。

『諸君、私は恐ろしく皆さんを退屈お爲せ申したやうですね？』

彼が自分から先へ言出したのは失策で有つた。こんな風に聽衆の返答を促したのは、破落戸どもに物を言ふ絲口を與へたやうなものだ。謂はゞ、合法的に與へたので有る。で、若し彼が我慢して居たら、聽衆は矢張鼻をひり續けたかも知れないが、兎に角それで濟んだのだ。恐らく彼は自分の質問に對する返答として喝采を豫期したので有らう。が、喝采の聲はほそとも起らない。それ處か、衆皆ひつそりして厭倦んだやうに見えた。

『君はアンクス・マルシウスなぞを見たことはない筈だ、そりや皆法螺だね』と、苛々した、神經的に疲れ果て

たやうな聲が叫んだ。

『其通りだ』と、直に他の聲が應じた。『近頃幽靈なぞは餘まり見當らない、科學萬能の世の中だよ。些と科學の本でも捜して見るが可い。』

『諸君、そんな抗議を受けようとは私は全然想ひも懸けませんでした』と、カルマーヂノフは心の底から驚いて言つた。大天才もカルヽスルーエに居る間に全く祖國との接觸を失つて仕舞つたのだ。

『今日此世界が三尾の魚の上に載つかつて居るなぞと言ふのは餘まりですよ』と、不意に若い女が金切聲を立てた。『貴方は隱者の洞窟へ下りて行つたと仰有いましたね、カルマーヂノフさん、近頃誰が隱者なぞのことを言ひまするものか。』

『諸君、貴方方が餘まり眞面目に取られるから、私は驚いて仕舞ひますよ。ですが……ですが、貴方方の仰有ることは道理だ。私も眞理と現實主義とに對して尊敬を拂ふ點に於ては、人後に落ちない積りですが……』

皮肉な微笑を泛べて居るものゝ、彼は恐ろしく面喰つて居た。彼の顏は『私は貴方方の考へて居るやうな人間ぢやない、私は貴方方の味方だ。只、私を讃歎するが可い、出來るだけ讃歎するが可い、私はそれが所好だ』と言つて居るやうに見えた。

『諸君』と、彼は到頭すッかり萎げ返りながら叫んだ。『私の哀れな詩は何うも此場に應はないらしい。いや、私自身も此處には應はないやうだ。私も左樣思ひますよ。』

『君は烏を覗つて牝牛に中てたのだ』と、或痴漢が、恐らく醉拂つて居たのでも有らう、聲の頂邊で呶鳴つた。勿論そんな奴のことを氣に懸けるには及ばない。只二三の失禮な笑ひ聲が聞えた。

『君は牝牛だと言はれる？』と、カルマーヂノフは直にそれを捕まへた。彼の聲はいよ〳〵金切聲に成つて行つた。『牝牛だか烏だか、諸君、私は何とも申上げますまい。自分でそんな比較を口にするには、縱令何んな比較にもせよ、私は聽衆に對して餘りに多くの敬意を拂つて居る。が、私は考へた……』

『辯士、些と用心しろ』と、或男が後列から叫喚いた。

『だが、私は今回筆を投じようとして、讀者に告別をするのだから、私も少許は聽いて頂けようと思ひました……』

『いや〳〵、私どもは聽く積りだ、聽く積りだ』と、正面の列から二三の聲が漸つと勇氣を鼓して叫んだ。

『何卒讀んで下さい、讀んで！』と、二三の熱心な婦人の聲がそれに應じた。到頭一度に拍手喝采が起つた。尤も疎らで力も弱かつた。

『眞個ですよ、カルマーヂノフさん。何誰も名譽と思つて被坐しやるのですからね……』と、州會議長の夫人も自分で口を出さずには居られなかつた。

『カルマーヂノフ君！』と、不意に、若々しい聲が會堂の後方から聞えた。最近地方の學校から此町へ遣つて來たづぶ若い教師の聲で、極めて溫厚な紳士らしい若者で有つた。で、自席に突立ちながら續けた。『カルマーヂノフ君、若し私が今貴方のお話に成つたやうな戀に落ちる幸福を得たとすれば、私は公衆の前で其戀に關した論文を朗讀して聽かせやうなぞとは思ひませんね……』

彼は顏中眞赧に成つて居た。

『淑女幷びに紳士諸君』と、カルマーヂノフは叫んだ。『私は最う止めます！終りを略して退壇することに致しま

せう。只、最後の五六行の朗讀を許して下さい。』

『さなり、讀者よ、さらば！』と、彼は再び椅子へも着かないで、直に草稿を讀み始めた。『さらば讀者よ、私は友人として別れることをさのみ主張しない。此上諸君を煩はしたとて、何の益か有らむ。諸君は私を罵るも可癸、それが諸君に滿足を與へるとなら、幾許でも罵れ。が、互に永遠に忘れて仕舞ふことが出來たら、それが最良の手段では有るまいか。讀者よ、諸君にして急に私の前に跪いて、涙ながらに「書けよ、おゝ吾々のために書けよ、カルマーヂノフ——露西亞のために、吾々の子孫のために、月桂冠を護るために」と、言葉を盡して請はるゝとも、私は矢張禮讓を以て諸君に謝しながら、「否とよ、吾等は互に倦く程知つたではないか、祖國の同胞よ、merci, (多謝！merci, merci, merci!(多謝、多謝、多謝！))」

カルマーヂノフは儀式張つたお叩頭をして、茄でた蟹のやうに眞赧な顏をしながら、舞臺の後ろへ退いた。

『何人も彼奴の前に跪きやしないよ、大した氣焰だね！』

『何といふ生意氣な野郎だ！』

『あれは只戯談ですよ』と、物の判つたらしい男が傍から言つた。

『そんな戯談は止めて貰ひたいものだね。』

『なに、面の皮が厚いのですよ、諸君！』

『兎に角最う止めたのだから可いぢやないか。』

『えゝッ、何といふ下らない事たい！』

が、總て是等の無智な後列の絶叫は聽衆の一般から起つた喝采の聲に壓倒されて聲を潜めた。彼等は再びカルマーヂノフを喚出した。五六の婦人はユーリヤ・ミハイローヴナや會長の夫人と一緒に壇の周りへ押掛けた。ユーリヤ・ミハイローヴナの手には、白い天鵞絨の枕の上に載せた薔薇の生花の花環と、二重に成つた立派な月桂冠を持つて居た。

『月桂冠！』と、カルマーヂノフは微妙な、稍皮肉な微笑を泛べながら言つた。『私は勿論感動する、又此の鮮やかな、凋みもやらぬ花環を衷心から感謝して受けもする。が、御婦人方よ、私は急に現實的に成つた、現代に於ては月桂冠が私の手に有るよりも、寧ろ熟練した料理番の手に應はしいやうな氣がするのですよ……』

『左樣だ、料理番の方が最つと役に立つ』と、ヴィルギンスキイの家の會合で見た、例の神學生が叫鳴つた。

秩序は再び亂れて來た。聽衆は皆月桂冠の贈物を最つと好く見ようとして飛上つた。

『僕は此際料理番に、最う三留布增して遣る積りだ』と、他の聲がそれに應じた。餘りに聲高に、實際不作法に言つて退けた。

『僕も左樣爲ようや。』

『ぢや、僕も。』

『全然酒保を開かないといふやうな事が有るかね。』

『諸君、土臺詐欺のやうなものだよ。』

尤も、是等の無遠慮な紳士達もなほ其場に出席して居た高給な役員連や、警察署長を怖れて居たことは爭はれない。十分間後には、兎も角總ての人が各自席に服した。が、最早前のやうな秩序は見られなかつた。可憫さうに、ステパーン・トラフィモーヂチは斯んな暴風雨の前の鎭靜の中へ衝き出されたので有る。

四

私は最一度舞臺裏へ駈けて行つて、私の說では最早萬事終れりだ、彼は全然顏を出さないで、例へば急病を言立てに直樣自宅へ歸つた方が可からう、私も徽章を捨てゝ彼と一緒に歸る積りだと、息遣ひも暴く彼に警告した。其時彼は將に壇へ登らうとする道に有つた。彼は不意に足を停めて、傲然として私を見上げ見下しながら、嚴格な聲で言つた。

『君、君は何を居に僕をそんな卑劣なことの出來る人間だと思ふのだい？』

私は彼が屹度大破綻を免れなからうとは、二に二を掛けて四に成る程確に信じながら、其儘後へ退いた。其間、私は茫然自失して立ちながら、不圖私の前にステバーン・トラフィモーギーチの後で登壇する番に成つて居る例の敎授が矢張拳骨を振上げては又振下しながら歩いて居る姿を見掛けた。彼は我を忘れて、何やら一人呟いては惡魔のやうな、同時に得意げな微笑を泛べながら歩いて居た。私は如何したのやら我にもなく其男の傍へ近づいた。又自分でも如何してそんな餘計なことを言ふ氣に成つたか解らない。

『貴方御存じですか』と、私は言出した。『いろんな例から判斷するに、講演者が二十分以上も聽衆を引張つて置いたら、聽衆は迚も聽いちや居ませんね。何んな有名な人でも三十分とは續きませんよ。』

彼は立停つて、憤怒に顫えて居るやうに見えた。彼の顏には底の知れない侮蔑が表れて居た。

『御念には及びませんよ』と、彼はさも輕蔑したやうに呟いたまゝ歩み去つた。其瞬間ステバーン・トラフィモーギーチの聲が會堂から聞えて來た。

『えゝ、衆皆勝手にするが可いや』と、私は考へた。そして、會堂の方へ駈けて行つた。

ステバーン・トラフィモーギーチは未だ混雜の續いて居る最中に講演者の椅子に着いた。彼は前列から明かに餘り親しくない眼で迎へられた。近頃倶樂部でも餘り氣受けが好くない、以前よりはずつと敬意を拂はれなかつた。が、最初から叱咤されないだけが未だしも目附けもので有つた。私は前の日から如何いふものか、彼が登壇するや否や四方八方から叱咤されるだらうと想ひ續けて居た。尤も、聽衆は混雜に氣を取られて彼に眼を着けなかつたのでも有る。カルマーヂノフでさへあの樣に取扱はれたのだもの、此人が何を望むことが出來ようか。彼は眞蒼な顏をして居た。彼が最後に聽衆の前に現はれてから、最早十年にも成る。彼の昂奮と、其他私が彼に就いて知つて居る總ての事から押して、彼も亦此登壇を以て自分の運命の一轉機か、若しくはそんな樣な風に考へて居ることは明白で有つた。私が心配したのは其處で有つた。私は此人を愛して居る。始めて彼の唇が開くのを見、彼の第一の文句を聽いた時の私の心持は何んなで有つたらう？

『淑女幷びに紳士諸君』と、彼は不意に、殆ど掠れて聞き取れないやうな聲だとは云へ、萬事を一擲するやうな勢ひで言出した。『淑女幷びに紳士諸君！今朝始めて私の前に、近頃此界隈に配布されたといふ法律違反の紙片が置かれた。私はそれに就いて何百遍一人で考へたかも知れない、「此祕密は何處に有るんだ？」と。』

忽ち會堂の中が靜かに成つた。聽衆の眼は皆彼の上に注がれた、中には驚いて心配らしい顏をして居るのも有つた。彼が最初の一言で聽衆の注意を引着ける手段を心得て居ることは爭はれない。いろんな頭が舞臺の後ろから突き出された。リープティンやリャムジンも貪ぼるやうに聽いて居た。ユーリヤ・ミハイローヴナは再び私を手招ぎした。

『停めて下さい、如何成つても可いからあの人を停めて下さい』と、彼女はきよと〳〵しながら私に囁いた。私は只肩を聳かした、何うして萬事を一擲しようと決心した人の言葉を停めることが出來ようか。あゝ、私はステパーン・トラフィモーギーチの心情を餘りに好く知つて居た。

『はゝア、檄文だな！』と、聽衆は囁いた。全會堂がざわ〳〵と波立つた。

『淑女幷びに紳士諸君、私は此祕密を解決した。祕密は彼等の齎らした効果に有る――彼等の馬鹿けて居る處に有る。』――彼の眼は閃いた――『さなり、諸君、若し此馬鹿けさ加減が故意に出たものとすれば、豫じめ計つて僞れたものとすれば、おゝ、それは眞個天才の手際ですよ。だが、吾々は正當な判斷を彼等に下さなければ成らぬ。彼等は決して故と氣取つて居るのではない。極めて露骨な、極めて單純な、極めて淺薄な馬鹿けさ加減で有る。(Ce n'est la bêtise dans son essence la plus pure, quelque chose comme un simple chimique.(最も純粹な精髓に於ける馬鹿で有る、化學的單純元素のやうなもので有る。)若しあれがほんの最少し悧巧に出來て居たら、何人でも直に其の淺薄な馬鹿けさ加減の貧弱に氣が附くでせう。處が、御覽の通り、何人でも不思議に思つて首を傾けて居る。何人でもあれがそんな初歩の馬鹿で有らうとは信じ得ないのだ。「あれだけで他に何にもないのだとは思はれない、何うしてもそんな筈はない」と、何人でも考へて、更に其祕密を發見しようとする、其中に不思議を見る、行と行との間に何物かを讀まうと試みる――効果は達せられたのだ！あゝ、馬鹿が是程嚴肅に報いられたことはない、有るべくして嘗てない……何故だ？ en parenthèse,(註に曰く、)馬鹿は人類に取つて最高の天才と均しく有効で有らからで有る。』

『千八百四十年代の警句』と、低い聲で註釋した者が有つた。だが、それに續いて、どつと叫喚と混雜が起つた。

『淑女幷びに紳士諸君、萬歳！私は馬鹿に祝辭を捧ける！』と、ステパーン・トラフィモーギーチは狂人のやうに成つて聽衆に挑んで蒐つた。

私は彼に水を注いで遣るやうな振をして演壇へ駈上つた。

『ステパーン・トラフィモーギーチ、止めて下さい、ユーリヤ・ミハイローヴナが貴方に賴んで居ますよ。』

『いや、君は打捨つて置いて呉れ玉へ』と、彼は聲を限りに私を呶鳴り附けた。私は走り降りた。『諸君』と、彼は續けた。『此騒動は、此憤怒の叫喚は何事ですか。私は檄攬の枝を持つて此處へ出た。私は諸君に最後の言葉を持參した、私は此事に關して最後の言葉を有つて居るからだ――それで吾々は和解すべきで有る。』

『辯士を引摺り下ろせ！』と、一人が叫んだ。

『默れ、饒舌らせて遣れ、言ふだけ言はせて遣れ！』と、他の組が呶鳴つた。例の若い教師は殊に昂奮して居た。一旦饒舌り出したので、何うも默つて居ることが出來ないらしい。

『諸君、此事に關した最後の言葉は――互に宥すと云ふことで有る。私が、人生の終りに達した年寄の私が更めて斷言する。生命の力はなほ吾々の中に燃えて居る。なほ青年の間に熄えては居ない、今日の青年の熱情は吾々の時代のそれのやうに純潔に輝いて居る。其間に起つたことと云へば、只目的の變化に過ぎない、一つの美に代ふるに他の美を以てしたに過ぎない！問題は只何れが一層美で有るかと云ふことで有る。シエークスピアか長靴か、ラファエルか石油か。』

『そりや詐欺だ！』と、一人が唸つた。

『他人を陷入れるの質問だ。』

『Agent provocateur !(政府の間諜奴！)』

『併し私は主張する』と、ステパーン・トラフィモーギーチは昂奮の絶頂に達しながら、金切聲を立てた。『私はシエークスピアやラファエルが奴隷の解放よりも尊いことを、國家主義よりも尊いことを、社會主義よりも尊いことを、青年よりも尊いことを、科學よりも尊いことを、殆ど人類全體よりも尊いことを主張する。何と成れば彼等は果實だから、人類の眞の果實だから、恐らくは有り得べき最高の果實だからで有る。最高の美は既に彼等の手で達せられた。それがなければ、恐らく私は生きて居ようとも思ふまい……おゝ、神樣！』と、彼は兩手を一緒に握り締めながら叫んだ。『十年前も、私は彼得斯堡の演壇から同じ事を言つた。恰度同じ事を同じ言葉で言つた。彼等は又同じ樣にそれを了解しなかつた。彼等は笑つた、今の樣に叱咤した。淺薄なる人々よ、諸君がこれを了解しないのは、何が諸君の中に缺けて居るのか。だが、私をして諸君に告げしめよ、諸君に告げしめよ、英吉利人がなくとも、人類に取つて生活はなほ可能で有らう。獨逸がなくとも、生活は可能で有らう、露西亞人がなくとも、矢張生活は可能で有る。科學がなくとも、なほ生活は可能で有る。只美がなければ生活は出來ない。美のない處、世界には何にもないのだ。これが有らゆる物の底に潛む祕密で有る。歴史の教ふる處で有る！科學すら美がなければ一瞬間も成立しない――笑つて居る君等にそれが解つて居るか――總ての者は奴隷と成つて、最早發明もなければ創造もない……私は一歩と雖も退きませんよ』と、彼は滅茶苦茶なことを叫んで、全身の力を籠めて拳骨で一つ卓子を打した。

が、彼が滅茶苦茶なことを連絡もなく饒舌つて居る間に、會堂の混亂はいよ〳〵增して來た。多くの人々は席から飛上つた、中には演壇へ近づかうとして前へ推して行く者も有つた。總てが私の書いて居る暇もない程速く起つたのだ。何か秩序恢復の手段を取らうとしても、そんな暇はない、恐らくそんな事を考へる暇もなかつた。

『君等はそれで可いのだ、何も彼も攝つて居るから、此の喰ひ肥り奴！』と、例の神學生が演壇の下からステパーン・トラフィモーギーチを目蒐けて、齒を剝き出しながら咆哮した。後者はそれを見ると、演壇の端まで飛出して來た。『僕は言はなかつたか、唯今青年の熱情は昔と同じ樣に純潔で輝いて居ると言はなかつたか。只美の形式の上に自ら欺いて居るから道を誤まるのだ！それだけ言つても、君等は未だ足りないのか。で、君等も斯んな事を宣言する者がよほ〳〵に成つて、他人から侮られる老爺だと云ふことを考へたら、人間は最少し――あゝ、淺薄な奴等よ――最少し不偏不黨の高尚な見地に立つことは出來ないものかね……恩知らずの……不正な……何うして、何うして君は和解されないのか！』

斯う言つて、彼はヒステリーのやうに泣き出した。彼は落つる涙を指先で拭つた。彼の肩と胸とは嗚咽に高まつた――彼は周圍の總ての物を忘れた。

實際恐慌が聽衆を攫んだ、殆ど總ての人が座から立上つた。ユーリヤ・ミハイローヴナも慌てゝ飛上つて、所天の腕を攫みながら、無暗に引張つた……其光景は眞個想像以上で有つた。

『ステパーン・トラフィモーギーチ！』と、神學生は、快げに咆え立つた。『フエッカと云つて、脫獄して此町の界隈を彷徨いて居る囚人が有りますね。彼奴は泥棒で、最近にも又人殺しをしましたよ。で、私は貴方にお訊ねしますがね、若し貴方が十五年前賭博に負けた負債を拂はうとして、其補足にあの男を賣りさへしなけりや、即ち最つと簡單に云へば、骨牌であの男を取られさへしなけりや、如何です、あの男は監獄へ這入つたでせうか。あの男が今頃生活の苦し紛れに人の咽喉を切るやうなことを爲たでせうか。貴方は如何思ひます、耽美家の君！』

私は次に起つた光景を詳しく記載するに堪へない。第一には怖ろしい喝采の一齊射擊が有つた。喝采は總ての人

がした譯ではない――恐らくは聽衆の五分の一位に止まつたので有らう――が、彼等は猛烈に喝采した。其他の聽衆は皆急いで退場しようとした。が、喝采する組はだん〳〵前へ押寄せて演壇の周りへ迫つた。眞個騷擾に陷づた。婦人どもは聲を立てた。小娘の或者は泣いて自宅へ歸らうと强請んだ。レムブケは椅子の傍に突立ちながら、怖ろしい眼をして周圍を見廻して居た。ユーリヤ・ミハイローヴナは全然途方に暮れた――彼女が吾々の町へ乘込んでから初めてど有る。ステパーン・トラフィモーギーチは最初の一瞬間神學生の言葉で文字通りに粉碎されたやうに見えた。が、彼は不意に聽衆の上に打卸しでもするやうに兩腕を振上げながら叫喚いた。

『私は足の砂を拂つて、君等を呪ふ……最うお終ひだ、お終ひだ……』

彼はぐるりと廻つて、威嚇するやうに兩手を振りながら、舞臺の背後へ駈け込んだ。

『彼奴は聽衆を侮辱した……吾々を辱しめた！』と、聽衆は口々に罵つた。彼等はステパーン・トラフィモーギーチを追ひ駈けて飛込まうとした。此瞬間、何れにしても彼等を宥めることは不可能で有つた。で、最後の大破綻が曝裂彈のやうに公衆の中へ投ぜられた。そして、其眞中で破裂した。第三の朗讀者、例の舞臺の背後で拳骨を振廻して居た狂人が不意に壇場へ駈け上つた。

彼はすつかり狂人のやうに見えた。無限の自信を有つた、野鄙な、勝誇つた微笑を泛べながら、彼は沸立つた會堂を見廻した。却つて彼は其混亂を悅ぶやうに見えた。斯んな騷ぎの中で演說しなくちや成らぬのに、毫末も怯んだ容子がない、却つて明々とそれを悅んで居た。それが餘り眼に立つたので、一時に聽衆の注意を惹いた。

『今頃何だ？』と、聽衆は口々に訊いた。一體あれは何者だ？しいッ！彼奴は何を言はうとするのだ？』

『淑女并びに紳士諸君』と、狂人は演壇の端に突立つて、カルマーヂノフのやうに貴族的な舌ッたるい言葉では

ないが、殆ど女のやうな金切聲を出しながら、全身の力を罩めて叫喚いた。『淑女并びに紳士諸君！二十年前我國が歐羅巴の半ばと戰爭をした前夜に於て、露西亞は復古論者の理想的國家で有つた。文學は檢閲官の言ふ通りに成つた。大學では戰爭と戰爭の歷史との外には、何者をも敎へなかつた。軍隊と軍隊の舞踏曲が總てど有つた。人民は高い租稅を拂つて、奴隸制度の無智の下に黙つて居た。愛國主義とは孕み女や死んだ者から賄賂を扭ぢ取る職業に過ぎなかつた。賄賂を取らないやうな者は、一體の調和を案す處から反逆者として見られた。赤楊樹の林は主義を支持するために根絕しにされた。歐羅巴は吾々の前に顯え上つた……が、露西亞自身は其無意味な三千年の存在の間にも、嘗て斯んな見苦しい狀態に沈んだことはなかつた……』

彼は拳骨を振上げて、有頂點に成りながら、威嚇するやうに頭の上で振廻しては、不意に敵手を粉末に搗き碎きでもするやうに激しく打卸した。狂人のやうな吶喊の聲が全會堂を撼がして起つた。喝采のどよみは少時耳を聾するばかりだ。殆ど聽衆の半ばが喝采して居た。彼等の熱情は宥さるべきで有る。露西亞が公然各人の前に辱しめられるのだもの、何人が狂喜して喝采せずに居られようか。

『そりやア眞實だ！眞個其通りだよ。萬歲！左樣だ、こりや耽美家なぞの知つたことぢやないよ。』

狂人は有頂點に成つて續けた。

『其時以來二十年經つた。大學の數は二倍にも成つた。あんな軍隊の敎練は只傳說に過ぎなく成つた。士官の數は數千と足りなく成つた。鐵道は有らゆる資本を呑み盡して、露西亞を蜘蛛の巢のやうに蔽うた。而も人間は鐵道ぢや旅行が出來ないのだ。何日何時鐵橋が落ちるかも知れない！裁判所では、ソロモンのそれの樣な簒棒な判決が下される。陪審官も饑えて死んぢや堪らないから、苦し紛れに賄賂を取るのだ。奴隸は解放された。彼等は從來の

やうに地主にや打たれない代りに、互に打ちッくらをして居る。火酒は百川を吸ふやうに消費されて、お蔭で政府の豫算案が立つて行く。で、今ちやノヴゴロッドの舊ほけた聖ソフィーヤ寺院の前に雲突くやうな銅の地球儀が嚴然として据ゑられた。幸ひにも吾々が既に經過した一千年の破産を記念するためなんだね。歐羅巴は眉を蹙めて、再び不安を感じ出した……改革の十五年！而も嘗て經て來た最も馬鹿げた狂妄の時代を通じて、なほ露西亞は……」

最後の言葉は群集の喧燥に埋もれて聞えなかつた。人はたゞ彼が再び腕を振上げて、再び勝ち誇つて打下ろすのを見た。熱情は有らゆる度を超えた。聽衆は手を拍いて鬨の聲を上げた。婦人でさへ聲を上げて喝采する者が有つた。或者は醉拂つて居たかも知れない。辯士はぢろ〳〵と聽衆を見廻しながら、自分の勝利に醉つて居るやうに見えた。私はレムブケが何とも言はれない殺氣を顏に見せながら、何人かに何やら指示して居る樣をちらりと見た。ユーリヤ・ミハイローヴナは眞蒼な顏をして、自分の傍へ駈け着けた例の貴公子に何やら言つて居た。が、其瞬間六人の一團が巡査と一緒にばら〳〵と演壇の上へ現はれながら、辯士を攫んで舞臺の後ろへ引摺り卸した。私は如何して彼が其人々の手から遁れ得たかを知らない。が、兎に角彼は再び演壇の端まで駈出して來た。そして、再び拳骨を振廻しながら聲を限りに叫喚いたものだ。

『なほ露西亞は嘗て沈淪しなかつた……』

『が、彼は再び引摺り卸された。私は十五六人の人々が彼を救ひに舞臺の後ろへ飛込んで行くのを見た。演壇を横切つて行くのではない、其側の輕い垂幕を押破つて飛込むだのだ……私は其後殆ど自分の眼を信じられないやうな光景に出會した。例のヴィルギンスキイの妹だと云ふ女學生が、小脇に紙の束を掻込みながら、此前のやうな服裝をして、毎も圓まつちい眞赧な頰べたをして、五六人の男女に取捲かれながら、不倶戴天の仇ともいふべき例の中學生に伴はれて演壇に飛上つたのだ。私は次のやうな文句を小耳に挾んだ。

『淑女幷びに紳士諸君、私は憫れな學生の苦痛に注意を喚ばうとして參りました。そして、彼等を促して一般的抗議を起させようと……』

が、私は遁け出した。衣裳へ徽章を蔽しながら、私は豫て知つたる裏道から街の上へ此家を脱け出した。勿論、第一番にステパーン・トラフィモーギーチの家を訪づれた。

第二章　祭の終り

一

彼は私に會ふまいとした。彼は門を閉して、何やら書いて居た。私がどん〳〵戸を敲いて喚んだのに對して、彼は戸の中から返辭をした。

『友よ、私は何も彼も濟んだ身だ。此上私を如何しようと言ふのだ？』

『貴方は何にも濟んぢや居ない、貴方はたゞ何も彼も滅茶〳〵にすることを手傳つたばかりだ。後生ですから、ステパーン・トラフィモーギーチ、此戸を開けて下さいな。早速手段を講じて置かなければ、彼奴等が又遣つて來て、何を爲るか知れませんよ……』

私は彼に對して殊更嚴格にする義務が有るやうに感じた。私は彼が又何か一層狂氣染みた事を仕出來しやしないかと心配したのだ。が、驚いた事には、彼は斷乎とした態度で私に對した。

『ぢや、先づ君から來て僕を侮辱するやうなことはして呉れるな。僕は君が過去に於て僕に盡して呉れた好意を謝するよ。が、繰返して言ふが、僕は好かれ惡しかれ總ての人と交友を絶つた。僕は今ダーリヤ・パブローヴナに手紙を書いて居るのだ。あの女のことを今迄忘れて居たのは眞個濟まない譯だからね。明日君、それをあの女に屆けて呉れないか、僕に親切を盡す氣が有るならね。だが、今日は――おさらばだよ。』

『ステパーン・トラフィモーギーチ、私は斷言する、事態は貴方が考へて被坐しやるよりも餘程重大ですよ。貴方が今頃ダーリヤ・パブローヴナに手紙をお遣りに成る理由は一つもない、それよりも重大な事が幾許も有るぢや有りませんか。又貴方は私なしに一人で何が出來ると思つて被坐しやるのです？ 此の實際的人生に就いて貴方は何が解つて居ますか、貴方は又何か企圖んで被坐しやるでせうがね。貴方が何か遣り出したら、それこそ飛んだ事に成るだけですよ。』

彼は立上つて、戸の傍へ遣つて來た。

『君は彼奴等と永くも一緒に居ないのに、最う彼奴等の調子や言葉に感染したのだね。Dieu vous pardonne, mon ami, et Dieu vous garde.（神が君を赦し、君を護らむことを。）だが、僕は平常から君の中に優しい感情の萌芽を見て置いた、君は恐らくそれを免れることが出來るだらう――勿論、總ての露西亞人と同じやうに、après le temps（遲蒔に）だね。僕の非實際的な生活に對する君の云爲に對しては、僕は最近僕が考へて居たことを君に言へば可い、卽ち露西亞人といふものは、皆が皆、他人の非實際的なことを極端な憤怒と夏の蠅のやうな煩い固執とを以て、自分以外の者は何人でも左樣のやうに言ひながら攻擊する外に、何一つ爲ないものだと云ふんだね。ねえ君、僕は昂奮して居るのだからね、何卒僕を苦しめて呉れたまふな。では、最一度有らゆることに對して君に謝するよ。そして、カルマーヂノフが公衆と別れたやうに別れやうぢやないか。卽ち二人が出來るだけの寛容を以て、互に忘れやうぢやないか。あの男が以前の讀者に對して、あんなに熱心に自分を忘れて呉れるやうに願つたのは、眞個氣取つたものだ。Quant à moi,（僕としてはだね、）それ程の自負はないよ。何人が用のない老人のことをそれ程永く記憶えて居るものかね。では君、ナスターシャが僕の誕生日に祝つて呉れた言葉ぢやないが、「御機嫌好くお暮しなさい、」pauvres gens out quelque fois des mots charmants et pleins de philosophie.（彼樣いふ憐れな人間といふものは、時として

哲理に富んだ好い言葉を持つて居るものだよ。）僕は君に多く幸福を願はない、君が又迷惑するだらうからね。と云つて、僕は君の不幸を願ふ譯ぢやない、只百姓の哲理に隨つて、僕は單に『御機嫌好く』を繰返すばかりだ。それから餘り人間を信用しないが可いよ、これだけは僕が衷心から附加へて置くがね。では左樣なら、左樣なら、御機嫌好く、二度と僕の戸口に立つて呉れ玉ふな、僕は決して開けないからね。』

彼は行つて仕舞つた。私は最早彼から何物をも聞かれなかつた。「彼の昂奮」にも拘らず、彼は滑かに、重味を附けて、明かに感動を與へようと努めながら語つた。勿論、彼は私に對して何か知らぬが稍慣つて居た。又斯くの如くにして間接に私に復讐しようとしたものらしい。此朝公衆の前で彼の注いだ涙は、或意味に於て勝利を得たとは云ふものゝ、彼を稍滑稽な地位に置いた。彼はそれを知つて居た、又ステパーン・トラフィモーヰチ位友人との關係に於て威嚴と儀禮とに拘泥する人も滅多にないのだ。あゝ、私は彼を非難しようとするものではない。が、彼が有らゆる打擊にも拘らず此の氣類しさと皮肉とを保留して居たといふことは、一時私の心を安んじた。平常ながらの自己と餘り變らない人間といふものは、其際非常な、悲劇的な事を仕出來すやうな氣分には成つて居ないものだ。其時、私は左樣いふ風に考へた。あゝ、私は何といふ間違ひをしたことだらう！私は又いろんな事を勘定に入れなかつたのだ。

此處に事件を豫想して、ダーリヤ・パブローヴナに當てられた手紙の數行を引用して置きたい。實際彼女は翌日それを受取つたのだ。

『Mon enfant,（わが兒よ、）私の手は顫ふ。が、私は萬事を拋つたのだ。お前は私の最後の抗爭の場に居合せなかつた、お前は文學會へ來なかつた、好く來て呉れなかつた。が、お前は品性の有る人がだん〳〵乏しく成つた此露西亞に於て一人が立つて、四方八方から浴せ掛けられた怖ろしい威嚇にも屈せず、馬鹿者どもに眞理を語つた、即ち其奴どもが馬鹿で有ると語るだけの勇氣を持したといふ話を耳にするだらうよ。Oh, ce sont — des pauvres petits vauriens et rien de plus,（あゝ、それこそ——憐れなやくざ漢だ、それに過ぎないのだ、あの小さな）——馬鹿者ども——voilà le mot!（眞個適切な言葉だよ。）骰子は投げられた。私は永遠に此町を去らうとして居る、何處へ行くかは自分でも知らない。私が愛して居た總ての人は皆私から叛いた。だが、お前だけは、お前だけは純潔な、生れたまゝの女だ。お前は優しい女だ、お前の一生はあの出來心の多い、剛腹な女の意志で、殆ど私の一生と接ぎ合されようとした。お前は二人の無効に成つた結婚の晩に私が愚痴な涙を流した時、恐らく輕蔑の眼で私を眺めて居たらうね。如何なる場合にも、お前は滑稽な人物としての外に私を見ることが出來ないからだよ——其のお前に對して、私は私の胸から出た最後の叫びを殘して置くのだ、お前に對して最後の義務を果すのだ、お前一人にだよ。私は永遠にお前から恩知らずの馬鹿者と、下劣な利己主義者と、恐らくは又殘忍な恩知らずだと思はれることは堪へられない——あゝ、私はお前を忘れることが出來ない……』

で、斯んな事が大判の罫紙に四枚續くのだ。

私は彼の『開けないよ』と言つた言葉に三つ拳骨で戸を打して答へながら、『そんな事を言つても、貴方は今日にも三度位私の許へナスターシャを使に寄越すに違ひない。が、私は決して來て上げませんよ』と、背後から呶鳴つたまゝ、彼を見捨てゝ、ユーリヤ・ミハイローヴナの許へ駈けて行つた。

二

私は其處でも可厭な光景の目擊者と成つた。憫れな女は目の當り欺かれたのだ。が、それを如何することが出來よう？ 私は彼女に何にも言ふことが出來なかつた。私が這入つて行つた時、彼女は香水の濕布と氷嚢とを當てながら、殆どヒステリイの發作のやうにおい〳〵泣いて居た。彼女の前には留度もなく饒舌るピョートル・ステパーノヰーチと、鉈を卸されたやうに口を呟んで居る貴公子とが立つて居た。涙ながらに愚痴を并べながら、彼女はピョートル・ステパーノヰーチが留守にしたことを非難して居た。私は直に彼女が文學會に於ける全失敗と全恥辱とを、何も彼もピョートル・ステパーノヰーチの留守に歸して居る事實を見て驚いた。

彼の中にも私は重大な變化を認めた。彼は何時になく眞面目で、何事かを屈託して居るやうに見えた。原則として、彼はそれ迄決して眞面目に見えなかつた。慣つて居る時でさへ始終笑つて居た、又實際時々慣りもした。彼は今も慣つて居るのだ！ 彼は亂暴に、不注意に、さも迷惑相に苛々しながら語つて居た。彼は今朝早く出掛けたがーノフの邸で不意に病氣に成つたのだと言つた。あゝ、憫れな女は一生懸命に再び欺されたがつて居るのだ！ で、其處に論じられて居た肝心な問題は舞踏會卽ち祭の第二部が引續いて開かれたものか、如何かと云ふので有つた。ユーリヤ・ミハイローヴナは今朝のやうな侮辱を受けた後で舞踏會へ出席するなぞは思ひも寄らないことだと言張つた。換言すれば、彼女の心は彼のために、ピョートル・ステパーノヰーチのために、左樣しなくちや成らぬやうに強ひられたのだ。彼女は彼を神の詫宣のやうに思つて居た。想ふに、彼が行つて仕舞つたら、彼女は直に床に就いたに違ひない。が、彼は飽迄此場を去らうとしなかつた。彼は如何しても舞踏會が開かれて、ユーリヤ・ミハイローヴナも其處へ出席しなくちや成らぬと無現矢理强請つて居た。

『何をそんなに泣くのです？ 貴方は又芝居の見世場を演らうと云ふのですか。何人かに怒りを漏らして　ふむ、漏らすなら、私の上にお漏らしなさい、只急いで下さいな、時間が經ちますからね。貴方も最う決心しなくちや不可ませんよ。朝の文學會は遣り損なつたから、晩の舞踏會で取返すのですよ。此處にお坐の公子も私と同意見だ。眞個此方が居て下さらなかつたら、何んな事に成つたでせうね？』

公子は最初舞踏會に反對して居た。いや、舞踏會其者に反對したのではない、ユーリヤ・ミハイローヴナがそれへ出席することに反對したのだ。何んな事が有つても舞踏會は開かずには置かれまい。が、二三度其意見を主張した後では、だん〳〵默從の態度に變じた。

私は又ピョートル・ステパーノヰーチの餘りに無遠慮な言葉の調子に驚かされた。勿論、其後噂に上つたユーリヤ・ミハイローヴナとピョートル・ステパーノヰーチとの姦通云々といふやうな誹謗に關しては、私は斷乎として排斥する者で有る。そんな事は斷じてなかつた、又有る筈もないのだ。彼は最初から只社交界と官府に勢力を得ようとする彼女の夢想を煽動することに依つてのみ、彼女の計畫に參加することに依つて、彼女に代つて計畫を立てることに依つて、又露骨な阿諛を敢てすることに依つてのみ、彼女の上に勢力を得たのだ。彼はすつかり彼女を手の中に圓め込んだ、彼女に取つては毎日呼吸する空氣のやうに必要缺くべからざるものと成つたのだ。彼女は私を見ると、眼を光らせながら叫んだ。

『此處へ來た、此人に訊いて御覽なさい。此人は始終公子と同じ樣に私の傍に居て呉れました。ね え貴方、悉皆豫め牒合せた隱謀だといふことは、アンドレイ・アントノーヰーチと私とを出來るだけ陷入れようとする隱謀だといふことは明白ですね？ えゝあの人達は豫め計企んで置いたのだ、徒黨を組んだのだ！ 眞個徒黨ですよ、徒黨ですよ。』

『例に依つて貴方は誇大して居るのだ、貴方は始終何か頭の中にロマンティックな考へを有つて居るのですね。だが、えゝと……何君の被入したのは幸ひだ』と、彼は私の名前を忘れたやうな振をした。『此人の意見も何つて見ませうよ。』

『私の意見は』と、私は急いで口を挾んだ。『ユーリヤ・ミハイローヴナさんの意見と同じですよ。隱謀は明瞭に過ぎる位のものだ。私は徽章を返しに參りましたよ、ユーリヤ・ミハイローヴナさん。舞踏會が開かれようと開かれまいと、私の知つたことぢやない、それを決定するのは私の權利に御座いませんからね。が、幹事としての私の任務は終つた。私が餘りに昂奮して居たら、何卒お宥し下さい。併し私は常識の命令と私自身の確信とに反して行動することは出來ませんよ。』

『お聞きですか！お聞きですか！』と、彼女は手を拍いた。

『えゝ聞きました、私は君に言ふがね』と、彼は私の方へ向直つた。『君は何だね、何か君を狂人にするやうな物を食べたんだね。僕の考へる處ぢや、何にも起らなかつた、從來起つたもの若しくは始終此町で起り勝ちなものゝ外には、絶對に何にも起らなかつた。隱謀、成程！あれは見苦しい失敗で有つた、眞個馬鹿けたことさ。だが、何處に隱謀が有るのだい？彼奴等を增長させて、保護して遣つて、彼奴等の學校子供のやうな惡戯を他愛もなく宥して遣つたユーリヤ・ミハイローヴナに對する隱謀だと言ふのか。ユーリヤ・ミハイローヴナさん！私は一箇月の間絶えず何を貴方に言つて置きましたか。何を貴方に警戒して置きましたか。一體貴方はあんな人間どもと一緒に何を爲ようとされたのです？何が貴方をあんな奴等と一緒に成るやうに誘惑したのです？社會を統一する爲ですか。だが、如何です、あんな奴等が統一されますかい。』

『何時貴方が私を警戒して下さいました？それ處ぢやない、貴方は讚めて被坐しやいましたよ、貴方は御自分でそれを主張してさへ被坐しやいましたよ……あゝ、私も驚いた……貴方は御自分でいろんな人間を私と紹介せに伴れて被入したぢや有りませんか。』

『如何致しまして、私は貴方に反對しましたよ、私は斷じてそれを讚めた覺えはない。あんな奴等を貴方に御紹介したことは、確にしました。が、それもあんな奴等が十人二十人と入込んで來てから後ですよ。而も最近「文學的四部曲」を仕上げる爲ぢや有りませんか——あの連中なしぢや、私どもは何とも手が出なかつたのですからね。それに私は賭をしても可いが、今日は同じやうな連中が二三十人も切符なしに這入り込みましたよ。』

『そりやァ眞個其通りでした』と、私は同意した。

『それ御覽なさい、君も最う同意してるのだ。まァ近頃此町で何んな調子が勢力を得て居たか考へて御覽なさい。無遠慮と鐵面皮の外に何にもないぢや有りませんか、始終誹謗と騷擾とが時を得顏に濶歩して居たのですよ。で、誰がそれを奬勵したのですか。誰が自分の權力に依つてそれを庇護したのですか。誰が彼等をして道を誤らしめたのですか。誰が群小をしてあの樣に跋扈せしめたのですか。有らゆる家庭の秘密は、貴方の書畫帖の中に戯畫として收められた。貴方は其奴等の眷中を敲いて愛撫して遣つたぢや有りませんか、貴方の詩人や鳥羽畫畫家を？貴方はリャムジンに貴方の手を接吻させたぢや有りませんか。一神學生は貴方の面前で眞正の州會議員を侮辱して、其令孃の着物を泥靴で汚したぢや有りませんか。今と成つて、貴方は公衆が貴方に反對して立つたのを驚くのですか。』

『ですが、そりやァ皆貴方の仕業ですよ、貴方の！あゝ、神樣！』

『いや、私は貴方を警戒したのだ。私どもは喧嘩迄したのですぞ。解りますか、私どもは喧嘩迄したのですぞ。』

『まア、貴方は私の目の前で嘘を吐いてるのだ！』

『勿論、貴方が左樣仰有るのは何でもないでせうよ。貴方は怒りを漏らす犧牲を必要とするのだ。宜しい、前から言つてる通り私の上にお漏らしなさい。私は寧ろ君に聞いて頂くよ、何君……』と、彼はなほ私の名前を想出すことが出來ないのだ。『先づ指で數へて見ますがね。僕は、リーブティンだけは別問題として、何一つ前以て牒合はされたことはないと斷言するよ、何一つ！僕はそれを證明しますがね、先づリーブティンを解剖して見やうぢやないか。あの男はあの馬鹿なレビャードキンの詩を持つて遣つて來た。君はあれを隱謀だと思ひますかい。だが、あれは單にリーブティンが彼樣して只一寸氣を利かせた積りかも知れないぢやないか。眞面目に、氣を利かせた！あの男は只衆皆を笑はせて、衆皆を興がらせるやうな了簡で演壇に上つた――特にあの男の保護者たるユーリヤ・ミハイローヴナさんをだね。それだけだよ。君は左樣思ひませんか。あれも一箇月以來此町に行はれて居た總ての事と釣合つて居るぢやないか。君は僕に事の眞相を悉く言はせるのですか。僕は斷言するがね、他の事情の下には、あんな事は何でもなく通過した處ですよ。成程野鄙な戯談でした――藥も少々利き過ぎたでせう。が、あれも面白かつたですよ。ねえ君、左樣ぢや有りませんか。』

『何ですつて！貴方はあれでリーブティンが氣を利かせたと仰有るのですか』と、ユーリヤ・ミハイローヴナは怫として叫んだ。『あんな間の抜けた、あんな馬鹿な、あんな物笑ひの卑しむべき仕業が！あれは故意としたのですよ。あゝ、貴方も故とそんな事を言つて被坐しやるのね！そんな事を言ふやうぢや、貴方も彼奴等の隱謀に加擔して被坐しやるのに相違ない。』

『左樣ですよ、私は舞臺の後ろに居て、彼奴等を皆操つて居たのですよ。ですがね、私が隱謀に加擔して居たとすりや――これだけはおぼえて居て下さい――リーブティンだけぢやお終ひに成らなかつたでせうよ。で、貴方の仰有るやうだと、私は又親爺迄引張つて來て、故とあの人にあんな騷動を起させたことに成りますね？處で、親爺に朗讀を許すやうなことに成つたのは、一體何人の過失ですかい。昨日そんな事を許しちや不可ないと貴方を阻止したのは誰でしたかい。えゝ、未だ昨日のことですよ。』

『Oh, hier il avait tant d'esprit,（あゝ、昨日はあの方も彼樣に才氣を具へて居ました、）私は隨分あの方を當にして居たのですよ。それに又あの方は彼樣に立派な擧措進退を具へて被坐した。私はあの方とカルマーヂノフさへ有りや……あゝ、如何しませう！』

『眞個如何しませうだ。ですが、tant d'esprit（あれ程の才氣）にも拘らず、親爺は事態を一層惡くしましたよ。で、若し私が豫め彼樣いふ騷動を惹起すだらうと知つて居たら、確かに昨日貴方に勸めて山羊を裏圃の中へ入れるなぞとは言はない處でしたよ、えゝ――私が貴方のあれ程一生懸命に成つて被坐しやるお祭を壞さうとする一味徒黨に加擔して居たとすればですよ。而も私は昨日貴方を說いて止めさせようとした、彼樣成ることを豫想したから止めさせようとした。勿論、何も彼も前以て豫想することは類かしい。あの人自身も恐らく一分間前には、あんな事を自分が仕出來さうとは知らなかつたでせう。眞個神經の立つた老人といふものは普通の人の樣に考へて置かれないものですからね。が、未だ此形勢を救ふことは出來ますよ。公衆を滿足させるために、明日あの人に公の手續として、有らゆる儀禮の下に二名の醫者を送つて、あの人の健康を問はせるのですね。出來るなら今日でも宜しい、直にあの人を病院へ送つて、冷水濕布を施させるのですよ。左樣すりや、衆皆が笑つて別段眞面目に慣る

やうなことは何にもないのだと考へるやうに成るでせう。私は今晩舞踏會で、あの人の息子として、其事を衆皆に話しませうよ。カルマーヂノフは別問題だ。あの人は眞個馬鹿で、全一時間も論文を引延ばしたのですからね。確にあの人は私と隱謀を廻らして居たに相違有りませんよ。俺も一つユーリヤ・ミハイローヴナを困らせるために騷動を惹起して遣らうよ」と、あの人は考へて居ましたね。』

『あゝ、カルマーヂノフ！ Quelle honte！（何といふ恥辱でせう！）私は顏が燃えるやうな氣がする、あの時の聽衆のことを思ふと恥しさに堪へられない！』

『ふむ、私は燃えるやうな氣なんぞしない、其代りに彼奴を料理して遣りたかつたですね。聽衆は全然正しいのですよ。で、又カルマーヂノフに對しては誰が咎むべきでせう？ 私はあの男を貴方にかぶせましたか。私はあの男の崇拜者の一人ですが。まアあの男のことは如何でも可い、が、三番目の狂人は、あの政治家的な――あれは又別問題ですよ、あれに就いては誰も彼も責任が有る、啻に私の隱謀ばかりぢやない。』

『あゝ、あの事を言つて下さいますな！ あれは恐ろしい、怖ろしい！ あれは私の過失ですよ、全然私の過失ですよ。』

『勿論左樣でした。が、それに對して私は貴方を責めない。彼樣いふ正直な人間に掛けては何人だつて叶ひませんよ。彼得斯堡に居たつて、彼樣いふ人間には一杯喰はされますね。あの男は貴方に推擧された、而も何といふ條件でせう！ だから、貴方も今夜舞踏會へ出席する義務が有ることを承認しなくちや成りませんよ。それが重大な事ですよ。貴方があの男を演壇へ伴れ出したことは何人でも知つて居る。で、貴方は御自分があの男と何の關係もないことを、あの男は今や巡査の手に有ることを、貴方は云ふに云はれない手段で欺かれたのだといふことを公衆の前に明かにする必要が有るぢや有りませんか。貴方は狂人の犧牲に成つたといふことを憤然として公言すべきで有る。あの男は狂人に過ぎないのですからね。兎に角貴方はあの男に就いてそれだけの事を披露しなければ成らぬ――それに世間ぢや元老院議官云々の噂も有りますからね。』

『元老院議官？ 何人がそんな事を言ひました？』

『そりやア私だつて判りませんよ。貴方は何か元老院議官に就いてお聞き込みですか、ユーリヤ・ミハイローヴナさん？』

『元老院議官？ いゝえ。』

『世間ぢや、或元老院議官が此處の知事に任命されて、貴方方は彼得斯堡の政府から交代させられるだらうといふやうなことを言つてますよ。えゝ、私は大勢からそんな話を聞きました。』

『私も聞いた』と、私は口を挾んだ。

『誰がそんな事を言つたのです？』と、ユーリヤ・ミハイローヴナは顏中眞赧に成りながら訊いた。

『誰が最初に言出したと仰有るのですか、そりや判りませんね。ですが、そんな噂は有る、いろんな人が左樣言つてますよ。特に昨日そんな話をして居ました。私には能く判らないが皆眞面目に左樣言つてるやうですね。』

『まア！ で……何て馬鹿な！』

『で、それだから貴方が出席なさらなくちや成らないと言ふのですよ、そんな奴等に愚だといふことを示すためにも。』

『えゝ、そりや私も出席する義務が有るやうには思ひますがね、ですが……若し此上恥を搔かなくちや成らぬ

やうな事が有つたら如何しませう？若し一人も出て來なかつたら？何人だつて來やしませんよ、何人だつて！』

『如何して貴方は左樣熱して居るのです？何人も來ない！折角拵へた新しい着物を如何します？娘達の衣裝を如何します？貴方は女で居てそんな事を仰有るのですかい、本當に能く人間の心が解つて被坐しやいますね？』

『議長の夫人は來ませんよ、あの女は屹度來ませんよ。』

『ですが、要するに何が起つたのですか。何の爲にあの人達は遣つて來ないのですか』と、彼は到頭我慢が仕切れないやうに苛々しながら叫んだ。

『恥辱ですよ、不名譽ですよ——それが起つたのです。私は何と言つて可いか知らない。が、あんな事が有つた後で、私は他人さんに顏が合されませんよ。』

『如何して？如何して貴方は顏が合はされないのです？何故貴方は自分で罪を一身に引受けるのですか。寧ろあれは聽衆の罪ぢや有りませんか、好い年をした市民や、一家の父親どもの？左樣いふ連中は亂暴漢の喧嘩を抑制すべき筈ですよ——あれは皆亂暴漢の仕業に過ぎないのですからね。何んな社會でも、又何處でも巡査ばかりでは斷じて取締れるものぢやない。此町ぢや何人でも一人の巡査を捕まへて到る處自分を保護して貰ひたいやうなことを言ひますがね。そりやア社會は自ら保護しなくちや成らぬといふことを了解しないのですよ。で、此町の一家の主人や、役人や、細君や娘は、あんな場合如何しました？彼等は只默つて坐つて、顏を蹙めて居たばかりだ。實際、此町には秩序紊亂を阻止するやうな社會の先達といふものが有りませんよ。』

『えゝ、そりや眞個其通りでした！あの人達は默つて坐つて、只顏を蹙めて居ました。そして……ほんやり四邊を見廻して居ました。』

『で、それが眞實だとしたら貴方は大きな聲で、儼然として左樣言ふべきぢや有りませんか——貴方が打敗られた譯ぢやないと云ふことを、左樣いふ一家の主人や母親どもに示す爲にも。えゝ、貴方にはそれが出來ますよ。貴方は頭が明瞭な時には一種の技倆を有つて被坐しやる。左樣いふ連中を貴方の周圍に集めて、大きな聲で左樣仰有つたら可いでせう。それから「人の聲」や「經濟新報」の紙上で發表するのですね。お待ちなさい、そりやア私が自分で遣りますよ。貴方の代りに皆私が引受けませう。勿論今夜は一層監督の必要が有りますよ、酒保も見張らなくちや不可ない。公子にもお願ひなさらなくちや不可ませんよ、それから何君にも……君は僕等を見捨てちや困りますよ、ねえ君、僕等は又始めから遣り直さなくちや成らぬのですからね。で、最後に貴方はアンドレイ・アントノーヰッチと手を携へて出席しなくちや不可ない……アンドレイ・アントノーヰッチさんは如何しました』

『おゝ、貴方はあんな天使のやうに人の好い人を始終不當に、不正に、慘酷に取扱つたのですね！』と、ユーリヤ・ミハイローヴナは手帛を眼に當てながら、殆ど泣出さんばかりに、不意に聲を擧げて叫んだ。

ピヨートル・ステパーノヰッチも流石に一瞬間逡巡とした。

『驚きましたね！私は……私が何を言ひました？私は始終……』

『貴方は決して、決して！貴方は決してあの人に正當な判斷を與へませんでした。』

『だから女は解らないと云ふのだ』と、ピヨートル・ステパーノヰッチは皮肉な微笑を漏らしながら呟いた。

『あの人は男の中でも眞面目な、優しい、天使のやうな人ですよ。一番親切な人ですよ。』

『成程、そりやア親切だといふことは……私は始終あの人を好く言つてたものだ……』

『決して！ですが、最うそんな話は止めませう、私があの人を辯護するのは餘り見つとも好く有りませんからね。

今朝あの議長の細君も、昨日の事に就いて何か皮肉な當こすりを言つてましたよ。』

『えゝ、あの女は今昨日のことなぞ考へてる暇はない、今日の事で一杯ですからね。貴方は又如何してあの女が今夜舞踏會へ來ないからつて、そんなに倒顚するのですか。勿論、あの女はあんな破廉恥な行爲の中へ捲込れた後ぢや遣つて來られないでせうよ。恐らくあれはあの女の惡いのぢやない、而もあの人の名譽は……あの女の手は汚れましたよ。』

『何を仰有るのです？私には解らない、何故あの女の手が汚れたのですか』と、ユーリヤ・ミハイローヴナはまごまごしながら相手を見詰めた。

『私も事の實否は保證しませんがね、町はあの女があの二人を一緒に寄せたのだといふ話で持切つて居ますよ。』

『何を仰有るのです　何の二人を一緒にしたのです』

『何ですツて、貴方は御存じないと仰有るのですか』と、彼は心から驚いたやうな容子を裝ひながら叫んだ。『如何して、そりやスタフローギンとリザベータ・ニコラーエヴナの二人ですよ。』

『何ですツて？如何して？』と、二人は一時に聲を擧げた。

『貴方方本當に知らないのですか。それぢや、如何してこれは眞個小說的な話ですよ。リザベータ・ニコラーエヴナは自ら進んであの夫人の馬車からスタフローギンの馬車へ乘り移つた。そして、白晝後者と共にスクヴォーレジュニキへ馳落したのですよ。ほんの一時間前、一時間にも成らない位ですがね。』

私どもは只呆氣に取られた。勿論二人は彼に質問の矢を向けた。が、不思議なことに、彼は自分で其場の目擊者だと言ひながら、細かい事は何一つ語り得なかつた。大體の事件は次の樣に起つたらしいのだ。議長の夫人がリザとマヴーリキイ・ニコラーエヴィーチとを文學會から猶足の病で寢て居るプラスコーヴィヤ・イヴーノヴナの邸へ馬車で送り届けようとして居た時、玄關の一方二十歩位離れた間近に一つの馬車が待つて居るのを見掛けた。で、リザが此方の馬車から飛出すと、眞直に其馬車へ馳け着けたと云ふのだ。馬車の扉が開いて、忽ち又締められた。リザは又マヴーリキイ・ニコラーエヴィーチに對して、『堪忍して下さい』と喚んだ。馬車は其儘スクヴォーレジュニキへ全速力で馳け去つた。二人が遮二無二、それは前以て謀し合はされたのか、誰が其馬車に居たかと訊いたのに對して、ピョートル・ステパーノヴィーチは、それに就いては自分は何にも知らないと答へた。無論謀し合されたことに違ひない。が、自分はスタフローギンの顏を見た譯ぢやないのだ。恐らく老執事のアレキセイ・エゴーリイチでも馬車の中に居たらうと云ふのだ。『如何して君は其處に居合せたのだ、如何して又君は彼女がスクヴォーレジュニキへ馳け去つたといふ事實を知つたのだ？』と、訊いたのに對して、彼は通りがゝりに見掛けたのだ、又リザを見て、自分も馬車の傍へ馳け着けた――それで居て、彼は其中に何人が居たかを知らないと言ふのだ。此男のやうな探索好きの男が！――又マヴーリキイ・ニコラーエヴィーチは後を追掛けようとする處か、リザを止めようとさへしないで、『あの兒はスタフローギンへ行くのだ、スタフローギンへ』と、聲を限りに喚んで居る議長の夫人を手もて抑制しようとさへしたと答へた。此處に到つて、私も最う我慢が仕切れなく成つた。で、ピョートル・ステパーノヴィーチを目懸けて激しく叫んだ。

『そりやア皆君の仕業だ！君は今朝そんな事をして居たのだ、君が其馬車に乘つて居て、あの女を伴れて行つたのだ……そりやア君だ、君だ、君だ！ユーリヤ・ミハイローヴナ、此男は貴方の敵ですよ、此男が又貴方の名譽も臺なしにして仕舞ひますよ。御用心なさい！』

斯う言つたまゝ、私は夢中で家の外へ駈出した。私は自分でも驚いた、如何してあんな事をあの男に言ふ氣に成つたものか、今日に成つても未だ解らない、が、私の推察は適中した。殆ど私の言つた通りで有つたのだ、一番私が奇異に感じたのは、あの男が其話を持出した如何にも技巧的な遣方で有つた。彼は此家へ這入ると直に非常な事件としてそれを話さないで、私ですら彼の話を俟たずして知つて居るものと見做したやうな振をして居た。そんな短い時間の間に私どもの耳へ這入るなぞといふことは迚も有り得ないことだ。又私どもがそれを知つて居るとしたら、彼が其問題を持出す迄默つて居る譯がないではないか。加之、彼は又そんな短い時間の間に町中の者が議長夫人の『噂で持切つて居る』なぞといふことを聞き込む筈がないのだ。加之、彼は其話をして居る間に、恐らく私どもが馬鹿ですッかり騙されて居ると思つたもので有らう、一二度野鄙な、輕薄な微笑を漏らしたものだ。

が、私は彼の爲に猶豫しようとは夢にも思はなかつた。私は堅く衷心の事實を信じた。で、我を忘れてユーリヤ・ミハイローヴナの家から駈出した。此の大破綻は私の胸を劈いた。私は殆ど泣かむばかりに傷けられた。又實際數滴の涙を瀉しもした。私は眞個爲す所を知らなかつた。で、先づステパーン・トラフィモーギチの許へ駈けて行つたが、七面倒な老人は矢張戸を開けようとしない。ナスターシャはおづ〳〵した小聲で、主人は床に就いて居ると告げた。が、私はそれを信じなかつた。リザの邸では、私は召使どもにいろんな話を聞くことが出來た。彼等は駈落の一條を確認した。が、彼等も深い樣子は判らないのだ。家の中は非常に混雜して居た。女主人がたび〳〵氣を失ふやうな發作に罹るのでマヴーリキイ・ニコラーエヴィチは枕頭へ附詰めにして居ると云ふことだ。何うもマヴーリキイ・ニコラーエヴィチには取次いで貰へさうにもなかつた。ピョートル・ステパーノヴィチのことを訊いて見ると、彼は近頃絶えず此家へ出入して、時には一日に二回來ることも有つたさうな。召使どもは憂はしげな顔をして、特にリザの話をする時は尊敬の色を表して居た。彼等は皆彼女を愛して居たのだ。彼女が墮落した、すッかり墮落したといふことは最早爭はれなかつた。が、此事件の心理的方面は、私には薩張解らなかつた、特に前の日スタフローギン對彼女のあの場面が有つた後では解らなかつた。で、町中を駈け廻つて、知己の家々に就いて訊いて廻る——勿論、今頃は皆此噂を知つて居て喜んで話して呉れるだらうが、リザのために屈辱だと云ふことを外にして、そんな事を爲るのは私にも可厭なことで有つた。が、妙な事に、私はダーリヤ・パブローヴナに會ひに行つた。尤も、私は這入ることを許されなかつた——昨日の朝の事が有つて以來、此家では何人も通されないのだ——彼女に會つた處で、私は何と言つたものか、又何の爲に彼女に會ひに行つたのか、一切私には判らない。彼女の許を出て、私は彼女の兄に會ひに行つた。シャトーフは蹙め面をしながら、默つて聽いて居た。私が這入つて行つた時、彼は此前見た時よりも一層憂鬱な顔をして居た。何やら酷く屈托が有るやうで、辛つと努めて私の話を聽いて居るやうに見えた。彼は殆ど口も利かないで、平常よりも一層喧しい音を立てながら部屋の中を隅から隅へ歩き廻つて居た。私が階段を降りて行かうとした時、彼は背後からリープティンの許へ行けと喚び掛けた。『彼處なら何も彼も解るだらうよ。』が、私はリープティンの許へは行かなかつた。大分自宅の方へ歸る道を來た後で、私は再びシャトーフの家へ取つて返した。部屋の中へは這入らないで、半ば扉を開けながら、說明も何にも附けないで、簡潔に彼に暗示した。『君は今日マーリヤ・チモフェーヴナの許へ行つたら如何だい？』これを聞くと、シャトーフは私に惡態を吐いた。私は其儘出て行つた。後で忘れると不可ないから此處に言つて置くが、彼は、其夜わざ〳〵町の他の外れ迄、少時の間顏を見ないマーリヤ・チモフェーヴナに會ひに行つた。彼女は身體も强壯で上機嫌で居たさうな。レビャードキンは死んだやうに醉拂つて、入口の部屋の長椅子の上に寢て居たと云ふことだ。これが九時で

有つた。彼は次の日途上で一寸私と出會つた時、自分で其話をした。十時前に、私は舞踏會へ出席しようと決心した。が、幹事の資格でゞはない。それに私は徽章をユーリヤ・ミハイローヴナの許に殘して來た。私は何にも言はないで、只町の人が今日起つたことを何と言つて居るか、それが聽きたいといふ抵抗すべからざる好奇心に誘はれたのだ。私は又遠方からでも可いから、一寸ユーリヤ・ミハイローヴナの顏を見たいやうな氣がした。私は今日の午後あんなに速急に彼女の許を辭したといふことを痛く後悔して居た。

三

其夜の奇怪至極な出來事と、曙早朝引續いて起つた恐ろしい成行と共に、其夜は今なほ怖ろしい惡夢のやうに思はれる。私の生涯の中でも最も怖ろしい一夜で有つた。私は舞踏會には後れて行つた。私が着いた頃には、最う殆ど濟んで居た程早く終つたのだ。私が議長の家の玄關へ着いたのは十一時で有つた。文學會の開かれた廣間は、半時間の休憩の間にすッかり掃除が出來て、町中の人が踊る舞踏室に當てられて居た。私は舞踏會が成功を收めようとも思つて居なかつたけれど、眞逆是程だらうとは夢にも知らなかつた。上流社會は一家族も出席しなかつた。稍勢力の有る屬官の家族すら見られない――これは眞個意外な事實で有つた。夫人や令孃としては、ピョートル・ステパーノヴィチの議論は――今思へば曖昧なものでは有つたが――全然間違つて居たことが判つた。極僅少しか出席しないのだ。四人の紳士に對して、一人の婦人が有るかなしだ――それも何んな婦人で有つたらう！如何はしい聯隊の女や、娘を伴れた三人の醫者の細君や、田舎から來た二三の貧乏な婦人や、前にも一寸擧げた祕書官の七人の娘と一人の姪や、商人や、郵便局の書記や、其他小ぼけな連中の細君どもや――これがユーリヤ・ミハイローヴナの豫期したもので有らうか。商人の家族でも半ばは缺席した。男の方は、これはと思はれるやうな人は皆缺席したが、それでも隨分集まつて來て居た。が、彼等は何うも怪しけな容子をして居た。勿論、中には細君を伴れた穩やかな士官や、家族の言ふが儘に成つて居る素直な父親も――例へば、七人の娘の父親だといふ例の秘書官の如き――二三は來て居た。是等の卑しい、取るに足らぬ人々は、其中の一人が口へ出して言つたやうに『皆已むを得ない』から遣つて來たのだ。が、一方では、多數の身を持たない連中や、ピョートル・ステパーノヴィチと私とが切符なしで這入つて來たのぢやないかと疑つたやうな連中が、晝間よりも一層多く入込んで居るやうに見えた。で、彼等は皆茶菓室に集まつて居た。此處へ來るや否や、豫て約束して置いた會合の場所でも有るやうに、づか〳〵と其處へ這入つて行くのだ。少くとも私には左樣見えた。茶菓室は幾間か開け放した最後の大きな室に設けて有つた。此處にブロホリィチは倶樂部の有らゆる獸立を盡して、酒や旨味い物を並べ立てながら斜に構へて居た。私は殆ど襤褸に近い上衣を着て、服裝からいふと迚も舞踏會へ出る人間でないやうな數人を見掛けた。彼等は幹事の大骨折で漸つと今少し鎭まつて居るものらしい。が、それも長くは續かないのだ。何處からこんな連中が伴れて來られたかは何人も知らない。勿論舞踏會を最も平民的な性質のものにして、『職工や店員でも切符の代を拂ひさへすれば、決して入場を拒まない』と云ふのが、最初ユーリヤ・ミハイローヴナの考への一部で有つたことは爭はれない。彼女は大膽にも委員會でそんな言葉を口に出しさへした。尤も、極端に貧乏暮しをして居る此町の職工どもに、一人だつて切符を買ふ者が有らうなぞとは夢にも思つて居ない、其點は絕對に安心して居たのだ。處で、こんな連中がどし〳〵入込んで來た。幾許委員會の性質が平民的色彩を帶んで居たにもせよ、私はこんな容子の惡い、襤褸を着た連中が正當に入場したものとは何うも信じられないのだ。が、一體誰がこんな奴等を入場させたのか、又何んな目

的で！リャムジンとリーブティンとは『文學的四部曲』の仲間へ加はる爲に舞踏會へ出席して居るには居たが、既に幹事としての徽章を奪はれて居た。が、驚いたことに、リーブティンの代りには、午後の文學會でステパーン・トラフィモーギーチとの小競合に一番大きな騒動を惹起した例の神學生が幹事に成つて居た。リャムジンの代りにはピョートル・ステパーノギーチ自身が成つた。斯ういふ事情の下には如何成る事で有らうぞ？

私は會話に耳を傾けようとした。私は先づ耳にした會話の亂暴なのに惘れた。例へば、或一團ではユーリヤ・ミハイローヴナがリザとスタフローギンとの駈落を手傳つた、又それに對して後者から或報酬を得たと云ふやうなことを噂して居た。其金額迄口にされた。全體此祭もそれを目當に開かれたのだ、それだから町の人達も半分以上遣つて來ないのだ、又レムブケ自身もそれを聞いて『頭が如何か成つた程』顚倒した、が、氣が狂つて居やうが、居なからうが、彼女は『勝手に亭主を引廻すんだよ』と云ふやうなことも言ひ合つた。又嗄れたやうな、亂暴な、意味有りげな高笑ひが處々に聞えた。誰も彼も此の舞踏會を嚴格に批評して、ユーリヤ・ミハイローヴナを口汚く罵つた。實際不秩序な、連絡のない、醉拂つたやうな、昂奮した空談ばかりで、一緒にそれを纏めて、其中から何物かを引出すやうなことは迚も出來なかつた。同時に又、何氣なしに茶菓室で一人悅んで居るやうな單純な連中も有つた。婦人連でさへ、何物にも驚かず、怖れず、平氣で快げに騒いで居るのも有つた。左樣いふのは、主として所天と一緒に來た軍人の細君で有つた。彼等は小さな卓子の周りに一團をつくつて、紅茶を飲みながら、愉快げに笑ひざめいて居た。茶菓室は客の大半に取つて快い避難所と成つた。が、少時後には、此の大團體が舞踏室へ押寄せるのだから、考へて見るだけでも怖ろしい！

其間、例の貴公子は大廣間で二三の淋しげな舞踏の組を造つた。若い婦人は其中に混つて踊つた、兩親どもは又それを見て悅んで居た。が、左樣いふ眞面目な人々の多くは、娘どもにも好い加減に慎しみをさせたら、成だけ『難儀の起らない』間に、早くも引揚げようと考へ出した。有らゆる人が屹度何か知ら起るものと確信して居たらしいのだ。ユーリヤ・ミハイローヴナが何んな心持で居たか、私には何とも言はれない。私は彼女の傍へ行つたが、何一つ談話はしなかつた。私が這入つて行つた時お叩頭をしたのに、彼女は答禮もしなかつた。私に氣が附かないのだ、事實氣が附かないのだ。彼女は可悼しい顏附をして居た、慨然として尊大に構へながら、眼にはなほきよときよとした不安の色が動いて居た。彼女の苦しげに自ら抑制して居る樣が明々と見えた——誰の爲に、何の目的で？彼女は確かに此場を去るべき處で有つた、特に所天を伴れて行くべき處で有つた。而も彼女は其儘殘つて居た！彼女の顏附から見ても、今や彼女の『眼が十分開いた』ことは誰にでも判つた。彼女は只自ら屈して最後の大破綻を待つて居るやうに見えた。彼女はピョートル・ステパーノギーチを傍へ呼び寄せようともしなかつた。それに、彼は彼女を避けるやうにして居た。私は彼が茶菓室に坐つて、非常に愉快げにして居るのを見掛けた。が、彼女は其儘舞踏室に居殘つて、一瞬間と雖もアンドレイ・アントノーヴィーチの傍を離れないやうにして居た。あゝ、其瞬間迄と云ふもの、其朝ですら彼女は彼の健康に就いて何とか言ふものが有つたら、心から慣つて追ひ歸したに違ひない。が、今や彼女の眼は此方面にも開いて來たのだ。で、私は一目見た時からアンドレイ・アントノーヴィーチの容態が、午後よりも一層惡く成つて居るのを感じた。彼は一種の忘却の中に沈んで、殆ど自分が何處に居るかといふことも知らないやうに見えた。時々彼は不意に嚴しい眼をして四邊を見廻した。二度ばかり私にも眼を向けた。一度なぞは何やら言はうとした。他人にも聞えるやうな大きな聲で言出して、終ひまで言切らずに止めて仕舞ふから、彼の傍に居た懶ましやかな老書記なぞは、殆ど狼狽して居た。が、こんな惘れた老書記の仲間ですら、眉を顰

めて、ユーリヤ・ミハイローヴナからは遠く離れるやうにしながら、同時に彼女の所天の上には、吃驚したやうに眼を瞠つて、平常の服從的な態度とは不似合な、妙な眼をぢろ〳〵と向けて居た。

『左樣、それは私も驚いたのよ。私は不意にアンドレイ・アントノーヰッチのことが解り出した』と、ユーリヤ・ミハイローヴナは其後私に白狀した。

然り、彼女には未だ責任が有つた！恐らく、私が歸つた後で、彼女がピョートル・ステパーノヰッチといよ〳〵舞踏會を開くことにして、自分も出席すると定めた時、彼女は再びアンドレイ・アントノーヰッチが畫の會ですつかり心を案されながら、ぼんやり坐つて居た書齋へ遣つて行つたに違ひない。そして、再び彼女と一緒に出席するやうに說伏せようとして、有らゆる誘惑を用ひたに違ひない。が、彼女は今や何んな惚れな地位に立つて居ることだらう！而も彼女は此場を立去らなかつた。自尊心のためで有らうか、それとも單に血迷つたのか、私には解らない。彼女は毎もの尊大な態度に似もやらず時々世辭笑ひをしながら、傍に居る婦人どもに話を仕懸けて見た。が、彼等は只當惑して、『左樣です』とか、『いゝえ』とか云ふやうな、如何にも相手を信用しないやうな單語を漏らすだけに止まつた。そして、明かに彼女を避けた。

此舞踏會に出席した、何人から見ても疑はれない勢力家と云へば、前にも一度述べたことの有る有名な將官一人で有つた。例のスタフローギンとガヴーノフとの決鬪の後で、議長夫人の邸で公衆の憤怒に口火を開いた紳士で有る。彼は威嚴の有る態度で室々を歩き廻りながら、四邊を見廻したり、耳を傾けたりして、自分は自ら慢しむと云ふよりも、寧ろ其光景を見に來たと思はれるやうに努めて居た。彼は到頭ユーリヤ・ミハイローヴナの傍に座を占めて、明かに彼女の氣を引立てゝ、彼女を安心させようと努めながら、一歩も傍を離れなかつた。成程彼は極親切な人で、位置も高く、又此人から同情して貰つた處で傷けられたやうな心持には成らない程年を老つても居た。が、此老饒舌家が敢て自分を憫れんで、今夜彼が出席したのは餘程此方に得を與へるものだと意識しながら、殆ど自分を保護するやうな態度に出られるのを其儘承認するのは、彼女に取つて隨分苦し相に見えた。將官は絶えず饒舌り續けて居た。

『世に七人の義人がなけりや一つの町は立行かないと云ふやうなことを言ひますがね……確か七人だつたと思ひますよ、何うもはッきりした數はおぼえて居ませんがね。私は其の七人の中の何れだけが――此町の確實な義人ですね――何れだけが此舞踏會へ出席したか知らない。が、左樣いふ人が出席したにもせよ、何うも不安を感ぜずには居られませんね。Vous me pardonnez, charmante dame, n'est-ce pas？（御免なさい、ねえ貴方、左樣ぢや有りませんか。）私は比喩で物を言つて居る。が、茶菓室へ行つて見ると、能くまア無事で出て來られたものだと思ひますよ……あの正直なプロホリイチは最う彼處に居ませんでした。私はあの男の酒場が朝迄には屹度壞されて仕舞ふだらうと思ひますよ。が、私は笑つて居るのだ、私は只例の「文學的四部曲」が何んな事を遣るだらうかと、それを見てから自宅へ歸つて寢ようと思つて居ますがね。まア老人のことだから勘辯して下さい。私は早くから寢ます、貴方も子供に言ふやうぢやが、早く「ねンね」なすつた方が好う御座いますよ。ねえ貴方、私は實の處好い女の子を見に來たのですがね……何處へ行つたとて、此町程好い娘の澤山居る處は有りませんよ。此町の女どもは……一體に餘り惡くない……少し亂暴で、いや……眞個若い娘といふものは鮮やかなものですよ……が、鮮やかといふ外に何にもないぢや有りませんか。それでも見て居るのは好い心持でさア。眞個薔薇の蕾ですよ。只唇が少し厚過ぎる。一體露西亞の女性の美には不規則な處が有りますね……Vous me pardonnez, n'est-ce pas？（御免な

さいな、えゝ？）……だが、愛くるしい好い眼をして……左樣いふ薔薇の蕾も、若い間二年や三年は好いものでさ……それから蕾が開いて仕舞ふと、最う駄目ですね……後には只婦人問題しか殘りませんよ……私も其問題は可成好く理解して居る積りですがね……ふむ！却々好い廣間だ。室々の裝飾も惡くない。只不好ないのは婦人の出席者が少ないことですね。いや、私は服裝のことなぞ餘り言ひませんよ。だが、ヴルヴーラ・ペトローヴナさんは到頭約束に背いて花を送つて寄越さなかつたさうですね。ふむ！あの女も花どころぢやないのですかな、pauvre mère（憐れな母よ。）それにリザは如何したのです！……貴方は未だお聞き込みに成りませんか、世間ぢや不思議な話だと言つて居ますよ……で、又スタフローギンが表面へ出て來ましたね……ふむ！私は最う自宅へ歸つて寢ますよ……何うも眼が開いて居られない。時に「文學的四部曲」は何時始まりますかな。』

到頭「文學的四部曲」が始まつた。近頃町中ぢや會話が舞踏會のことに及ぶ毎に、屹度此「文學的四部曲」の噂が出たものだ。それに、何んなものだと云ふことが何人にも解らない處から、非常な好奇心を喚起したものだ。是位成功の機會を得るに都合の惡いことはない。又成功しなかつたら、それこそ失望が激しいのだ。

大廣間の横側の扉がさつと開かれて、五六人の假面を被つた役者が現れた。見物はどや〳〵と其周りに集つた。茶菓室に陣取つて居た連中も一人殘さず雪崩れ込んで來た。假面を被つた役者はいよ〳〵舞踏に取懸つた。私は正面へ押出して、恰度ユーリヤ・ミハイローヴナと、フォン・レムブケと、例の將官との後ろに座を占めた。此時、今迄避けるやうにして居たピョートル・ステパーノヴィチがユーリヤ・ミハイローヴナの傍へ飛び込んで來た。

『私は始終見張りをしながら茶菓室に居ましたよ』と、彼は何か惡い事をした學校子供のやうな態度で囁いた。が、それは一層彼女を苛立たせるために、故とそんな態度を裝つたのだ。彼女は憤然として顏を赧らめた。

『最う私を瞞さうたつて駄目ですよ、貴方も失禮な方ですね！』と、彼女は殆ど周圍の人に聞えるやうな、大きな聲で言つた。ピョートル・ステパーノヴィチはさも滿足したやうに傍らを去つた。

此の「文學的四部曲」よりも詰らない、野鄙な、無趣味で間の抜けた比喩譚を想像することは一寸艱かしからう吾々の地方交際社會に取つて、これよりも不適當なものは想像さへ及ばない。而も彼等はこれをカルマーヂノフの立案だと言つて居る。實際リープティンがあのヴィルギンスキイの宅の會合に出て居た跛の教師の援けを籍りて、萬事を切盛りしたのだ。が、カルマーヂノフが案を立てるには立てた。又彼自ら其中の主要な役に扮して出場すると云ふやうな噂も有つた。四部曲は假面を被つた役者の六組から成立つて居た。別に變つた衣裝を着て居る譯ではない、普通の人と同じやうな服裝をして居た。例へば、一人の身丈の低い年を老つた紳士が普通の燕尾服を着て、壽老人のやうなつけ鬚を生して居る――これで其人の假裝の全部が成立つて居るのだ。其男は魂の抜けたやうな顏の表情をしながら、同じ處を何遍も小刻みに往反りして跳ね廻つた。時々押へ着けたやうな皺嗄れた聲を漏らした。此の皺嗄れた聲が有名な新聞の一つを暗示した積りなのだ。此役者と向ひ合つて、XとZといふ二人の巨漢が踊つた。此二つの文字は上衣に縫ひ附けて有つた。が、其意味は最後迄説明されなかつた。『眞正な露西亞の思想』は燕尾服に白の手套を穿めて、眼鏡を懸けた中年の紳士に依つて代表された。此紳士が首に械を穿められて居る――眞物の械を。彼は小脇に何か知ら書類を入れた折鞄を挾んで居た。又疑ぐり深い手合を説得するために、此の『眞正な露西亞の思想』の眞正を保證する外國から來た手紙が彼の衣嚢から覗いて居た。それ等のことは一々幹事に依つて説明された。衣嚢から覗いた手紙の文字は客の方からぢや讀めないからだ。『眞正な露西亞の思想』は右の手を擧げて祝杯でも擧げるやうに洋盃を捧げて居た。此男と一列に列んで兩側に頭髪を短く截つた虚無主義の少女が跳

廻つて居た。又、彼の眞向ひには、手に重い棍棒を握つた燕尾服の老紳士が最一人踊つて居た。此老紳士は彼得斯堡の或激烈な雜誌を代表するので、『お前方粉微塵に敲きのめすぞ』と言ふやうに見えた。が、そんな棍棒を持つて居ながら、彼も『眞正な露西亞の思想』が懸けた眼鏡には敵はないで、彼方此方とそれを避けるやうにした。終ひには廻場を失つて、獨樂の樣にぐる〳〵廻つたものだ――恐らくは、それ程良心の苛責が強いと云ふことらしい。尤も、私も一々そんな下らない緣起を記憶えては居ない。が、大抵そんなやうな事ばかりで、私も終ひには他人事ながら氣恥かしく成つて來た。同じ心持が見物全體の顏色にも反映して居た。少時の間は、皆默つて迷惑相に見詰めて居た。だん〳〵不平の聲が聽衆の中に起つた。

『あれは何の積りかね』と、茶菓室から出て來た一人が一團の中に有つて呟いた。

『馬鹿けて居るね。』

『何か文學的な意味が有るんだよ「人の聲」の批評かも知れないね。』

『それが僕に取つて何だ？』

他の一團では、

『馬鹿な奴等だな。』

『いや、彼奴等が馬鹿ぢやない、此方等が馬鹿なんだよ。』

『何故君は馬鹿なんだ』

『僕は馬鹿ぢやないさ。』

『ふむ、君が馬鹿でなけりや、僕もない筈だ。』

第三の一團では、

『彼奴等殴り飛ばして遣りたいやうだね。』

『此會堂を敲き壞せ！』

第四の一團では、

『レムブケ夫妻が恥かしげもなくあれを見て居るのが、僕には解らないよ。』

『如何してあの夫妻が恥ぢなくちや成らぬのだ。君は恥ぢちや居ないだらう』

『いや、僕は恥ぢて居る。それにレムブケは曖しくも知事だよ。』

『で、君は豚だ。』

『私は是迄、こんな詰らない舞踏會を見たことがない』と、ユーリヤ・ミハイローヴナの直ぐ傍に坐つて居た一人の女が聞えよがしに呟いた。四十ばかりの肥つた女で、頬に臙脂を塗つて、けば〳〵した色の絹の衣裝を着て居た。此町ぢや何人でも此女を知つて居るが、一人も此女と往來する者はない。或州會議員の寡婦で、所天は木造の家と、少額の年金を殘して死んだ。が、彼女は立派な生活をして、馬も畜へて居た。二箇月前に、彼女はユーリヤ・ミハイローヴナを訪問したが、門前拂ひを喰つた。

『斯んな事は前から判つてさうなものですがね』と、ぢろ〳〵ユーリヤ・ミハイローヴナの顏を見詰めながら附け加へた。

『前から判つて居たら、何故被入したのです？』と、ユーリヤ・ミハイローヴナもつい言はずに居られなかつた。

『えゝ、私は馬鹿でしたから』と、陽氣な女は直にでも打つて懸りさうな勢ひで返辭をした。が、例の將官が

間を隔てた。

『Chère dame（ねえ貴方）』と、彼はユーリヤ・ミハイローヴナの耳元へ口を寄せて囁いた。『實際貴方はお歸りに成つた方が好う御座んすよ。私どもは只彼奴等の邪魔をして居るばかりだ、彼奴等は私どもが居らずとも一人で勝手に愧しみますよ。貴方は最う貴方だけの役を爲すつた、貴方は此舞踏會を開いてお遣りなすつた、これからは彼奴等の自由に打捨つて置いてお遣りなさい。それにアンドレイ・アントノーヰーチは何うもお加減が好くないやうぢや有りませんか……ねえ、迷惑の起らない間に。』

が、それも最う遲かつた。

四部曲の演ぜられる間、アンドレイ・アントノーヰーチはだん〳〵苛々して來るやうな憤怒の眼で踊手を見詰めて居た。で、聽衆の言草を耳にした時には、不安相に四邊を見廻し出した。其時始めて、彼は茶菓室から押寄せて來た連中の容子に眼を留めた。彼の顏には非常な驚愕の色が見えた。不意に四部曲の中の道化た仕草に對する高笑ひが滿堂に鳴渡つた。例の手に棍棒を握つて踊つて居た『激烈な雜誌』の發行主はすッかり眼鏡を懸けた『眞正な露西亞の思想』の凝視に參つて仕舞つて、それを遁れる術を知らない處から、最後の飛躍として、不意に頭を下にして足をぶら〳〵させながら歩き出した。これは其激烈な雜誌の爲に常識の絶えざる顚倒を象徵化したものださうな。逆立ちの出來るのはリャムジン一人で有つた處から、彼は棍棒を持つた發行主の役を演ずる人に選まれた。ユーリヤ・ミハイローヴナは頭で歩くやうな人間が有らうなぞとは夢にも思つて居なかつた。で、其後彼女は失望と憤怒を私に漏らしながら、『衆皆が私に藏して居たのだ、藏して居たのだ』と、繰返した。聽衆の笑ひは勿論そんな比喩に刺戟されたのではない、單に燕尾服を着た人間が頭で歩くから笑つたのだ。レムブケは怒り心頭に發して、ぶる〳〵と顫え上つた。

『馬鹿野郎！』と、彼はリャムジンを指示しながら叫んだ。『あの馬鹿野郎を抑まへて、逆樣にしろ……足を引ツくり返して……頭を下に……左樣だ、頭を下にして……下に！』

リャムジンは驚いて足の上に立つた。笑ひ聲は一層高く成つた。

『笑ふ奴等は皆叩き出せ！』と、レムブケは不意に命令を下した。

再び怒罵や笑聲が群集の中に鳴り渡つた。

『閣下、叩き出すなんて、そんな事は出來ませんよ。』

『君は公衆を侮辱したのだな。』

『左樣いふ君が馬鹿なんだよ』と、不意に一つの聲が隅の方から叫んだ。

『海賊！』と、他の端から一人の男が叫喚いた。

レムブケは急に聲する力を見廻して眞蒼に成つた。不意に何事かを想出して點頭く處が有つたやうに、空洞な微笑が彼の唇に表れた。

『皆さん』と、ユーリヤ・ミハイローヴナは所天を連れ出さうとした時、二人の周りへ押寄せた群集に向つて言つた。『皆さん、アンドレイ・アントノーヰーチを許して遣つて下さい。此人は病氣です……何卒……堪忍して下さい、皆さん。』

實際、私は彼女が『堪忍して下さい』と言ふのを聞いた。萬事が目まぐるしい程疾く起つた。が、私は事實として公衆の一部がユーリヤ・ミハイローヴナの左樣言つた言葉を聞くや否や、狼狽して直に室の外へ駈け出したのを

記憶えて居る。又一人の女がヒステリイのやうな涙聲で叫んだ。

『あゝ、又同じ事だ！』

で、客が先を爭つて退却して居る時、又一つ午後と同じやうな破裂彈が爆發した。

『火事だ、火事だ！河岸は一面の火事だ！』

私は何處から最初此の怖ろしい叫聲が起つたかを知らない。最初廣間で聲を揚げたのか、それとも何人か入口から階段を登つて來たのか。が、其後は筆紙に盡されないやうな騷動が續いた。客の大半は向河岸から來て居て、其方面に於ける木造家屋の持主又は住居人で有つた。彼等は窓の傍へ駈け寄つて瞬く間に窓掛を引纖つて、窓の扉を叩き壞した。河岸一面に焰が上つて居た。實際の處火事は未だ始まり掛けで有つた。が、三箇所違つた處に火の手が上つて居た――それが怖ろしいのだ。『放火だ！シュピーグリンの職工ども！』と、口々に叫喚いた。私は二三の特徴の有る絶叫を記憶して居る。

『私は前から斯んな放火が有るだらうといふ氣がして居た。えゝ、此の二三日前から左樣思つて居た。』

『シュピーグリンの職工だ、シュピーグリンの職工だ。それに違ひない！』

『皆火を放けるために、故と瞞して此處へ喚び寄せられたのだ！』

最後の最も驚くべき絶叫は、一人の女の口から發せられた。それが少しも故とらしくない、自分の家の諸道具が燃えて居る主婦の自然に出た絶叫で有る。誰も彼も皆先を爭つて玄關へ押出した。私は外套や、肩掛や、裘衣を各自捜し出さうとする玄關の押合ひへし合ひや、おど〳〵した女の叫喚や、若い娘の泣聲やを一々記載しようとは思はない、私は本當に泥棒が有つたか如何かは知らない。が、斯んな混雜の間に外套を見附け得ないで、其儘歸つた者の二人や三人有る位は敢て異とするに足りなからう。此話はいろんな尾鰭を附けて、永い間傳說として町の中に殘つたものだ。レムブケとユーリヤ・ミハイローヴナとは扉口で群集の爲に殆ど壓潰されようとした。

『止まれ、衆皆止まれ！一人も出しちや成らぬぞ！』と、レムブケは群がる人々の方へ威嚇するやうに兩手を延ばしながら叫喚いた。『何人でも一人殘さず嚴重に身體檢査をするんだぞ！』

烈しい怒罵の聲が群集の中から起つた。

『アンドレイ・アントノーヰーチ！アンドレイ・アントノーヰーチ』と、ユーリヤ・ミハイローヴナは兩手を絞りながら喚んだ。

『先づ此女から捕縛しろ！』と、所天は指で威嚇するやうに指しながら叫んだ。『先づ此女を捕まへろ、舞踏會は火事を目當てに催されたのだ……』

彼女は『あッ』と聲を立てたまゝ悶絶した。

あゝ、それが實際悶絶したものだといふことは寸毫の疑ひもない、例の將官や、貴公子や、私は彼女を扶けに駈け着けた。他にも此場合私どもの手助けをして呉れた二三の人が有つた、其中には婦人も混つて居た。私どもは此の憫れな女を地獄から救ひ出して馬車へ舁ぎ乘せた。が、彼女は邸へ着いた時漸つと正氣に返つた。彼女の最初口に出した言葉は矢張アンドレイ・アントノーヰーチのことで有つた。有らゆる彼女の空想は破壞し盡して、心の中に殘つたものは只アンドレイ・アントノーヰーチばかりで有つた。人々は醫者を喚んで來た。私は全一時間も彼女の傍に殘つて居た。貴公子も又左樣した。將官は恐ろしく面喰つた中から同情の念のせぐり上げるまゝに、一晩中『此憫れな貴婦人の傍に』夜伽をしようと言出した。が、十分も經つか經たない間に、彼は醫者を待ちながら

應接室の安樂椅子に凭れたまゝ睡眠に落ちた。私どもは彼を其儘左樣して置いた。

警務長は、兎に角、私どもの後からアンドレイ・アントノーヴィチを室の外へ伴れ出して、『休息されるやうに』及ぶだけ閣下を説伏せながら、ユーリヤ・ミハイローヴナの馬車へ強ひて推載せようとした。私は何故彼が飽迄左樣しなかつたかを知らない。勿論、アンドレイ・アントノーヴィチは休息などの言葉に耳を籍さないで、火事場へ出張しようと決心して居た。が、それだけぢや充分な理由とは云はれない。到頭彼は自分の馬車へ載せて知事を火事場へ伴れて行つた。彼は其後私どもにレムブケが途すがら絶えずいろんな身振りをしながら、『餘り飛び離れて居るので從ふにも從へないやうな命令を發して居た』と告げた。後に成つて、閣下は其當時『不意の恐怖のために』人事不省の狀態に有つたと公然發表された。

舞踏會が何んな具合に終つたかを記載する必要は有るまい。十人足らずの無賴漢どもが怪しげな婦人と一緒に會堂に殘つて居た。警官は一人も其場に居合せなかつた。彼等は奏樂部の連中を喰止めて歸さない、强ひて歸らうと言ふ者はどし〳〵毆り附けた。夜半に彼等はブロホリイチの酒保を引倒して、正體もなく醉拂つた。素らなカマリンスキイの舞曲を其儘踊り狂つた。室といふ室を滅茶苦茶にして退けた。漸つと曉方近く手の附けられない程醉拂つた無賴漢どもの一部が火事場へ押掛けて、其處でも騷擾を新にして居た。他の一部は死んだやうに醉拂ひながら徹宵室に居殘つて、天鵞絨の長椅子や床の絨氈に可悼しい名殘を留めた。明くる朝早く彼等は足を持つて街の中へ引摺り出された。斯くの如くにして、此州の保姆達のために催された祭も終つた。

四

火事は明かに放火だと云ふので、一層河岸の住民を愕かした。只『火事だ』といふ最初の叫び聲と共に、卽座にシュビーグリンの職工どもが放けたのだといふ他の叫び聲が起つたのは何うも可訝しい。今では實際三人のシュビーグリンの職工が共謀して街に火を放けたのだと云ふことが判つた。が、それだけに過ぎない。總て他の職工は無罪に成つた、裁判所で無罪に成つたばかりでなく、輿論の上でも無罪に成つた。是等三人の破落戸以外に、囚人のフェッカも其放火に手を籍したことは爭はれない。今日迄の處此火事に就いて確實に知れたのはそれだけだ。が、いろ〳〵推察を加へる段に成れば、又別問題で有る。何で三人の職工がそんな事をしたのか。何人かに煽動されたのではないか。左樣いふ質問に答へるのは、今でも甚だ困難で有る。

風が强かつたのと、河岸の家が大抵木造で有る上に、三箇所から火の手が揚つたといふ事實から、火事は瞬く間に擴がつて、淒しい勢ひで河岸の全區を嘗め盡さうとした。尤も、火事は二箇所から延燒したので、一箇所は燃え出すと間もなく熄えた——何れ此事に就いては後に。が、彼得斯堡と莫斯科の新聞は此災殃を誇大して報道した。大略に云へば、河岸の一區が燒失したに過ぎない、實際それよりも少ない位なのだ。此町の消防隊は町の大いさと人口とには釣合はない程小さなものだが、それでも非常な快捷と熱心とを以て働いた。が、彼等の盡力も住民の熱心な共力を待つてすら、若し風が曉方近く急に止まなかつたら餘り役には立たない處で有つた。私が舞踏會から遁出した後一時間ばかりして河岸へ行つて見た時には、火事は未だ眞盛りで、河に並行した街は一面火炎に包まれて居た。四邊は晝間のやうに明るかつた。が、私は火事の光景を描かうとは思はない。露西亞ぢや何人でも火事が何んなものか位好く知つて居る筈だ。燃えて居る街に隣接した小路〳〵の驟ぎや押合ひへし合ひは非常なもので有つた。確かに自分の家へも火が移ると見て取つた住民は皆諸道具を街の中へ投り出したが、それでも直ぐに住宅を

見捨てる氣には成れないと見えて、窓の下に積んださま〳〵な箱や寢具の間に坐りながら待つて居た。男子の一部は風下に成つた垣根や小舍を容赦もなく叩き壞しながら、一生懸命に働いて居た。寢床から引摺り起された子供の外には、一人も泣いて居るやうな者はなかつた。尤も、女どもは持出した諸道具の上に凭れながら、鼻に懸つた聲で慨いて居た。未だ仕事を終らない人達は押默つたまゝ、忙し相に諸道具を搬び出して居た。火花や火の粉は四方八方に遠方迄飛んで行つた。人々は力の限りそれを熄さうとした。或者は手傳つて火事を熄さうとすれば、或者は又それを見物しながら傍に立つて居た。夜の火は常に人の心を引立てゝ昂奮させるやうな力が有る。煙火が人の足を惹くも其理由だ。が、其場合には煙火の揚げられる技巧的秩序と、全然危險のないこととが三纏の盃を擧げた後のやうな、嬉々とした輕い心持を起させる。が、實際の大火は又別問題だ。其時は恐怖と個人的危險の感覺とが夜の火の快活な効果と相俟つて、人の頭に一種の震盪と、有らゆる人の心――何んなに柔和な、家庭的な小書記の心にでも隱されて居る破壞的本能に一種の挑戰的刺戟を與へるものだ……此の險惡な感覺は又常に誘惑的なものだ有る。『私は實際人が一種快樂の感なくして火事を見て居ることが出來るか如何かを知らない。』これはステパーン・トラフィモーギーチが或夜火事を見て歸つた後で、なほ其の凄じい光景が彼の眼を去らない間に、私に漏らした言葉で有る。勿論、そんな光景を見て悞しんで居た同じ人が、子供や老婆を救ふために自ら火の中へ飛び込まぬとは云へない、が、それは全然別問題だ。

見物人の後から隨いて行く間に、私は別段訊きもしないで、危險の中心に達することが出來た。到頭、私は其處にユーリヤ・ミハイローヴナに賴まれて搜して居たレムブケを見附けた。彼は、垣根の崩れた上に立つて居た。三十歩許り左手には、殆ど燃え盡した二階建ての家の眞黑な骸骨が立つて居た。各階の窓の代りに幾つも穴が開いて、屋根は落込んで、火炎はなほ此處彼處に黑く焦けた梁の周りを匐つて居た。二十歩許り離れた庭園の外れには、これも二階建ての木小舍に今にも火が懸らうとして、消防手は全力を盡してそれを救はうとして居た。右手には、消防手と住民とが力を合せて稍大きな木造の建物を救はうとして居た。何度も火が移つたが實際は未だ燃えて居ない。が、何れは燃えずに置かないのだ。レムブケは聲を擧げて叫喚いたり身振りをしたりしながら、其木小舍に面して立つて居た。彼は命令を與へた。が、一人も其命令を奉じようとするものはない。私には何だか總ての人が彼を絶望として見捨てゝ仕舞つたやうに思はれた。兎に角、彼の傍には各階級を集めた群集が――其中には紳士も有れば、教會の坊さんさへ有つた――立つて物珍らし相に驚いたやうな顏をしながら、彼の言葉に耳を傾けて居たが、一人も彼に物を言はうとも、彼を伴れ去らうともする者はなかつた。レムブケは眞蒼な顏をして、眼をぎろつかせながら、不思議なことばかり口にして居た。最後に、彼は帽子を失くしたと見えて、頭を露出しにして居た。

『これは皆放火だ！虛無主義だ！何者かゞ燒けて居るとすりや、それは虛無主義だよ。』私は恐ろしいやうな氣がして、それを聞いて居た。別段恐ろしい筈はないのだけれど、なほ本當の狂人を見て居るといふものは人に驚駭の心を與へるもので有る。

『閣下』と、一人の巡査が彼の傍へ遣つて來て言つた。『閣下は最うお休みに成つたら如何でせう？……斯んな處に立つて被坐しやるだけでも閣下には危險で御座いますよ。』

此巡査は、後に聞いた處に據れば、警務長からアンドレイ・アントノーギーチを見張つて居るやうに命ぜられたものださうな。如何かして自宅へ伴れて行け、若し危險の場合には腕力を用ひても構はないと――明かに此男の權力を超えた所業で有る。

『彼奴等は家を燒かれた人達の涙を拭つて呉れるだらう。が、彼奴等は此町を燒いて仕舞ふには仕舞ふのだ。それが皆四人の、四人半の無賴漢の所業だよ。先づあの無賴漢から捕まへろ！彼奴は自分で家庭の名譽に迄喰ひ込んで來るのだ。彼奴等は此町を燒き盡すために知事夫人を利用した。そりやア卑劣だ！卑劣だ！卑劣だ！あゝ、あの男は何をして居るのだ？』と、彼は不意に燃えかゝつた木小舍の頂上に、一人の消防手が立つて居るのに眼を着けながら叫喚いた。其消防手の足の下には屋根が殆ど燃え落ちさうに成つて居た、周圍からめら〳〵と炎が燃え上つた。『あの男を引き卸せ、引き卸せ！彼奴は今に落ちるよ、燒け死んで仕舞ふよ、彼奴を引出せ……あんな處で何をして居るのだ？』

『あれは火を熄さうとして居るので御座いますよ、閣下。』

『そんな筈はないね。火は人の心の中に有るので、家の屋根に有るんぢやない。彼奴を引き卸して、火を熄すことなんざ止めさせろ！あゝ、止めさした方が餘程可いんだよ。自然に熄える迄打捨つて置くさ。あゝ、何人だ、今聲を擧げたのは？婆さんだね！婆さんが叫喚いて居るんだよ。何故衆皆あの婆さんを打捨つて置くのだ？』

實際、一人の婆さんが燃えて居る木小舍の一階で叫喚いて居た。八十餘りの婆さんで、此家を所有して居た商人の緣者で有つた。成程、彼女は打捨つて置かれなかつた。彼女は未だ火の懸つて居ない隅の室から羽毛の夜具を救ひ出さうといふ狂人染みた考への下に、未だ這入つて行かれる間に燃え懸つて居る家の中へ戻つて行つた。が、彼女が這入つて行つた頃には、最う其室に火が廻つて居た。彼女は煙に咽せ熱に叫びながら、なほ其の痩せさらばつた手に羽毛の夜具を摑みながら、窓硝子の破れた間からそれを押出さうとして居た。レムブケは其婆さんを援けに馳けて行つた。大勢の見る前で、彼は窓の傍へ馳け寄つて、羽毛の夜具の一端を摑んで力任せにそれを引摺り出さうとした。運の惡いことには、其瞬間一枚の板が屋根から落ちて來て不仕合な知事に中つた。彼はそれが爲に死にはしなかつた、只頸筋の邊りを掠つたばかりだ。が、少くとも、此町に於けるアンドレイ・アントノーヰーチの支配は終つた。彼は其打擊に足場を失つて、氣を失ひながら地上に倒れた。

五

到頭朝が暗澹として明けた。火事はだん〳〵納つて來た。風の後には不意に風が續いた。それから小雨がしとしと降り出した。私は其時分レムブケが倒れた場所から稍離れた處へ行つて居た。此處で群集の中に極めて奇態な話を耳にした。一つの椿事が判つて來たのだ。此河岸の區域の外廓に、菜園を隔てた荒地の上に、他の家々とは五十歩以上も離れて、最近に建てられた一軒の小さな木小舍が建つて居た。此の孤家が他の家に先立つて最初に火を出した。此家が燃えた處で、街の他の家には火が移らない。逆に、河岸全體が焦土に化した處で、何んな風が吹いても、此家はびくともしない程外の家とは懸け離れて居た。で、此家は引に獨立して火を出した、從つて偶然に燒けたのではないと云ふことが判つた。が、肝要なことは、其家はすッかり燒けて仕舞つたのではない。夜明けには、其中に一つの椿事が發見された。此家の持主は近隣に棲んで居たので、炎が揚ると見るや馳けて行つて、近隣の人の手を借りて壁際に積んで有つた薪の山積を引摺り倒した。其薪に火が放けられたのだ。斯うして彼は其家を救つた。が、其家の中には三人の男女が棲んで居た——此町で評判と成つた大尉と、其妹と、年を老つた召使の女と——此三人が其夜の間に斬殺されて、物を盜まれて居た。（レムブケが羽毛の夜具を救ひ出さうとして居る間、警務長は此處へ來て居たので有る。）

朝に成つて此噂が擴まると、いろんな階級の夥しい群集が、燒け出された河岸の住民までも、此新しい家が建つて居る荒地へ集まつて來た。却々家の中へは近づけない程、ぎッしり群集が押懸けて居た。大尉は着物を着たまま咽喉を斬られて、長椅子の上に仰向けに倒れて居た、彼は殺された時死んだやうに醉拂つて居たに違ひない、從つて苦しいことも何ともない、彼は『牡牛のやうに刺された』のだ、これに反して、妹のマーリヤ・チモフェーヴナは『身體中小刀で滅多突きに突かれ』て、扉口の床の上に倒れて居た、從つて彼女は恐らく起きて居て兇猛な人殺しに手向ひしたのだといふやうな話を、私は直に耳にした。召使の婆さんも恐らく起きて居たらしい、彼女は頭蓋骨を破られて死んで居た。此家の持主は、大尉が前の日の朝自分の許へ會ひに來て、醉拂つていろ〳〵法螺を吹いた中に、二百留布よりは少くない金子の量を自分に見せたと語つた。大尉の汚れた古い綠色の紙入は空に成つて床の上に落ちて居た。が、マーリヤ・チモフェーヴナの笆には手が觸れてない、偶像の銀飾も矢張其儘に成つて居た。大尉の衣裝も又紊れて居なかつた。これで見ると、泥棒は餘程念いで居た、又能く大尉の事情に通じた男で、金子の在處も知つて居て只其金子を奪りに來たものらしい。此家の持主があの瞬間に斷け着けなかつたら、確かに火は薪の山積から母屋に移つたに違ひない、從つて『黒焦げに成つた死體からは如何して死んだといふことも判らず仕舞ひに成つたらう。

兎に角そんな樣な話だ。持主は又次のやうな事も言つた。此家をレビャードキン一家のために借りて居た者はあのヴルヴーラ・ペトローヴナの子息で、ニコラーイ・フシェヴォロードギーチ、卽ちスタフローギン其人に外ならない。彼は自分でそれを借りに來た。處が、持主は旅籠屋にしようと思つて居たから、これを借入れるためには隨分骨を折つたものだ。卽ち幾許でも此方から言出すだけの家賃を拂つて、おまけに六箇月分前拂ひにした。

『此火事は何うも天火ぢやないね』と、群集の中の一人が言ふのを聞いた。が、多數の人は何にも言はないで、只氣艱しい顏をして居た。尤も、別に憤怒の徵候といふやうなものも見えなかつた。只人々はスタフローギンのことを噂して、殺された女は彼の正妻だ、前の日彼は『不都合』にも此土地の名望家の一なるドロズドフ夫人の愛孃を誘拐した。で、彼得斯堡で訴訟が起される筈だ。又彼の正妻が殺されたのは、明かに彼が其令孃と結婚し得るためだと言ひ募つて居た。スクヴォーレジュニキは此處から一哩半ばかりしか離れて居なかつた、私はあの二人に事件の成行を知らせて遣るべきものか如何かと思ひ惑つたことを今でも記憶えて居る。が、私は其場で群集を故らに煽動して居るやうな者は一人も見懸けなかつた。尤も、群集の中に、舞踏會の酒場で見懸けた無賴漢の二人や三人立混つて居ることは直に氣が着いたけれども、私は不當に他人に罪を被せようとは思はない。私は特に痩せた、身丈の高い、窶れた顏をした、煤でよも汚れたやうに黑い縮れ毛の頭をした、後で聞いた處に據れば、一人の大工を記憶えて居る。此男は醉拂つても居なかつた。が、群集の沈鬱な受身の態度とは反對に、われを忘れて昂奮して居た。彼は何人にでも物を言ひ懸けた。一々其言葉迄記憶えても居ないが、別に連絡もなければ、『ねえ諸君、君等はこれを何だと思ふかい、世の中は斯んな風に成つたのかね』なぞと言ふより長くもなかつた。左樣言ひながら、彼は兩手を擧げて頻に振つて居た。

第三章　ロ―マンスの終局

一

スクヴォーレジュニキの別邸の大きな舞踏室――ヴルヴーラ・ペトローヴナとステパーン・トラフィモーギーチの最後の會見も其處で行はれた――からは、火事が明々と見られた。夜が明けて間もない五時過ぎに、リザは右側の一番外れの窓際に立つて、凝乎と衰へて行く火光を見詰めて居た。彼女は一人其室に居た。昨日晝間の會で着て居たと同じ衣裝を着て居る――氣の利いた、紗で蔽はれた輕い綠色の衣裝を。が、皺に成つたまゝ、だらしなく急いで着て居た。不意に胸の鈎が外れて居るのに氣が附いて、彼女は顏を赧らめながら急いでそれを直した。それから、昨日這入つて來た時投げ出したまゝに成つて居た赤い肩掛を椅子の上から引奪るやうにして、首の周りに卷いた。豐かな髮の毛の一握りがぐらりと解れて、右の肩の肩掛の上に垂れた。彼女の顏は疲れてさも倦怠るさうに見えた。が、彼女の眼は顰めた眉の下に輝いて居た。彼女は再び窓の傍へ歩み寄つて、燃えるやうな額を冷たい窓硝子へ壓附けた。其時扉が開いてニコラーイ・フシェヴォロードギーチが這入つて來た。

『使者を馬上で送つて置きました』と、彼は言つた。『十分間には、何も彼も判るでせう。が、召使どもは河岸の一部が燒けて仕舞つたと言つてますよ、揚場に近い橋の右側ですね。十一時から燃え出したのださうですが、今ぢや最う熄え懸つて居ますよ。』

彼は窓の傍へ近寄らないで、女の三歩許り背後に立つて居た。彼女は男の方へ振返りもしなかつた。

『暦で見ると、最う一時間も前に明るく成らなくちや成らぬのよ、それが未だ眞暗ですわね』と、彼女は苛々しながら言つた。

『暦は始終嘘を吐くものですよ』と、彼は慇懃な笑ひを含みながら言つた。が、稍恥ぢらつて、邊てゝ附加へた。

『それに暦を當てに暮すのは無趣味なものでせう。』

斯う言ひながら、彼は再び次の句の處を得ないのに惱まされて、凝乎と默り込んで仕舞つた。リザは皮肉な微笑を漏らした。

『貴方は私にさへ言ふ言葉が見附からない程、憂鬱な心持で被坐しやるのね。ですが、それで可いんですよ、貴方のお言葉は當つて居ますからね。私は始終暦を當てに暮して居る。何んな事をしても一々暦で整理して有るんですよ。え、吃驚なすつたでせう？』

彼女は急に窓際を離れて、低い椅子の上に腰懸けた。

『貴方も何卒下に被坐して下さい。二人は隨分長く一緒に成りませんでしたからねえ、私も何か所好な事が言つて見たいのよ……何故貴方も所好な事を仰有らないの？』

ニコラーイ・フシェヴォロードギーチは彼女の傍に腰を下して、そつと、殆ど恐る〳〵女の手を取つた。

『そんな調子は如何したと云ふのです、リザさん？何處からそんな調子が不意に飛び出したのでせうね？「二人は隨分長く一緒に成りませんでしたわね」なぞと云ふのは、如何いふ積りなんですか。貴方がそんな不思議な言葉を口にするのは、一時間前に眼を覺ましてからこれで二度目ですよ。』

『貴方は最う私の不思議な言葉を勘定して被坐しやるのね？』と、彼女は笑つた。『昨日私が這入つて來た時、私

は最う死んだ女だと言つたのを記憶えて被坐しやいますか。屹度貴方はそんな事は忘れた方が可いと思つて被坐しやるのね？忘れるか、それとも言出さないが可いと？』

『一向私は記憶えて居ませんね。何故死んだ女です？貴方は生きて行かなくちや成りませんよ。』

『それだけですか。貴方は平時の辯舌を何處へやら失くしてお仕舞ひなすつたのね？私は私の一時間を生活した、それで澤山です。貴方はクリストファー・イヴーノギーチを記憶えて被坐しやいますか。』

『いえ、記憶えて居ません』と、彼は顔を蹙めながら答へた。

『あのローザン（瑞西の町）で逢つたクリストファー・イヴーノギーチですよ。あの人は大變貴方を苦しめたのね。始終扉を開けては、「ほんの一分間お邪魔します」と言ふのが癖でしたね。それで全一日居て行くんですよ。私もクリストファー・イヴーノギーチのやうに成つて、一日居て行かうとは思ひませんね。』

一種苦痛の色が男の顔に表れた。

『リザ、そんな不自然な言草は止めて下さい。私は苦しい、貴方にもそんな驕飾は苦しいに相違ない。何の爲です？何を目的にそんな事を爲るのです？』

彼の眼は燃え立つた。

『リザ』と、彼は叫んだ。『私は誓つて言ふ、私は昨日貴方が這入つて來た時よりも、何の位今貴方を愛して居るか知れない。』

『まア妙な宣言ですこと！何故昨日だの今日だのと、そんな比較を持つて來るんです？』

『私を捨てゝ去つては下さるな』と、彼は殆ど絶望に驅られたやうに續けた。『二人が一緒に何處かへ行つて仕舞ひませう、今日、不可ませんか。えゝ、不可ませんか。』

『あれ、そんなに強く私の手を緊めて下さいますな。何處へ二人が今日一緒に行くのです？何處かで「復活」するためですか。いえ、私どもは最う遣つて試るだけは十分に遣つて見た……それに、そんな事は私には餘まり退屈ですよ。私はそんな事に適して居ない。私には餘まり高尚過ぎるのですよ。二人が一緒に行くとしたら、莫斯科へ行きませうよ、訪問をしたり、されたりするために――それが私の理想ですよ、御存じですか。瑞西でさへ、私は何んな女だといふことを貴方に隠さうとはしなかつた。二人が莫斯科へ行つて訪問して廻ることが出來ないとしたら――貴方は結婚して被坐しやる身ですからね――そんな話をするのは無駄ぢや有りませんか。』

『リザ！昨日何んな事が有つた！』

『有つた事は最う濟んだのですよ。』

『そんな事は言へない！そりやア殘酷だ！』

『殘酷なら如何したと言ふのです？貴方は殘酷でもそれに堪へなくちや成りませんよ。』

『貴方は昨日の出來心に對して、私の上に自分で復讐をして居るのだ』と、彼は怒りを含んだ笑ひを泛べながら呟いた。リザは、さつと顔を赧くした。

『何といふ卑しい考へでせうね！』

『何故それぢや貴方は私に……あんな大きな幸福を與へたのですか。私はそれを承はる權利が有る』

『いゝえ、貴方も「權利が有る」なぞと言ふのはお控へに成つたら可いでせう。馬鹿なことを言つて、貴方の推定の卑しさをいよ〳〵大きく爲さいますな。今日は貴方の思ひ通りには行きませんよ。時に貴方は世間の思惑なぞ

怖がつて被坐しやるのぢやないでせうね、貴方の所謂「大きな幸福」のために罰せられることなぞを？若し左樣なら、決して御心配には及びませんよ。全然貴方の仕業ぢやァない、貴方は何人に對しても責任はないのだ。私が昨日此家の戸を開けた時も、貴方は誰が這入つて來たのか御存じない位でした。單に私の出來心ですよ、貴方も今仰有つたやうに、私の出來心が爲せた業ですよ。其外には何にもない！貴方は何人に對しても慚然として威張つて居られるのですよ。』

『貴方の言葉やあの笑ひ聲が、一時間前から恐ろしさに私を顫えさせて居た。あの「幸福」は、貴方がそれ程憎らし相に言はれるあの幸福は……私に取つては有らゆる物を値打して居る。私は今如何して貴方を失ふことが出來よう？私は誓つて言ふ、私は昨日これ程貴方を愛して居なかつた。何故貴方は今日と成つて私から有らゆる物を奪ひ去るのか、私が此の新しい希望のために、何れだけ犠牲を拂つたか知つて居るのか。私はそれが爲に生命を犠牲にしたのだよ。』

『御自身の生命か、それとも他人のですか。』

彼はすッくと立上つた。

『そりやァ何を言ふのか』と、彼は凝乎と相手の顔を見詰めながら、漸う〳〵の思ひで言出した。

『貴方はそれが爲に貴方の生命を犠牲にしたのか、それとも私の生命か。私は左樣言つたのですよ。それとも、貴方は全然理解力を失つて仕舞つたのですか』と、リザは顔に朱を濺ぎながら叫んだ。『如何して貴方は左樣念に飛上つたのです？如何して又貴方はそんな眼をして私をぢろ〳〵見て居るのです？何だか怖いやうだわね。何を貴方は始終そんなに怖がつて被坐しやるの？私は前から何か貴方が怖がつて被坐しやるやうだと思つて居たのですよ。貴方は今でも怖かつて被坐しやる、此瞬間でも……さア如何したと云ふんです、貴方は本當に眞蒼な顔をして被坐しやるのよ。』

『貴方が知つて居るんなら、リザ、私は些とも怖いとは……それに、私は今生命を犠牲にしたと言つた時、恰度其事を言つたのぢやないのだ……』

『私には貴方の仰有ることが解りませんよ』と、彼女は吶りながら怖々言出した。

漸つと緩やかな、考へ〳〵出したやうな微笑が彼の唇に表れた。彼は徐々と下に腰掛けて、兩臂を膝に突いたまゝ、兩手で顔を蔽うた。

『惡い夢だ……二人は二つの違つた事を話して居たのだ。』

『貴方が何んな事を話して被坐したのか、私には解らない……貴方は昨日私が今日に成つたら貴方を捨てゝ去るだらうといふことを御存じなかつたと仰有るのですか。えゝ、御存じでしたか、御存じなかつたのですか。嘘を仰有つちや困りますよ、知つて居たのですか、知らなかつたのですか。』

『私は知つて居た』と、彼は低い聲で言つた。

『では、此上如何しようと仰有るの？貴方はそれを知つて被坐して、なほ「あの瞬間を」貴方自身のためにお取りに成つた。それで元々ぢや有りませんか。』

『正直の處を仰有つて下さい』と、彼は張詰めた苦痛を抑へながら叫んだ。『貴方が昨日私の自宅の戸をお開けに成つた時、貴方自身でも只一時間の積りで被入したのですか。』

彼女は慢さけに男を見遣つた。

『本當に、貴方の樣に物の解つた方でも隨分妙な質問をなさるわね。何故貴方は又そんな事をお訊きに成るの女が男から捨てられる前に先づ男を捨てるといふのは、只虛榮心のためにそんな事が出來ませうか。ねえ貴方、ニコラーイ・フシェヴォ.ロードギーチさん、私は昨日貴方のお目に懸つてから、貴方が恐ろしく私に優しくして下さるのに氣が附いた。私は貴方から左樣爲れるのが耐らないのですよ。』

彼は椅子から立上つて、室の中を二三歩歩いた。

『成程、何れは斯うして終る處でしたらうよ……だが、如何して昨日はあんな事に成つたのでせうね？』

『そんな事がそれ程解らない問題ですつて！特に貴方は御自分で好く其答へを知つて被坐しやる、世界中の何人よりも一番好く知つて被坐して、御自分でもそれを當てにさへして被坐したぢや有りませんか。私は若い女です、私の心は歌劇で養はれた。それだからあんな事に成つた、それが總ての解決ですよ。』

『そんな事はない。』

『何一つ貴方の自尊心を傷つけるやうなことは有りませんよ。皆絕對に眞實でした。最初私には迚も堪へられないやうな「美しい瞬間」で始まつた。一昨日私が衆皆の前で貴方を「侮辱」して、貴方からあんな勇ましい返辭を受取つた時、私は自宅へ歸つて、直に推量して仕舞つた、貴方は貴方が結婚した身だから私を避けて被坐したのだと、私に對する侮蔑の念からではないと――私も社交界の若い女として、何よりもそれを恐れて居たのですよ。貴方が私から遁げて被坐したのは、私の爲で有つた、狂氣染みた私を護る爲で有つたといふことが私にも解つた。ねえ、私が何んなに貴方の寬大なお心持を尊重して居るか解つたでせう。其時ピョートル・ステパーノヰーチが私の許へ駈けて來て、何も彼も私に說明して呉れた。あの人は貴方が一つの「大きな思想に氣を取られて被坐しやる、それの前にはあの人も私も何でもない、私は寧ろ貴方の道の邪魔をしてるのだといふことを私に明して呉れた。あの人は自分のことも勘定に入れて、吾々三人は一緒に働くべきだと主張しました。それから露西亞の民謠から出た小舟だの、楓の櫂だのと、狂氣染みた事を言つて居ました。私は面と向つて「貴方は詩人だ」と言つて遣つた。あの人はそれを眞物のお金子として受取りましたよ。私はあの人に言はれなくとも、ずつと前から自分が一人ぢや何をする力もないと知つて居たから、卽座に決心しました、えゝ、それだけですよ、それだけで澤山ですよ。何卒それ以上お互に辯解をさせて下さいますな。二人が又喧嘩でも仕出すと不可ませんからね。何人も怖がるには當りませんよ、私が萬事を引請けますよ。私は惡い女だ、出來心の多い女だ。私は歌劇のやうな小舟の話に誘惑された、私も若い女ですものね……ですが、御存じですか、私は貴方が恐ろしく私のことを思つて居て下さるものと信じて居たのですよ。馬鹿な女だと思つて輕蔑して下さいますな、又私が今漏した涙も笑つて下さるな、私は自分で自分が可哀相で、泣きたくて仕樣がないのですよ。さア最う可い、最う澤山だ。私は何一つ取柄のない女だ、貴方も何一つ取柄のない男だ。二人ながら同じやうに不好ないのだ。まアそれでお互に自ら慰めやうぢや有りませんか。兎に角、それが二人の自尊心を安めて呉れますよ。』

『夢だ、惡い夢だ』と、スタフローギンは兩手を絞つて、室の中を歩き廻りながら叫んだ。『リザや、憐れな子だな、貴方は自分自身に對して何んな事をした？』

『私は蠟燭の中に自分を燃した、それだけですよ。眞逆貴方もお泣きに成るのぢやないでせうね　貴方はそんな感情なぞ顏に出さないで、最う少し確乎して……』

『何故、貴方は私の許へ來て呉れた？』

『貴方がそんな事を仰有ると、世間の眼から見て何んな物笑ひに成るか知れないが、解つてますか。』

『何故貴方は自分で自分を陥入れたのだ、あんな奇怪な、あんな馬鹿な眞似をして――今と成つては如何したら可いのだ？』

『で、これがスタフローギンですか、此土地で死ぬ程貴方を思つて居る或貴婦人の言葉に據れば「血を吸ふ鬼のスタフローギン」ですか！お聽きなさい！私は先刻からも言つてる通り、長い一生を一時間の間に籠めた。それで私は滿足して居る。貴方も左樣爲さいな……尤も、貴方にそんな必要はないでせうがね。貴方の前には、未だそんな「時間」や「瞬間」は幾許でも有る。』

『貴方と同じ事だ。私は嚴肅に誓つて言ふ、貴方より一時間も多くは有つて居ない！』

彼は矢張彼方此方へ歩き廻つて居たので、女が彼の上に投げた、素疾い、胸の底まで貫くやうな一瞥を見ずに仕舞つた。其中に最後の希望の光が閃いたのだ。が、其光は同時に消えて仕舞つた。

『私が今此瞬間誠實で有り得ないために、何の位苦しい目をして居るか知つて呉れたら、只貴方に一言言ふことが出來たら……』

『私に言ふ？貴方は何か私に言ふ事が有るのですか、あの私に？あゝ、私は貴方の祕密なぞ聞きたくない！』と、彼女は恐ろしさに殆ど聲を顯はせた。彼は言ひ澱んで、不安相に待つて居た。

『私 正直に言ふとね、未だ瑞西に居た時分から、始終貴方が何か恐ろしい、可厭な事を、何人かの血を良心の上に有つて被坐しやるだらうといふやうな強い感じを抱いて居ました……而も、それが貴方を他人の物笑ひにするやうな事なんですよ。それが當つて居たら、何卒何にも言はないやうにして下さい。私は貴方を笑つて、〳〵、笑ひ退けますよ。一生涯笑ひますよ……あゝ、又貴方は蒼く成るのね？私は聽かない、聽かない、直に行つて仕舞ひますよ。』彼女は輕蔑と嫌惡の情を見せながら、椅子から飛上つた。

『私を苦しめて呉れ、罰して呉れ、私の上に貴方の憎しみを吐き出して呉れ』と、彼は絶望したやうに叫んだ。

『貴方は左樣する充分な權利が有る。私は自分が貴方を愛して居ないことを知つて居た、併し私は貴方を墮落させた！左樣だ、私は私自身のためにあの瞬間を取つた。私はなほ一つの希望を有つて居た……長い間有つて居た……私の最後の希望だ……私は昨日貴方が只一人で、自ら進んで、私の許へ遣つて來た時、私の胸へ流れ入つた光燿に抵抗することが出來なかつた。私は不意に貴方を愛……して居ると信じた……恐らく私は今でも尙其信仰を有つて居る。』

『私は貴方の左樣いふ正直な告白に對して、同じく正直にして返しますよ。私は貴方の看護婦に成らうとは思はない。恐らく私は今日の間に當り前にして死ぬことが出來なかつたら、本當に看護婦に成るかも知れませんよ。ですが、私は縱しんば左樣成つても、貴方の看護婦に成らうとは思はない。尤も、貴方は足蹇と同じ樣に看護婦を必要としては被坐しやるでせうがね。私は始終貴方が私を何處か人間のやうな大きな蜘蛛の居る處へ伴れて行つて、二人は其處でそれを見詰めては怖ぢ惧れながら一生暮すのぢやないかと想像して居ましたよ。二人の愛は屹度そんな風にして終るのですね。ダシェンカにお賴みなさい、あの女なら何處へでも貴方のお所好な處へ一緒に行きますよ。』

『貴方は今でもあの女のことを考へずに居られないのですか。』

『憫れな小犬ですね！何卒あの女に宜しく傳へて下さい。あの女は最う瑞西時代から貴方が老齢の友としてあの

女を撰んで被坐したことを知つてますか。何といふ先見、何といふ用心でせうね！えゝ、何人其處に居るのは？』

室の一番遠い外れの扉ががたりと開いて、一人が頭を突出した。が、又急いで引込ませた。

『お前かい、アレキセイ・エゴーリイチ』と、スタフローギンが訊いた。

『いや、私だ』と、ピョートル・ステパーノヴィッチが再び半分許り身體を突出した。『如何です、リザベータ・ニコラーエヴナさん　兎に角、お早う。大抵君等は二人ながら此室に居るだらうと思つて來たよ。實際、僕はほんの一寸お邪魔する積りで來た、ニコラーイ・フシェヴォロードギーチ、僕は如何してども君と一二語交す必要が有るんだよ……絶對に必要が……ほんの一二語だ！』

スタフローギンは彼の方へ歩を移した。が、三歩許りでリザの方へ振返つた。

『リザさん、貴方は今直ぐ何んな事を聞いても、私がそれに對して責任が有ると思つて下さいよ。』

彼女は飛上つて、落膽したやうに相手を見詰めて居た。が、彼は急いで出て行つた。

二

ピョートル・ステパーノヴィッチが顔を引込ませた室は、大きな楕圓形の玄關で有つた。アレキセイ・エゴーリイチはピョートル・ステパーノヴィッチが這入つて來る前から其處に腰掛けて居た。が、後者は彼を彼方へ追ひ遣つた。スタフローギンは背後の扉を締めて、相手の言出すのを待つて居るやうに突立つて居た。ピョートル・ステパーノヴィッチは目疾く探るやうに相手を見遣つた。

『で？』

『君は最う知つて居るんなら』と、ピョートル・ステパーノヴィッチは早口に言つた。彼の眼はスタフローギンの胸の底迄突き徹すやうに見えた。『勿論僕等は二人ながら責任はないよ、特に君の知つた事ぢやない。悉皆偶然だよ……偶然の一致だよ……一言にして言へば、君は法律上累はされる處はないのだ。僕は前以て君にそれを言つて置くために此處へ遣つて來たんだよ。』

『彼奴等は燒かれたか。殺されたのか。』

『殺されたが、燒かれはしない。それが一寸面倒だよ。だが、僕は名譽に掛けて君に誓つて置くがね、君が何んなに僕を疑はうとも、あれは僕の責任ぢやないよ、えゝ　すッかり眞實の處を言つて仕舞へば、ねえ君、僕は實際彼樣いふ考へを有つて居たんだよ――君自身それを僕に暗示したのだよ、尤も眞面目ぢやない、僕を懊惱してだがね――勿論君は眞面目ぢや何にも言はない人だからね――だが、僕は何うもそれだけの決心が着かなんだ、百留布は偖置いて、何に成らうともそんな氣には成れないのだね――そんな事をして、僕に何の利得が有るのだい、僕にだよ、えゝ僕にだよ……』と、彼は恐ろしく慌て込んで、殆ど半狂亂のやうに饒舌り續けた。『だが、何うして斯んなに偶然が一致したものだらうね。僕はあの醉漢の馬鹿のレビャードキンに自分の金子を二百三十留布呉れて遣つた。ねえ君、僕の金子だよ、君の金子ぢやないんだよ、君はそれも知つて居る筈だ。それが一昨日の晩だね――ねえ君、昨日の文學會の後ぢやない、一昨日だよ、其點を注意して呉れたまへ。それが重要な點だよ、僕は其時分にや未だリザベータ・ニコラーエヴナが君の許へ來るか如何か確に知らないのだからね。僕は只君が公衆の前に君の祕密を曝露するやうな、思ひ切つた眞似をして呉れたもんだから、自分の金子を呉れて遣つたんだよ。うむ、僕も此問題には深く立入らない……君自身の事件だからね……君の騎士道だからね……だが、僕は白狀するが、

實際驚いたよ、頭を一つぐわんと殴られたやうな氣がしたね。で、僕はこんな悲劇的小説に飽き〳〵して居たもんだから――あゝ君、僕はこんな書生みたいな、上調子な言葉を使つて居るけれど、大眞面目なんだよ――いよ〳〵僕の計畫がすツかり轉覆したと見ると、僕は如何成つても可い、君に知られないで、レビャードキン兄弟を彼得斯堡へ遣つて仕舞はうと決心したんだね、特にあの男自ら行く積りで居たのだからね。僕は一つ間違ひをした、其金子を君の名で渡したんだよ。これは間違ひか、左樣でもないかね。恐らく間違ひぢやない、えゝ君？で、如何だい、今は何んな事に成つたか聽いて呉れたまへ……』

談話に夢中に成つて、彼はだん〳〵スタフローギンに近づいて、上衣の袖を確乎摑んだ――實際、故とかも知れないのだ。スタフローギンは力を籠めて相手の手を殴り飛ばした。

『あい、如何したのだ……好い加減にし玉へ……君は僕の腕をへし折つて仕舞ふよ……で、肝心な事は、左樣成つた道筋だがね』と、彼は打たれても些とも驚いたやうな顏もしないで饒舌り續けた。『僕は其晩妹とあの男とが翌早朝出發するといふ條件の下に其金子を渡したのだよ。僕は又リーブティンの野郎にあの二人を汽車迄見送つて呉れる役目を委任した。處が、リーブティンの畜生奴、公衆の前に學校子供のやうな惡戯を演つて見ようと思つたんだね――恐らく君も聞いたらう？あの書間の會でさ？まア聽いて呉れ玉へ、彼奴等は二人とも酔拂つて、半分以上リーブティンが手傳つた詩を拵へ上げたんだよ。彼奴はレビャードキンに燕尾服を着せて、僕には其朝立たせたと安心させて置きながら、何處か後ろの方の室に隱して置いたんだね。それから會の壇場へあの男を押出したのよ。處が、レビャードキンは直きに酔拂つて仕舞つて、君も知つてるやうな、あんな騒動が持上つたのさ。それからあの男を自宅へ伴れて行つた時は、全然正體がないので、リーブティンがほんの小遣だけ殘して二百留布を密と拔出して置いた。併し不仕合せなことには、其朝既にレビャードキンが二百留布を衣嚢から出して、風儀の惡い場所でそれを見せびらかしたものと見えるのだね。で、フエッカが又それを待構へて居たものだから、キーリロフの宅で、そんな話を聞き込むや否や――君は自分が言つたことを記憶えて居るだらう――直に其機會を利用しようと決心した。眞個の話がこれだけだよ。兎に角、僕はフエッカが其金子を見附け出さなかつたのを悅んで居る。彼奴は千留布も取るやうな了見で居たんだよ、えゝ君！彼奴は遽てゝ居て、火事ぢや自分でも吃驚したらしいのだね……君は信じて呉れるか何うか知らないが、あの火事は僕にも雷霆のやうに遣つて來たのだよ。如何解釋したものか、惡魔でもなけりや知らないね！餘りに專斷的な振舞ひだよ……ねえ君、僕は君に期待する處が多いから、何一つ君に隱さうとは思はないがね。僕は長い間此の火事といふ考へを心に抱いて居た、それが國民的な、通俗の趣味だからよ。が、僕は乘るか反るかの際迄、僕等が一同蹶起するやうな大切な時迄、それを延ばして置いた……處が、不意に彼奴等があんな事を思ひ立つた、彼奴等自身の想ひ附きで、命令も待たずにだよ、而も今吾々が一同鉾を伏せて靜かにして居なくちや成らない此時期に於てだね。斯ういふ專斷といふものは！……實際、僕も未だ其眞相を突き留めては居ないのだがね、世間ぢや二人のシュビーグリンの職工が如何とか言つて居るよ……だが、若し吾々の仲間の一人が其中に加はつて居るとしたら、何奴でも構はない、それを手傳つたとしたら――其奴フ普通は置かない。ねえ君、少しでも手を緩めたら、彼奴等何を遣り出すか知れないのだよ。いや、あの民主的な賤民どもは、五人組も一緒にして、取るに足らない連中だね。吾々が必要とするのは一つの偉大な、專斷的な意志だよ、何か確乎した基礎の上に立つて居る偶像のやうなものだよ……左樣成りや、五人組は皆萎縮して、只命是從ふやうに成らアね。だが、それはそれとして、世間ぢや、スタフローギンが正妻を燒き殺さうとした、それだか

ら此町に火事が起つたのだと云ふやうなことをわい〳〵言つてるよ、だが……』

『何だと、悉皆そんな事を言つてるのか。』

『いや、悉皆といふ譯ぢやない。正直のところ、僕は未だそんな事は一向聞かないのだがね、併し世間の奴等といふものは、特に其奴等が燒出されたと來ちや何を爲るか知れたものぢやない！ Vox populi Vox Dei.（民の聲は神の聲なり。）馬鹿な風評といふものは直ぐに擴まるものだよ。だが、君は實際心配することは一つもない。法律の上から見れば、君は全然正しいのだよ。君の良心から云つても左樣だ。君はあんな事に成れば可いとは思はなかつたのだものね、左樣ぢやないのか。手懸りは一つもない、偶然の一致に過ぎないのだからね……只一つフェッカがあの夜キーリロフの宅で君の言つたことを記憶えて居るかも知れないがね――又、何と思つて、あんな事を言つたものだらうね――だが、それは何の證據にも成らない。僕等が又フェッカの口留めをして置くよ。僕が今日口留めをして置くよ。』

『で、二人の死體は燃えて仕舞やしなかつたのかい。』

『いや、些つとも、あの無賴漢何一つ旨く遣れないのだよ。だが、兎に角君が落着いて居るから僕は嬉しいよ……勿論君は何の點から見ても、心の中ですら咎められる譯はないのだけれども。何れにしても、これが君の難儀を旨く片附けたといふことは、君も承認しなくちや成らない。君は不意に自由な鰥夫の身と成つた。何時でも金子を澤山有つた既に君の所有と成つて居る、あの可愛らしい女子と結婚することが出來るのだからね。何うだ、露骨な、單純な一致のために大した事に成つたらう――えゝ？』

『君は僕を脅喝するのか、馬鹿奴』

『まア止せよ、止せよ。君は僕を馬鹿だと言ふがね、何といふ言草だい！君は悅んで可い處だよ、それだのに君は……僕はそれを君に知らせるためにわざ〳〵此處迄駈けて來たんだよ……それに僕が如何して君を脅喝することが出來るんだい？又僕が君を脅喝して何か利德が有るやうだね！僕は好意から君に扶けて貰ひたいとは思へ、脅迫して迄扶けて貰はうとは思はないよ。君は光で有る、太陽で有る……僕が君を恐ろしく怖れて居るので、君が僕を怖れて居るのぢやない！尤も、僕もマヴーリキイ・ニコラーエヴヰーチぢやない……左樣云へば、僕は馬車で此處へ飛んで來る時、君の家の庭の一番外れの垣根の傍で、あの男を見掛けたよ……外套を着て、づぶ濕れに成つて、屹度一晩中彼處に立つて居たんだね！何しろ奇體な事に成つた！眞個人間は狂人染みて居るね！』

『マヴーリキイ・ニコラーエヴヰーチだと――そりや眞實か。』

『左樣だとも、あの男は庭の垣根に凭れて立つて居たよ。此處からも三百步位離れて居るだけだね。僕は急いで通り過ぎたが、あの男は僕を見たやうだよ。君は知らなかつたのか。それぢや、僕は好く忘れずに話したものだ。彼樣いふ人間は一旦拳銃でも持たせたら、それこそ何んな奴よりも危險だからね。それから夜と、霧と、苛々する心と――兎に角、あの男は危い境遇に居るんだよ、はゝ！君は如何思ふね？何故あの男はあんな所に立つて居るんだい？』

『勿論あの男はリザベータ・ニコラーエヴナを待つて居るんだよ。』

『ふむ！あの女があの男の許へ行く譯でも有るのか。それに……こんな雨の降る中を……馬鹿な奴だね！』

『あの女は今あの男の許へ行かうとして居るんだよ。』

『えゝ！そりやア初耳だ！それぢや何だね……だが、聽きたまへ、あの女の地位は今や全然一變したのだよ。

今と成つて、あの女はマヴーリキイを如何しようと云ふんだい？君は自由だ、鰥夫だ、明日でもあの女と結婚が出來るんぢやないか。あの女は未だそれを知らないんだね――僕に任せたまへ、僕が好いやうに計つて上げるよ。あの女は何處に居るんだ？僕等はあの女の心も安んじて遣らなくちや不可ないよ。』

『あの女の心を安める？』

『左樣さ！さ、行かう。』

『君はあの女を、二人の死體が何を意味するか推量の出來ないやうな女だと想つて居るのかい』と、スタフローギンは妙に眼を引釣らせながら言つた。

『勿論あの女は推量なぞしないよ』と、ピヨートル・ステパーノギーチは宛然馬鹿のやうな顏附をしながら言つた。『何故と云ふに法律上ぢや……えゝ、君は又何といふ男だね！あの女が推量したら如何したと言ふんだい？女といふものは、左樣いふ事に眼を閉ぢることに掛けちや、却々悧巧なものだよ、君は女を知らないね！あの女が自分の名譽を棒に振つたといふことが爭はれない以上、今君と結婚するのは全然あの女の利害問題で有るといふことを別にしてもだね、僕はあの女に「小舟」の話をした。そして、それに依つてあの女を動かすことが出來るといふことを見て置いた。斯う言へば、あの女が如何いふ女だといふことは君にも解るだらうがね。心配したまふな、あの女は髮の毛一筋動かさないで二人の死體を乘越えるよ――特に君がそれに對して責任がない時にだね。少許もないのだよ、左樣ぢやないのか。只、あの女は君等が結婚して二三年も經つてから、君に對してそれを利用するために、何にも言はずにそれを貯藏つて置くだらうよ。何んな女でも結婚する時には、所天の過去の生活からそんな樣な類ひのことを貯へて置くものだよ。だが、其時分には……一年の間には何が起るか知れたものぢやない？はゝは！』

『君が馬車に乘つて來たとすりや、あの女を直ぐマヴーリキイ・ニコラーエヴヰーチの許へ伴れて行つて吳れないか。あの女は今し方僕の顏を見て居るのも可厭だから、僕を捨てゝ出て行きたいと言つてたよ。それに、あの女は多分僕の馬車に乘つて行くことを承知しないだらうからね。』

『何だと！あの女が本當に出て行くんだつて？如何してそんな事に成つたのだい？』と、ピヨートル・ステパーノギーチは間拔面をして相手を見詰めながら言つた。

『兎に角あの女は昨宵から、僕があの女を愛して居ないといふことを察したんだよ……勿論前からも知つては居たんだがね。』

『だつて、君はあの女を愛しないのか』と、ピヨートル・ステパーノギーチは非常に驚いたやうな表情をしながら言つた。『それぢや、何故君は昨日あの女が來た時、男らしく明白に、君はあの女を何とも思つて居ないと告げて歸さないで、此處に留めて置いたんだい？君としちや、それは又餘まり陋劣だよ。僕だつてあの女の眼から卑劣に見えるぢやないか。』

スタフローギンは不意に笑ひ出した。

『僕は只自分の中の猿を笑つて居るんだよ』と、彼は直ぐに說明した。

『あゝッ！君はそれぢや僕が道學先生の假面を被つたのを見拔いたのだね！』と、ピヨートル・ステパーノギーチは心から愉快相に笑ひながら叫んだ。『僕は君を悞しませるためにあんな事を言つたんだよ。まア想つても見たまへ、君が此處へ出て來るや否や、僕は君の顏からこりやア君も「不仕合せ」だつたんだなと推察した。全然失敗だ

ね、恐らく。えゝ？そらね！僕は賭をしても可いよ』と、彼は殆ど嬉しさに喘ぎながら叫んだ。『君等は何だらう、此廣間に並んで腰掛けながら、一晩中何か高遠な理窟を捏ねながら貴重な時間を浪費して仕舞ふんだらう……だが、御免なさい、御免なさい、そりやァ僕の知つたことぢやない。僕は昨日から何うせ斯んな詰らないことに終るだらうとは思つて居たよ。僕は只君を悞しませるために、君は僕を相手にさへして居たら退屈するやうなことはないといふことをお目に掛けるために、あの女を此處へ伴れて來たのだ。斯んな事に懸けちや、僕は百遍でも君のお役に立つよ。僕は始終他人を悦ばせることが所好だからね。で、君が最うあの女を要らないと云ふことなら――僕は這入つて來た時からそれを宛にして居たがね――それぢや……』

『ぢや、君は只僕の悞樂のためにあの女を伴れて來たのか。』

『何うして、其他に何が有るんだい？』

『僕に妻を殺させるためぢやないのか。』

『さァ――君があの女を殺したのぢやないよ。君も隨分悲劇的な人物だね！』

『同じ事だよ、君があの女を殺しても。』

『僕は殺しやしないさ　僕は斷乎として言ふがね、僕もあれには手を籍さなかつたよ……いやに君は僕を心配させるね……』

『先を言へ。君は今、君が最うあの女を要らないと云ふことなら、それぢや……と言ひ掛けたぢやないか。』

『それぢや僕に任せろと言ふんだよ、勿論。僕は直きにあの女をマヴーリキイ・ニコラーエギーチに押附けて見せるよ、尤も僕があの男を伴れて來て、垣根の傍に坐らせて置いた譯ぢやァないがね。そんな事を思つて臭れちや困るよ。僕は今あの男を恐れて居るのだ。あの男が拳銃でも持つて居たら、如何するんだい？僕も一つ持つて來たから恰度好いやうなものだがね。此處に有るよ』と、彼は衣嚢から一挺の拳銃を取出して見せた。が、直に又それを隱した。僕は只途中の用心に持つて來たのだ……だが、僕は萬事引受けて瞬く間に片附けて上げるよ。女の小さな胸は今でもマヴーリキイのために痛んで居るのだ……兎に角、左樣有るべきぢやないか……それに、僕は實際あの女のためにも悲しんで居るんだよ。僕があの女をマヴーリキイの許へ伴れて行つたら、あの女は直に又君のために胸を痛めるだらう、あの女はあの男に君のことを稱揚して、あの男の面前で、あの男を罵るだらうよ。君も女の心は知つて居る筈だ！や、君は又笑ふね！僕は君が左樣愉快相にして居るのを見ると嬉しくて堪らないよ。さ、行かうぢやないか。僕は直にマヴーリキイのことから持出すよ、それから彼奴等のことだが……あの殺された二人のことだよ……寧そ今は默つて居た方が可いかね。何れあの女も其間には聞くだらうからね。』

『あの女が何を聞くんです？誰が殺されたんです、貴方はマヴーリキイ・ニコラーエギーチに就いて何を話して被坐したの？』と、リザは不意に扉を開けながら言つた。

『おゝ！貴方は聽いて居ましたね？』

『貴方方は今マヴーリキイ・ニコラーエギーチに就いて何を話して被坐したの？あの人が殺されたのですか。』

『おゝ　それぢや、貴方は聞かなかつたのだね？御心配なさるな、マヴーリキイ・ニコラーエギーチは無事に生きて居ますよ。それに就いちや、今直き御滿足の出來るやうにしますよ。あの男は此處に、路傍の垣根に凭れて居ますからね……想ふに、あの男は一晩中彼處に立つて居たのでせうよ。外套からすッかりづぶ濕れに成つて居ました　私が此處へ駈けて來た時、あの男は私を見ましたよ。』

『そりや嘘です。貴方は「殺された」と仰有いました……誰が殺されたのです？』と、彼女は苦しげな不審の眼を向けながら言ひ張つた。

『えゝ、殺されたのは私の妻と、同胞のレビャードキンと、女中とですよ』と、スタフローギンは碇かりした聲音で言出した。

リザは眞蒼に成つて、ぶる〳〵顫え上つた。

『妙な殺人犯ですよ、リザベータ・ニコラーエヴナ。馬鹿な强盜でさァね』と、ピョートル・ステパーノヰーチは直に饒舌り續けた。

『只强盜が火事を利用したのでさ。其犯罪は囚人フェッカが遣附けたのですがね。何しろあの馬鹿のレビャードキンが誰にも彼にも金子を見せたのが惡いのですよ……私は其報道を持つて飛んで來た……眞個雷霆でも落ちたやうな氣がしましたよ。其話をした時は、スタフローギンもふん反つて仕舞ひました。二人は今此處で貴方に直ぐ話したものか如何かと相談して居た處ですよ。』

『ニコラーイ・フシェヴォロードギーチ、此人は眞實の事を言つてるのですか』と、リザは殆ど聞えないやうな聲で訊いた。

『いや、あれは嘘です。』

『嘘だ！』と、ピョートル・ステパーノヰーチは飛上つた。『そりやァ君、如何いふ積りだ？』

『あゝッ！私は狂人に成りさうだ』と、リザは叫んだ。

『兎に角、此男は今氣が違つて居るのだから、左樣思つて下さい』と、ピョートル・ステパーノヰーチは一生懸命大きな聲を出して叫んだ。『何にしても、此男の細君が殺されたのですからね。御覽なさい、眞蒼な顏をして居るでせう……何うして？此男は一晩中貴方と一緒に居た、一分間も貴方の側を離れなかつたぢや有りませんか、何うして此男を疑ふことが出來ます？』

『ニコラーイ・フシェヴォロードギーチ、私に言つて下さい、神樣の前へ出たやうに言つて下さい、貴方に罪が有るのかないのか。私は誓つて神樣の言葉と同じやうに貴方の言葉を信じますよ。そして、世界の際迄も貴方に隨いて行きますよ、えゝ、私は隨いて行きます。犬の樣に貴方の後を隨いて行きますよ。』

『何故君は何時迄も此女を苦しめるのだ、君は狂人だな』と、ピョートル・ステパーノヰーチは我を忘れて叫んだ。『リザベータ・ニコラーエヴナ、私は神に誓つて言ふ、貴方は私を粉末に舂き碎いて下すつても可い、が、此男に罪は有りませんよ。それ處か、此男はそれを聽いて、狼狽して氣が變に成つたのです、判つたでせう？何の點から見ても、此男に咎むべき處はない、何の點から見ても、心の中ですら！……悉皆强盜の仕業ですよ、えゝ、其强盜は一週間の間には大方捕まつて、笞で打たれますよ……悉皆囚人のフェッカの仕事でさァ、それからシュビーグリンの職工が二三人と、町の中ぢや皆左樣言つてますよ。だから私も左樣言ふんですがね。』

『左樣ですか。あの通りですか』と、リザは身體中顫へながら最後の宣告を待つて居た。

『私があの二人を殺したのぢやない、私はそれに反對した。が、私はあの二人が殺されるのを知つて居ながら、殺しに行く奴を停めなかつた。私を捨てゝ下さい、リザ』と、スタフローギンは漸つと言出した。そして、應接室の中へ這入つて行つた。

リザは兩手に顏を隱しながら、此家の外へ出た。ピョートル・ステパーノヰーチは女の後から駈出した。が、間

もなく急いで戻つて來て、應接室の中へ這入つた。

『ぢや、これが君の本音だね？本音だね　ぢや、君は如何成つても構はないのだね？』と、彼は口から泡を出して、何と言つて可いか解らないやうに、滅茶苦茶に吃きながら、怫然としてスタフローギンに飛び懸つて行つた。

スタフローギンは室の眞中に突立つたまゝ、一言も答へなかつた。彼は左の手に髪を攫んで、手頼ないやうな薄笑ひを漏らした。ピヨートル・ステパーノヰーチは相手の袖を攫んで烈しく引張つた。

『君は最うすッかり駄目に成つたのか、それであんな事を爲るんだね？君は僕等を皆密告して置いて、一人僧院か何かへ這入る積りなんだね……だが、君の命は僕が貰つたよ、何うせ死んでも可い命ぢや有らうがね！』

『あゝ！がや〳〵言つてたのは君か！』と、スタフローギンは漸つと相手に氣が附いたやうに言つた。『走れ』と、彼は不意に正氣に復つて言つた。『あの女の後を追掛けろ、馬車を命じろ、あの女を一人遣るな……走れ、走れ！何人も知らないやうに、あの女を自宅へ伴れて行つて呉れ……それからあの女が彼處へ行かないやうに……死骸の處へ……二人の死骸が有る處へ……無理にも馬車へ乘せて呉れ……アレキセイ・エゴーリイチ！アレキセイ・エゴーリイチ』

『待て、叫喚くな！今頃はあの女もマヴーリキイの腕に抱かれて居るよ……マヴーリキイはあの女を君の馬車へ乘せやアすまい……待て！馬車よりは最つと重要なことが有るんだよ。』

彼は再び拳銃を握つた。スタフローギンは凝乎と相手を見返した。

『好からう、俺を殺せ』と、彼は徐かに、殆ど仲直りでもしたやうに言つた。

『ふう。馬鹿な！人間も假面を被れば被られるものだね！』と、ピヨートル・ステパーノヰーチは憤怒に顫えながら言つた。『左樣だ、本當に君は殺されるのが至當だよ。あの女が君の面に唾を吐き懸けたのも無理はない！成程好い「魔法船」だね、君は。此の破れ船の、水の漏れるほろ船奴！……斯う迄言はれたら、些たァ君も勇氣を出さないかい！えゝ！何うせ彈丸に打たれて死にたいと言ふ位なら、何方にしても同じ事ぢやないか。』

スタフローギンは妙な微笑を泛べた。

『君がそんな道化者でなかつたら、僕は今此處で「諾」と言つたかも知れないよ……君がほんの少許でも知慧を有つて居たら……』

『僕は道化者だ。併し君迄、僕のより好き半身たる君迄道化者にはしたくはないよ。君に僕の心持が解るか。』

スタフローギンは理解した、恐らくは何人も理解しないのに一人理解した。例へば、シャトーフの如きも、スタフローギンからピヨートル・ステパーノヰーチが熱情を有つて居ると聞いた時は吃驚して仕舞つたものだ。

『今日は何處へでも可いから行け、明日に成つたら、恐らく僕は何物かを頭の中から絞り出すだらうよ。明日來い。』

『本當に可いね？可いね？』

『僕にや解らないよ……行つちまへ、何處へでも行つちまへ。』斯う言つて彼は室の外へ出て行つた。

『まア多分好い事に成るだらうよ』と、ピヨートル・ステパーノヰーチは拳銃を隱しながら、一人吃いた。

三

彼はリザベータ・ニコラーエヴナに追ひ着かうとして駈出した。彼女は未だ家からほんの五六歩しか離れて居な

かつた。アレキセイ・エゴーリイチに引留められたので、此老執事は燕尾服を着たまゝ、帽子も被らずに、一足後から隨いて行つた。彼は鄭寧に頭を下げながら、馬車の出來る迄待つて下さるやうに、懇々と彼女に賴んで居た。老人は愕いて、殆ど泣かぬばかりにして居た。

『さア彼方へ行け。御主人がお茶を持つて來いと仰有つてたよ。お前の外に何人も持つて行く者は居ないぢやないか』と、ピヨートル・ステパーノヰーチは老人を押除けながら言つた。それからリザの腕を取つた。

彼女は其手を振拂はうともしなかつた。が、彼女は自分が何をして居るかも知らないらしい。彼女は未だ失神して居た。

『第一貴方は道が違つて居ますよ』と、ピヨートル・ステパーノヰーチはべら〳〵言つた。『私達は此道を通つて歸るので、庭に沿うた道ぢやない。第二に、歩くことは到底不可能ですよ。二哩の餘も有るんですからね。それに貴方は召物もそれぢや不好ない。ほんの一秒間待つて頂けませんかねえ。私は馬車で來て、馬も彼處に待つてますよ。私は直にそれを喚んで來て、貴方を載せて、何人も見ないやうにお宅へ送り届けて上げますよ。』

『本當に親切だわねえ』と、リザは嫋やかに言つた。

『いや、決して。何人でも私の地位に立てば、此位の事は爲ますよ……』

リザは彼を振返つて、吃驚した。

『まア如何しませう！私は又爺さんが居るんだとばかし思つて居ましたよ。』

『まアお聽き爲さい。私は貴方が左樣穩やかにして居て下さるのを見ると、眞個嬉しう御座いますよ。あんな事は皆恐ろしくとぼけた因襲に過ぎないのですからね。で、左樣だとすれば、私があの爺さんに吩咐けて、直に馬車を持つて來るやうにしたのは、好くは有りませんか。えゝ、ほんの十分間位ですよ。さ、後へ戻つて、玄關で待つて居ませうよ。』

『私は先づ彼處へ行きたい……何處で二人は殺されたのですか。』

『おゝ！それから如何するんです？私が心配して居たのは其處ですよ……いゝえ、あんな奴等は、あの儘打捨つて置いた方が可い。貴方が御覽に成つても、何の役にも立ちませんよ。』

『私は知つて居る、あの家を知つて居る。』

『で？貴方が知つて被坐したら、如何なんです？さア、雨も降つてるし、霧も此通りですよ。私も飛んだ神聖な役目を引受けたものだ。まアお聽きなさい、リザベータ・ニコラーエヴナさん！此際貴方は二つの中の一つを擇ぶ外有りませんよ。私と一緒に馬車でお歸りに成るか――それなら此處に待つて居て下さい、一歩も前へ出ちや不可ませんよ。最う二十歩も行かうものなら、屹度マヴーリキイ・ニコラーエヰーチに出會しますからね。』

『マヴーリキイ・ニコラーエヰーチ！何處に　何處に居るんです？』

『えゝ、貴方が、あの男と一緒に歸らうと思召すなら、私は最少し貴方を伴れて行つて、あの男が居る處を教へて上げますよ。だが、私は今あの男に會ひたくは有りませんね。いや、眞平ですよ。』

『あの人が私を待つて居る。まア如何しませう！』と、彼女は不意に足を停めた。さつと血が彼女の顏に上つた。

『おゝ！一體如何すりや可いのだ。あの男が因襲に囚はれない男で有つて呉れたらね！ねえ、リザベータ・ニコラーエヴナさん、こりやア私の知つたことぢや有りませんよ。私は全然傍觀者だ。そりやア貴方も御存じでせう。だが、私は未だ貴方の爲好かれとばかし思つて居る……貴方の「魔法船」が失敗に終つたとすりや、それが叩き

壞す外に仕樣のないやうな腐つたぼろ船に過ぎなかつたとすりや……』

『あゝ立派ですよ、見事なものですよ』と、リザはヒステリイ性を帶んだ笑ひを漏らした。

『見事な――それで居て、貴方は泣いて居るのですね。貴方も確乎しなくちや不可ませんよ。女も有らゆる點に於て男に負けて居ちや不可ない。吾々の時代に於て、一度女が……ふう、馬鹿な』と、ピョートル・ステパーノギーチは最少しで唾を吐かうとした。『で、肝腎な點は何にも後悔する事はないと云ふことですよ。えゝ、何事も都合好く成りますとも。マヴーリキイ・ニコラーエギーチは……一言にして云へば、感情家ですよ、餘まり物は言ひませんけれどね。ですが、それが又好いのですよ。只あの男が因襲にさへ囚はれて居て呉れなかつたら……』

『えゝ、立派ですよ、見事ですよ』と、リザはいよ〳〵聲を出して笑つた。

『うむ、如何とも成れ……リザベータ・ニコラーエヴナさん』と、ピョートル・ステパーノギーチは不意に自負心を傷つけられたやうに佛として言つた。『私は只貴方のために此處に居るんですよ……私の知つた事ぢやないのだ……私は昨日貴方が御自分で望まれたからお手傳ひをした。今日は……うむ、此處からマヴーリキイ・ニコラーエギーチが見えますよ。彼處に立つて居るでせう。あの男の方からは見えないやうですね。ねえリザベータ・ニコラーエヴナ、貴方は「ボレンカ・ザックス」を讀んだことが有りますか。』

『それは何です？』

『小說の名ですよ、「ボレンカ・ザックス」といふのは。私は學生時代にそれを讀んだ……其中で、ザックスといふ或金持の役人が別莊で或男と密通をして居る細君を捕まへた……だが、そんな事は如何でも可い！屹度御覽なさい、マヴーリキイ・ニコラーエギーチは貴方が自宅へ着く前に、貴方に結婚を申込みますよ。あの男は未だ私

達に氣が附かないやうですね。』

『あゝ！何卒あの人に會はせて下さるな！』と、リザは不意に狂人のやうに成つて叫んだ。『彼方へ行きませう、彼方へ行きませう！林の中へ、野原の中へ！』

斯う言つて、彼女は後へ駈出した。

『リザベータ・ニコラーエヴナ、そりやア卑怯ですよ』と、ピョートル・ステパーノギーチは女の後を追掛けながら叫んだ。『何故貴方はあの男に會ひたくないのですか。それ處ちやない、貴方は眞當面にあの男の顏を見て遣らなくちや不可ませんよ、惡びれないで……若しあの事を氣に懸けて居られるのなら……あの處女の……そりや偏見ですよ、今時流行らない……ですが、貴方は何處へ行くのです？何處へ被往しやるのです？馬鹿だな、あの走ること！それよりもスタフローギンの邸へ歸つて、私の馬車に乘つて被往しやい……何處へ貴方は行くんです？そりや野原へ行く道ですよ。そら！ゆち轉やつた！』

彼は立停つた。リザは何處へ行くかも知らないで、小鳥のやうに飛んで行つた。ピョートル・ステパーノギーチは最う五十步許り後へ殘された。彼女は土壤に躓いて倒れた。同時に恐ろしい叫び聲が背後から聞えた。それは女の飛んで行つて倒れたのを見たマヴーリキイ・ニコラーエギーチが出したので、野原を横倒しに、女の傍へ駈け寄つた。其刹那、ピョートル・ステパーノギーチはひらりとスタフローギンの門の中へ身を躲した。やがて馬車に飛び乘つて駈出すので有る。

マヴーリキイ・ニコラーエギーチは早くも、漸つと立上つたリザの傍に恐ろしく、へどもどしながら立つて居た。彼は女の上へ俯向くやうにして、女の兩手を自分の兩手に合せて握つて居た。此會合の殆ど信じられないやうな周

園の情況が彼を顚倒させた。涙は彼の頰を傳つて流れた。彼は自分があれ程敬虔な念ひを寄せて居る女が　こんな時に、こんな天氣に、何一つ上に被らないで、前の日に着て居た華やかな衣裝も今は轉んだために、皺くちやの泥塗れにしながら、野原を横倒しに狂人のやうに成つて駈けて行くのを見た……彼は一語も發することが出來なかつた。只默つて着て居た外套を脱いで、顫える手先で女の肩に被けて遣つた。不意に彼は女が自分の手に唇を壓附けたのを感じて、思はず聲を立てた。

『リザ』と、彼は叫んだ。『私は何一つ取り處のない人間だが、何卒貴方の傍から追遣つては下さるな！』

『あゝ、いえ！急いで此處から伴れて退いて下さい。私を打捨つて下さるな！』と、彼女は相手の手を摑みながら、遮二無二引張つて行かうとした。『マヴーリキイ・ニコラーエヴヰーチ』と、彼女は不意に物に怖ぢでもするやうに聲を落した。『私は彼處で始終大膽に振舞つた。が、此處へ來て見ると死が恐ろしい。私は死にますよ、直き死にますよ。が、私は怖い、死ぬのが怖い……』と、彼女は相手の手を確乎握り締めながら囁いた。

『おゝ、何人か來て呉れたら』と、彼は絶望したやうに四邊を見廻した。『何人か通りがゝりの者でも有つたら！貴方は足を濡らして仕舞ひますよ、貴方は……病氣に成りますよ。』

『可いのよ、可いのよ』と、彼女は相手を安心させようとした。『最う可いのよ。貴方が居て下さりさへすりや、最う怖いことはない。さ、私の手を執つて、伴れて行つて下さい……何處へ行きませうね？自宅？いゝえ！私は第一に殺された人達を見に行きたいのよ。あの人の奥樣が殺されたと云ふんです、あの人は自分で其女を手に掛けたと言ふんですよ、ですが、それは眞實ぢやない、左樣ですね？私は此眼で殺された三人の人達を見たいのですよ……私のために殺された……私に對するあの人の愛が昨宵から急に醒めたのは其爲ですよ……私は自分の眼で見て、何も彼も知りたい。さ、急いで下さい、急いで下さい、私は其家を知つて居る、彼處に、彼處に火事が有つた……マヴーリキイ・ニコラーエヴヰーチ、ねえ貴方、決して私を、私の所業を宥して下さいますな！何故私を宥すんです？何故貴方は泣いてゐるんです？私を打つて、私を殺して下さい、此場で、此野原の中で、犬の樣に！』

『何人も貴方を裁くことは出來ない』と、マヴーリキイ・ニコラーエヴヰーチは確乎した聲で言つた。『神樣が宥して下さいませう。私は、私は特に貴方を裁く柄ぢやない。』

二人はやがて手を執り合つて、半ば氣でも狂つたやうに焦燥りながら、足早に歩き出した。二人は火事を目懸けて眞直に歩いて居た。マヴーリキイ・ニコラーエヴヰーチは尙荷馬車にでも逢ひはせぬかと望みを接いで居たが、何人も其道を通る者はなかつた。美しい、霧のやうな小雨が全景を包んで、有らゆる光、有らゆる物の色を呑み盡した。そして、有らゆる物を一色の煙つた、鉛のやうな、見分け難い團塊に變形した。夜が明けてから最う大分に成る。が、四邊は未だ夜のやうに見えた。不意に、此の冷たい煙立つた霧の中に、一つの奇體な物の形が二人の方へ遣つて來るのが見え出した。其場の光景を想像するに、私は、自分がリザベータ・ニコラーエヴナの地位に有つたとしても、私の眼を信じなかつたに相違ない。が、彼女は歡びの聲を擧げた。直に近づいて來る物の形を認めたのだ。それはステパーン・トラフィモーヴヰーチで有つた。『如何して彼が家を遁れ出したか、如何してそんな狂人染みた、實行されさうもない逃亡の計畫が物に成つたかなぞと云ふことは、後にして置く。私は只彼が其朝熱を病んで居た、が、そんな病氣も彼の出立を留めなかつたことを一言して置けば可い。彼は斷乎としてじめ〳〵した道の上を歩いて居た。彼が平常の無經驗と、實行的才能の缺乏とにも拘らず、力の及ぶだけ此計畫の準備をして居たことは、一見明瞭で有つた。彼は旅の仕度をして居た。卽ち扣子で締めた廣い鞣革の皮帶を着けた大外套を被つて、足

には洋袴の上から一對の深い長靴を履いて居た。恐らく彼はずつと前から斯んな風に見える旅人を想像して居た。で、皮帶も、驃騎兵の樣に尖の光つた深い長靴も――これを穿いては、彼は殆ど歩くことが出來ないのだ――豫め用意して置いたのだ。緣の廣い帽子と、頸に捲き着けた毛糸の襟卷と、右の手に杖、それから左の手に極めて小さな、碇かり包んだ囊とで、彼の仕度は出來上つて居た。其外彼は同じ右の手に大きな蝙蝠傘を持つて居た。此の三品は――蝙蝠傘と、杖と、囊と――最初の一哩持つて行くだけでも、却々退儀相に見えた、次の一哩は迚も持つて行かれ相になかつた。

『まア本當に貴方でしたか』と、リザは最初の本能的な歡びの發作が濟んだ後で、可憫しいやうな吃驚の眼もてまじ〳〵と相手を見詰めながら叫んだ。

『リザか』と、ステバーン・トラフィモーギーチも半ば正體なしに女の側へ駈寄りながら叫んだ。『Chère, chère (此處な子や、此處な子や)……お前さんも外へ出て居たのか……こんな霧の中に？あの火のとかりを御覽な。Vous êtes malheureuse, n'est-ce pas？(お前さんも不幸なんだね、えゝ？)いや解つた、解つた。何にも言つて呉れるな、又何にも訊いて下さるな。Nous sommes tous malheureux mais il faut les pardonner tours.(私達は皆不仕合せだ、が、あれ等を皆宥して遣らなければ不可ない。) Pardonnons, Lise, (宥して遣らうね、リザ、) 私達は永久に自由の身と成るんだよ。すッかり世の中と斷つて、完全に自由の身と成るんだよ。Il faut pardonner, pardonner, et pardonner! (宥して遣らなくちや不可ない、宥さなくちや、宥さなくちや！)』

『ですが、如何して貴方は斯んな處へお坐りに成るの？』

『私は世の中に別れを告げようと思ふんだよ、お前さんの一身の中に私の有らゆる過去を罩めて別れを告げようと思ふんだよ。』彼は泣いて女の兩手を執りながら、涙に汚れた自分の眼の處迄捧げた。『私は私の一生に美しかつた總ての者に對して跪くのだ。私はそれに接吻し、感謝の意を表する！今や私は自分の身を二つに裂いた。Vingt deux ans,(二十二年間)天翔けることばかり夢見て居た、狂人染みた半分は彼處に殘して置いて、此處には敗殘の老人が凍えて居るばかりだ。商賣の家の家庭教師、s'il existe pourtant ce marchand (それにしても、世にそんな商賣が有るならだね)……だが、如何してお前さんは斯んなに濡れそぼつて居るのだ　リザ』と、彼は自分の膝も濡れた土の爲に水が透るのを感じて、再び立上りながら叫んだ。『一體これは如何したのだ……お前さんはそんな衣裝を着て……徒跣足で、こんな野原で？……なに、泣いて居るのかい！Vous êtes malheureuse.(お前さんも不幸な人だ。)あゝ、私も聞いたことが有る……だが、お前さんは今何處から來たのだ？』彼は極端に不審さうな眼をしてマヴーリキイ・ニコラーエヴーチを眺め遣りながら、不安さうな態度で、いろんな質問を口早に繰返した。『Mais savez vous l'heure qu'il est？(だが、今は何時だらうね？)』

『ステバーン・トラフィモーギーチ、貴方はあの殺された人達のことをお聞きでしたか……あれは眞個ですか、眞實ですか。』

『彼奴等か！私は一晩中彼奴等の放つた火の手を眺めて居た。何うせ斯んな事を仕出來すに定つて居たのだよ……』と、彼の眼はぎらりと光つた。『私は狂妄から、惡い夢から遁れるのだ。惡い夢から遁れて、露西亞を求めに行くのだ。Existe-t-elle, la Russie？ Bah！ C'est vous, cher capitaine！(本當に存在するのか、露西亞は？ へえ！貴方でしたね、大尉さん！) 私は何時か大事件に際して、何處かで貴方に會ふだらうとは思つて居ましたよ……だが、此蝙蝠傘を持つて被坐しやい、又如何して貴方は徒跣足なぞで居るのです？まア如何でも可いから、此蝙蝠傘だけな

りと持つて被坐しやい、私は何處か其邊で馬車でも雇ふから構ひませんよ。私はスタシイ――ナスターシャのことですがね――彼女が左樣と知つたら、町中觸れ廻すだらうと思つて、故と徒跣足で出て來たのだ。私は出來るだけ覺られないやうにして、こつそり脫出して來たのですよ。私は知らないが、新聞ぢや頻に到る所人殺しや强盜が有るといふやうな噂をして居ますね。が、眞逆辻强盜も出なからうと思つて出て來たのですよ。Chère Lise,（ねえ、リザさんや、）お前さんは今誰かが殺されたと言つたやうだね。おゝ、mon Dieu!（神樣！）お前さんの顏色わい！』

『行きませう、行きませう！』と、リザは殆どヒステリイの發作にでも罹つたやうに、再びマヴーリキイ・ニコラーエギーチの手を引張りながら叫んだ。『一寸待つて下さい、ステパーン・トラフィモーギーチ！』と、彼女は不意に又彼の側に戻つて來た。『待つて被坐しやい、私は貴方に十字を切つて上げますよ。此際貴方を引留めて置いた方が可いかも知れませんけれどね、私は十字を切つて上げますよ。貴方も何卒「憐れな」リザの爲に祈つて下さい――えゝ、些とで可いのですよ、餘まり其事で心を苦しめては下さいますな。マヴーリキイ・ニコラーエギーチ、其嬰兒に蝙蝠傘を返して下さい。えゝ、其人に返すんですよ。それで宜しい、それで宜しい……さア、參りませう、參りませう！』

二人があの不吉な家へ辿り着いた時は、其家の周圍に集つた群集は皆既にスタフローギンのことを聞いて居た、彼の妻を殺すのが何れだけ彼の利益に成ると云ふことも。が、私は繰返して言ふ、群集の大多數は一言も發しないで、默つてそれを聽いて居た。昂奮したのは只醉拂ひか、例の手眞似の所好な大工なぞの二三人に過ぎなかつた。此大工が實際は溫和しい質の男だが、物に觸れて激し易い、一旦激したら何處迄も一直線に飛んで行くやうな男だとは、一般に知れ渡つて居た。私はリザとマヴーリキイ・ニコラーエギーチとが着いた時は知らなかつた。始めてリザが稍離れた群集の中に揉まれて居るのを見掛けた時は、ひやりとして化石して仕舞つた。マヴーリキイ・ニコラーエギーチの姿は直には眼に留まらなかつた。想ふに、或瞬間群集のために押隔てられて、二三歩後へ後れたものらしい。リザは病院から遁出した患者のやうに、半狂亂の體で、一切周りの者が眼に留まらないやうに群集を押分けて進んで行くので、直樣諸人の注意を惹いた。何處ともなく聲高な吃きが起つた、終ひにはわッわッと聲を揚げた。『あれがスタフローギンの女だよ』と、誰かが大きな聲で呶鳴つた。又他の側では、『殺したばかりぢや足りないと見えて、彼奴は死骸迄見に來たんだよ』と呶鳴る者が有つた。と見ると、一人の男が彼女の背後から頭の上へ逞しい腕を振上げて、不意に打卸した。リザは地面へ倒れた。私どもはマヴーリキイ・ニコラーエギーチが恐ろしい叫び聲を揚げながら、彼女を救ひに馳着けて、全力を罩めて、自分とリザとの間に立つた男を打倒すのを見掛けた。が、其瞬間、例の大工が背後から彼の兩手ぐるみに彼を抱き竦めた。それから數分間といふもの只わい〳〵と葬めくばかりで、何が何やら判らなかつた。私はリザが一旦起上つて、又毆り倒されたやうに想つた。不意に群集が兩方に別れて、リザの横に倒れて居る周りに小さな空地が殘された。マヴーリキイ・ニコラーエギーチは血に塗れながら狂人のやうに成つて、叫喚きながら、泣きながら、兩手を絞りながら、彼女を身體で蔽ふやうにして立つて居た。私は其後如何成つたか委しい事は記憶えて居ない。只警官が來てリザを攫んで行つたのを記憶えて居る。私は其後から馳けて行つた。彼女は未だ生きて居た、恐らく未だ正氣も有つた。大工と群集の中の他の三人とが捕まつた。三人は今なほ自分達が間違ひで捕縛されたことを主張して、飽迄あんな卑怯な行爲に加はつたことを否認して居る。恐らくそれが眞實でも有らう。大工が犯罪の證據は明白で有つた。彼は未だ如何いふ風にして如何したか明瞭に言ふことが出來ない程沒理性的に成つて居た。私も亦遠方からでは有るが、傍觀者の一人として、豫審に

於ける證人調べに喚び出された。私はそれが恐らくは惡感情に動かされたとは云へ、殆ど自分達が何を爲て居るか知らないやうな、酔拂ひの無責任な人達の行爲として、全然偶然の出來事で有ると公言した。私は今でも其意見で居る。

第四章　最後の決心

一

其朝いろんな人がピョートル・ステパーノヰーチを見掛けた。彼を見た人は皆彼が特に昂奮した狀態に有つたのを記憶えて居た。二時頃、彼は一日前に田舍の別莊から戻つて來たガヾーノフに會ひに行つた。ガヾーノフの家は訪問者に滿ちて、皆熱心に前の日の出來事を論じ合つて居た。ピョートル・ステパーノヰーチは何人よりも一番餘計に饒舌つて、衆皆に傾聽させた。此町ぢや、彼は始終『螺釘の緩んだ學生の饒舌家』のやうに思はれて居た。が、彼は今や主としてユーリヤ・ミハイローヴナのことを話した。一般に氣が立つて居る際、此問題は人の視聽を欹てさせずには置かない。最近彼女の親密な、深く信用された友達の一人として、彼は彼女に關して多くの新しい思ひも寄らないやうな秘事を許いて聽かせた。出任せに、從つて氣にも留めないで、彼は此町で名を知られた人々に關して彼女の云つた言葉を繰り返した。それに依つて又彼等の自尊心を刺戟した。彼は毛頭譎詐の念のない人が、自家の面目を思ふ心から、山のやうな誤解を一掃する必要に迫られたやうに、漠として取留めのない態度で、ほかりほかりとそんな事を漏らした。從つて、彼は何處で始めて何處で終つて可いか知らない程單純にも見えた。彼は又矢張氣に留めない態度で、ユーリヤ・ミハイローヴナがスタフローギンの秘密をすつかり知つて居た。彼女があの隱謀の底に有つたのだと云ふやうなことを口から滑らした。彼女は又彼自身をも瞞したと云ふのだ。と云ふのは、彼ピョートル・ステパーノヰーチも亦あの不幸なリザを戀して居た。處が、彼は自分であの女を馬車に乘せて、スタ

フローギンの許へ伴れて行き相にした程、好い樣に嘲されて居たと云ふのだ。『左樣さ、左樣さ、貴方方は笑ふなら勝手にお笑ひなさいだ。ですが、諸君、僕が若し知つて居たら、終ひに如何成るんだといふことを知つて居たら！』と、彼は言葉を結んだ。スタフローギンに關するさまゞ〳〵な昂奮した質問に對して、彼は打切棒に自分の說として は、レビャードキン兄妹の橫死は單に偶然の一致に過ぎない、レビャードキン自身金子を見せびらかしたのが惡いのだと答へた。彼は此點を殊に好く說明した。聽衆の一人は、彼が幾許胡魔化しても駄目だ、彼はユーリヤ・ミハイローヴナの許で飲んだり喰つたり、殆ど眠り込して居たのぢやないか、それを今に成つて、彼は第一番に彼女の性格に墨塗らうとして居る、そんな事をするのは決して彼の考へて居るやうに美しいことぢやない、寧ろ不間な遣方だと云ふやうなことを一言した。が、ピョートル・ステパーノヰーチは直樣それに對して反駁した。

『私は何も金子がないから彼處で飲んだり喰つたりした譯ぢやない、又私が彼處へ招待されたのは必ずしも私の責任ではない。私がそれに對して何れだけ感謝の意を致さなければ成らぬかは、何卒私一個の判斷に任せて置いて貰ひたい。』

一般に彼の與へた印象は彼に好都合なもので有つた。『あの男は何うも減茶だよ。勿論大した男でないには相違ないが、何うもユーリヤ・ミハイローヴナの失策に就いてはあの男に責任はないやうだね。それ處か、あの男は夫人の遣り過ぎるのを留めようとしたらしいぢやないか。』

二時頃不意に、今迄噂の中心に成つて居たスタフローギンが急に正午の汽車で彼得斯堡へ立つたといふ報道が着いた。これが又少からず人々の興味を惹いた、彼等の多くは皆顏を蹙めた。ピョートル・ステパーノヰーチは餘りの事に顏色を變へながら、『如何したんだ、何うして彼奴を立たせると云ふことが有るものか』と、妙に聲を擧げたと云ふことだ。彼は直樣ガヾーノフの家を辭した。が、なほ二三他の家にも顏を出した。

夕暮近く、彼はユーリヤ・ミハイローヴナの應接室へ通された。尤も、此度は夫人の方で絕對に彼に會ふことを拒んだから、其處へ通される迄には隨分骨を折つたらしい。私は三週間後、彼女が彼得斯堡へ向けて出發する前に、始めて此話を夫人自らの口から聞いた。彼女は別に詳しい話はしなかつた。が、見懲ひをしながら、『あの人は其時、口にも言はれない程私を威嚇しましたよ』とだけは言つた。想ふに、彼は只、若し彼女が『何んな事でも口にしたら、』連累者として、彼女を引張り出すと脅喝しながら、彼女の口を塞ぎに來たものらしい。斯うして彼女を怖けさせて置く必要は、當時に於ける彼の計畫から出たのだ。勿論、彼女はそんな事とは夢にも知らない。五日後に成つて、彼女は始めて何故彼があんなに彼女の緘默を疑つて居たか、彼女が憤怒の餘り更に爆發するのを、あんなに恐れて居たか推量することが出來た。

とゞぶり日が暮れてから、七時と八時との間に、五人組の會員は皆エンサイン・エルケルの下宿して居る町の外れの小さな歪んだ家に集まつた。此會合はピョートル・ステパーノヰーチ自身の手で定められたのだ。が、彼は容赦し難い程後れて、會員は皆彼のために一時間の餘も待たされた。此のエンサイン・エルケルといふのはヴィルギンスキイの家の會合に、一晩中手に鉛筆と備忘錄とを控へながら默つて居た若い士官で有つた。彼が此町へ來てから未だ永くは成らない。姉妹だといふ二人の婆さんと一緒に淋しい裏町に下宿して、間もなく此町を去らうとして居た。此家で會合すれば、何んな處でするよりも人の注意を惹く恐れはないのだ。此の不思議な少年は極端な沈默家として知られた。彼は周圍に飛離れた會話ばかり行はれる喧ましい仲間に加はりながら、一語も發しないで、而も子供らしい眼で話者の顏をぢろ〳〵見遣りながら、極端な注意を拂つて、十二晩も續けざまに耳を傾けて居るこ

とが出來た。彼の顏は極めて美はしく、何處か悧巧さうな容子をして居た。彼は五人組には屬しては居なかつた。で、何か純粹に實行的な、特殊の任務を帶びて居るやうに想はれて居た。が、今は彼が何一つそんなものを帶んで居なかつた、恐らくは彼自身も自分の地位を了解しないで居たことが知れた。彼は只近頃始めて會つたビョートル・ステパーノギーチに對して、英雄崇拜の念に充されて居たので有つた。想ふに、彼を使嗾して、一種のロマンティックな、社會主義的目的の口實の下に强盜の一隊を組織せよ、先づ其手始めとして、最初に會つた百姓を慘殺して金品を强奪せよと命ずるやうな、不法な怪物に出會つたとすれば、彼は直ちにそれに從つて、其通り實行したに相違ない。彼は病身な母親を有つて居て、乏しい給料の中から月々半額を送つて居た――あゝ、其の阿母さんは何れだけ此の憫れな亞麻色の小さな頭に接吻して、顧えながら、其上に神の祝福を祈つたことで有らうぞ！私は彼と彼の運命に對して悲哀に堪へられないから、斯んな事迄書いて置くのだ。

『吾々の仲間』は皆昂奮して居た。前の夜の出來事は彼等に非常な印象を與へた。何れも面喰つたものらしい。彼等自ら系統的に、又熱心に分擔して居たあの單純な席上の混亂が、あんな事に成らうとは思ひも寄らなかつたのだ、其夜の火事と云ひ、レビャードキン一家の屠殺と云ひ、リザに對する群集の野蠻な仕打ちと云ひ、皆彼等の番組の中に豫想されなかつた驚異の連系で有る。彼等は皆それ等の勃發を導いた手を專制で有る、表裏反覆で有るとして非難した。實際、彼等はビョートル・ステパーノギーチを待つて居る間、互に相動かして、再び斷然とした說明を彼に求めよう、若し又彼が前と同じく說明を回避したら、五人組を解散して、新に自分達が主唱者と成つて平等と公正と、四海同胞主義との上に、『理想の宣傳を目的』とする秘密結社を組織することに決定した。リーブティンと、ジガーロフと、農民社會の權威とは此計畫を支持した。リャムジンは贊成したやうな顏をしながら何にも言はなかつた。ヴィルギンスキイは稍躊躇して、先づビョートル・ステパーノギーチの辯解を聽くことには成つた。が、彼は未だ遣つて來なかつた。そんな偶然な事情が更に火焰の上に薪を添へた。エルケルは絶對に沈默して、紅茶を命ずる外何にも爲なかつた。湯沸器もなければ、召使の出入も許さないので、彼は女主人の許から一々盆に載せて茶碗を運んで來た。

ビョートル・ステパーノギーチは八時半過ぎに成つても未だ遣つて來なかつた。が、急ぎ足に這入つて來ると、彼は直樣長椅子の前の圓卓子へ近づいた。其周りには仲間が腰掛けて居た。彼は帽子を長椅子の上へ投り出しながら、紅茶は謝絶つた。彼は慣つたやうな、氣艱しい顏をして、横柄に四邊を見廻した。直に衆皆の顏から彼等が『反抗的』に成つて居ることを氣附いたらしい。

『私が口を開く前に、諸君は何か私に隱して居られるやうだね。それから先づ言出して下さい。』

リーブティンは『總ての名に於て』口を開いた。そして、憤怒に聲を顫はせながら、『若し萬事が目下の如くにして進行するものなら、彼等は矢張肝腦地に塗れる外ない』と言ひ張つた。いや、彼等は肝腦地に塗れることを恐れるものでない、皆充分に覺悟はして居るのだ。但しそれは共通の主義のためでなければ成らない！（一同がやゝ〳〵と動搖めいて、贊同の意。）だから、彼は何事も自分達が前以て知り得るやうに、一層胸襟を開いて談じて呉れないぢや不可ない、『でなければ、此末如何成らうと云ふのだ？』（再び動搖めいて、中には咽喉を鳴らす者も有つた。）『下の如く行動するのは汚辱でも有れば危險でも有る。『吾々は吾々が恐れて居るから斯く言ふのではない、併し一人が働いて、他の者は只一身を質に入れて置くだけなら、其一人が失敗すれば他の者も同時に失はれますよ。』（『然り、然り』の聲。一同贊成。）

『何を馬鹿な、君等は如何して貰ひたいと云ふのだ？』

『共通の目的と、些々たるスタフローギン君の隱謀との間に、何んな關係が有るか』と、リーブティンはむらむらと煮え返りながら叫んだ。『彼スタフローギンが中央の幹部と何んな不思議な關係が有るにもせよ――左樣云ふ傳說的な幹部が實際存在するものとしてだね――それは僕等の知つたことぢやない。然るに一方では、あんな虐殺が行はれて、巡査は活動し出した。あの糸を手繰つて行けば、何處からそれが出て居ると云ふことも判りますよ。』

『スタフローギンと君とが捕まへられりや、僕等も捕まへられるんだよ』と、農民社會の權威が附け加へた。

『而も共通の目的には何の益する處なくして』と、ヴィルギンスキイはさも落膽したやうに言葉を結んだ。

『何を馬鹿な！人殺しは偶然の犯罪だよ、あれはフェッカが强盜の目的で殺したのだ。』

『ふむ！だが、奇體な一致だね』と、リーブティンは毎も慣つた時にするやうに、首を兩肩の間に引込ませながら言つた。

『で、若し君がすッかり知りたいと云ふことなら、あれは君のお蔭だよ。』

『僕のお蔭だと？』

『第一に君、リーブティン君はだね、君自身此隱謀に加擔したのだよ。第二に、これが主要な點だがね、君はレビャードキンを送り出すやうに命ぜられた、又左樣する金子も受取つた。で、君は何を爲たかい。若し君があの男を送り出したら、何事も起りはしなかつたらうよ。』

『だが、あの男を引留めて詩を朗讀させたら好からうなぞと云ふ考へを暗示したのは、君、君自身ぢやなかつたのか。』

『考へは命令とは違ふよ。命令はあの男を送り出すことに有つたのだ。』

『命令！こりや面白い言葉だね……それ處か、君はあの男の出立を延ばせと命令したんだよ。』

『君は思違ひをしたのだ。そんな事は君の愚と自分勝手とを表明するに過ぎない。人殺しはフェッカの仕業だ。彼奴は强盜の目的で人手を籍らずに實行したんだよ。君は世間の噂を聞いて、それを信じたのだ。君は脅かされたんだね。スタフローギンはそんな馬鹿ぢやない。其證據に、あの男は今日の十二時に副知事と會見をした後で此町を立去つたんぢやないか。若し少しでも疑はしいやうなことが有つたら、眞晝間あの男を彼得斯堡へ立たせて置く筈がないよ。』

『だが、僕等はスタフローギン君自身人殺しをしたと言つて居るんぢやァない』と、リーブティンはいよ〳〵憤怒に驅られながら、無作法に返答した。『あの男はこれに就いちや僕と同じやうに何にも知らないのかも知れない。僕はお雜炊の中の羊肉のやうに此犯罪の中へ捲込まれたけれど、僕が何にも知らずに居たと云ふことは君自身熟く知つてる筈だよ。』

『ぢや、君は誰に罪が有ると言ふのだ？』と、ピョートル・ステパーノヰーチは險しい顏をして相手を見遣つた。

『町に火を放けることを必要と感じて居る人達ですよ。』

『君は自分で自分の責任を免れようと焦燥つて、却て惡くしたね。が、兎に角これを讀んで、他の人達にも廻して吳れないか。單に參考のためにだよ。』

彼は衣囊からレムブケに宛てたレビャードキンの匿名の手紙を取出して、それをリーブティンに渡した。リーブティンはそれを讀んで、明々と驚いたやうに見えた。そして、首を傾けながら隣の席へ廻した。手紙は手早く仲間

を一巡した。

『これは實際レビャードキンの手蹟だらうね？』と、ジガーロフが言つた。

『左樣だ』と、リーブティンと、農民の權威なるトルカーチェンコとが答へた。

『僕は、君等が死んだレビャードキンを大分氣の毒相に思つて居るやうだから、單に參考のためにこれを見せたんだよ』と、ピョートル・ステパーノヰーチは手紙を再び衣嚢へ入れながら繰返した。『諸君、これで見ると、あの風來者のフエツカが偶然にも僕等を危險な人物の手から救つて呉れたことに成つたやうだね。いや、左樣いふ事は希に有るもんだよ。參考にすべきぢやないか、えゝ？』

仲間は互に眴せを交はした。

『で、諸君、今度は僕が質問をする番だ』と、ピョートル・ステパーノヰーチは急に威嚴を繕ひながら言つた。

『第一に訊きたいのは、如何云ふ譯で君等は許可もなしに町へ火を放けたのかね。』

『こりやア如何したのだ！僕等が、僕等が町へ火を放けた　そりやア他人に罪を被せると云ふものだ！』と、一同聲を揃へて叫んだ。

『僕も君等が遣り過ぎたのだと云ふことは好く承知して居る』と、ピョートル・ステパーノヰーチは頑固に言張つた。『が、これはユーリヤ・ミハイローヴナを少々調戯つて遣るやうな問題ではない。諸君、僕は君等が馬鹿な眞似をして自ら招いた危險の重大な意味を說明しようと思つて、わざ〳〵此處へ集まつて貰つたのだよ。眞個君等だけが危殆に陷る譯ぢやないからね。』

『一寸待つて下さい、僕等はそれ處ぢやない、今も今とて、貴方が一言會員に相談もなく、こんな重大な、同時に奇態な處置を取ることに依つて示された、專制と不公平との如何に大いなるもので有るかを、貴方に指摘しようと思つて居た處なんですよ』と、それ迄黙つて居たヴィルギンスキイが、眞赧に成つて抗議した。

『ぢや、君等はそれを否認するのだね？だが、僕は君等が此町へ火を放けた、君等だ、君等を外にして何人でもないと云ふことを主張するよ。諸君、嘘を言つちや不可ない。僕はちやんと證據を握つて居る。君等は餘まり遽て共通の主義を危險に曝したのだ。君等は只無限に廣い網の中の一つの結目に過ぎない、君等の義務は中央の幹部に對する盲從に有るのだ。然るに君等の中の三人が、そんな訓令は些ともないのに、シュビーグリンの職工を使嗾して此町に火を放けた、それであんな火事が起つたのだ。』

『何の三人だ？吾々の中の何の三人だ？』

『一昨日のことだ。あの夜の三時頃に、トルカーチェンコ、君は「勿忘草」（居酒屋の名）でフォムカ・ザビーロフを使嗾して居たらう。』

『何だつて！』と、後者は思はず飛上りながら叫んだ。『僕は彼奴にや殆ど物も言はなかつた位だ。縱しんば言つたにもせよ、別に目的が有つて言つた譯ぢやない、只彼奴が其朝役人に打たれたから左樣言つたんだよ。それに僕はそんな事直に忘れて仕舞つた、彼奴も又醉拂つて居たのだ。君が今言出さなけりや、僕は二度と再びそんな事想ひ出しもしないのだよ。あんな一言から火事なぞ起つて耐るもんぢやアない。』

『君は小さな火の粉から火藥庫が爆發したと聞いて吃驚するやうな人間なんだね。』

『僕はそれに隅の方で彼奴の耳に口を寄せて囁いたのだ。如何して君はそれを聞いたのだい？』

トルカーチェンコは不意に想出した。

『僕は彼處の食卓の下に隠れて居たんだよ。諸君、そんなに騒ぎたまふな、僕は君等が驚ることは何でも知つて居るんだよ。君は皮肉な笑ひ方をするね、リーブティン君？だが、一例を擧げて言へば、僕は三日前の夜半に君が細君を黒痣の出來る程毆つたり抓つたりしたことも知つて居るんだよ。えゝ、君等が寢室で床に就かうとして居る時にだね。』

リーブティンは開いた口が塞がらなかつた。彼は眞蒼に成つた。(後に成つて、彼はリーブティンの召使のアガーフィヤの口から、リーブティンの此の功名談を聞いたと云ふことが判つた。彼は豫々金子を拂つて、此女中を間諜にして置いたので有る。が、それは只後に成つて知れたのだ。)

『僕は一つの事實を述べても可いでせうか』と、ジガーロフは立上りながら言つた。

『お述べなさい。』

ジガーロフは再び下に坐つて、身體を引緊めた。

『僕の了解した處に依れば――又左樣了解せずには置かれないのだ――貴方は最初に、又二度目にも、非常な雄辯で以て、同時に又理論的に、無限に廣い網の結び目で蔽はれた露西亞の姿を描いて見せた。又それ等の實行的各團體は無限に新入者を加へて分派しながら、系統的な非議に依つて地方官憲の權力を失墜させたり、村々を混亂に陥らせたり、有らゆる物に對する不信とより好き何者かに對する憧憬と共に、譏辯と誹謗とを擴めたりして、最後に上乘の國民的手段たる放火に依つて、一瞬間に國家を絶望の狀態に陥らせようと云ふのだ。僕は正確に記憶して置いたが、これが貴方の言葉ではなかつたか。貴方が中央に於ける幹部の代表者として吾々に與へた番組ではなかつたか――尤も、其幹部なるものは今日迄全然吾々に知られない、宛然神話のやうなものだけれど？』

『其通りだよ。只君は少し長たらしく言つたばかりだ。』

『總ての人間は自分自身の辯に從つて發言する權利を有つて居る。既に全露西亞を蔽うて居る廣濶な網の結目が今や七百を以て數へられることを吾々に言つて聞かせ、若し各人が充分に各自の仕事を遣り果すれば、全露西亞は一瞬間に、一號令の下に顚覆するなぞと云ふ理論を陳述して置きながら……』

『あゝ、最う澤山だ、僕は君の言ふことなぞ聽いちや居られないんだよ』と、ピョートル・ステパーノヰーチは椅子の中に身體を捩りながら叫んだ。

『宜しい、僕も簡單に切上げて、只これだけの事を訊くに止めて置きませう。若し吾々が混亂した光景を見たとすれば、人民の不平を見たとすれば、地方政廳の崩落を見もし、又手傳ひもしたとすれば、最後に、吾々は此眼で町の火事を見たとすれば――君は何が間違つて居ると言ふのだ？君の番組通りぢやないか。君は何を以て僕等を責めようと言ふのだ？』

『君等自身の發意から行動するのが惡いと言ふのだ！』と、ピョートル・ステパーノヰーチは怫然として叫んだ。『僕が此處に居る間は、君等は僕の許可を俟たないで行動することは許されないのだよ。最う澤山だ。僕等は發覺の前夜に有るんだ、恐らく明日、或は今夜にも君等は捕縛されるだらうよ。これで解つたらう！僕は確かな筋合から聞き出して居るんだよ。』

これを聞くと、一同口あんぐりとして驚愕の眼を睜つた。

『君等は嘗に放火の煽動者として捕縛せられるばかりでない、五人組として捕縛されるんだよ。反逆者は網の全秘密を握つて居る。だから言はないこツちやない、君等は餘まりぢたばた仕過ぎたんだよ。』

『屹度スタフローギンだ』と、リーブティンが叫んだ。

『なに……如何してスタフローギンだ？』と、ピョートル・ステパーノギーチは不意にたぢ〳〵としたやうに見えた。『そんな事が有るものか』と、彼は直に又身を引緊めながら叫んだ。『そりやアシャトーフだよ。君等は皆シャトーフが一時結社の一人で有つたことを知つて居るだらうね。で、眞實の處を言ふとね、僕はあの男に疑はれないやうな人間を使つて、あの男の行動を見張らせて置いたが、驚いたことに、あの男は此網の組織をすッかり知つて居るんだよ……實際、何も彼も。以前自分が屬して居たと云ふ責を免れるために、あの男は衆皆を密告しようと云ふんだね。あの男も今日迄は矢張跳躍して居た。それだから、僕も宥して置いたんだがね。君等の放火があの男を決心させたんだよ。令やあの男はすつかり顯え上つたから、最う跳躍はして居ないよ。明日にも僕等は放火犯並びに國事犯として捕縛されるだらうよ。』

『そりやア眞實か。如何してシャトーフが知つたのだ？』

一同の昂奮は筆紙に盡し難いものが有つた。

『そりやア　盡く眞實だよ。僕は此處でそれを聞出した源を打明ける權利がない、又如何して發見したといふことも言はれない。だが、これだけの事は君等のために僕の力で出來るんだね。或一人を通じて、毫もシャトーフに疑はれないで、あの男に密告を延ばさせるやうに仕向けるのだ。尤も、二十四時間以上は迚も駄目だよ。』

一同默つて居た。

『僕等は實際彼奴を遣つ附けちまふ外ないね！』と、トルカーチェンコが第一番に口を開いた。

『ずつと前に左樣爲なくちや成らぬ處だよ』と、リャムジンは拳骨で一つ卓子を打しながら叫んだ。

『だが、如何して遣つ附けるんだね？』と、リーブティンが呟いた。

ピョートル・ステパーノギーチは直に其質問に應じて、自分の計畫を打明けた。其計畫と云ふのは、次の日の日暮にシャトーフを或懸け離れた場所へ引張り出して、其處に埋めて有る、あの男が保管中の秘密印刷機を此方へ渡させた上、『萬事を片附け』て仕舞はうと云ふのだ。彼は又此處には省略して置くが、いろんな重要な點を委細に語つて、シャトーフの中央幹部に對する曖昧な態度を委曲說明した。それは讀者の既に知る處で有る。

『そりや大層旨い話だが』と、リーブティンは決心し兼ねたやうに言出した。『これが又同じ種類の冒險なんだからね……又騷動を惹起しやすまいかと思はれるんだよ。』

『成程』と、ピョートル・ステパーノギーチも首肯いた。『だが、其處ンところは僕が旨くして置いたよ。畢竟完全に嫌疑を避ける手段が有るんだね。』

斯う言つて、彼は又事細かにキーリロフのこと、彼が自殺しようと思つて居ること、並びに此方から合圖をする迄待つて居て、何んな事でも此方の吩咐けることなら身に引請けた遺書を殘して置くと約束したことを逐一物語つた。（これに就いても、讀者は既に知つて居る。）

『あの男が自殺しようと云ふ決心――哲學的な、寧ろ狂人の決心と言つた方が可いかね――其決心は彼處に知られた』と、ピョートル・ステパーノギーチは說明を續けた。『彼處では糸一筋、塵一粒でも見遺されることはないからね。何んな事でも共通の主義の用に立てられるんだよ。それが何んな役に立つかも知れないと云ふことを見越して、又彼の決心が極めて眞面目なもので有ると云ふことを調べた上、幹部ではあの男に露西亞へ歸る旅費を支給して、（あの男は何かの理由で露西亞で死なうと決めて居るんだね、）あの男の實行すべき任務を課した、（あの男は又そ

れを約束したんだよ、)其上になは、前にも言つた通り、此方から命令した時に始めて自殺を實行する約束をちやんと取つて置いたんだよ。あの男は何も彼も約束した。此處に注意すべきは、あの男が特殊な條件の下に結社に屬して居ること、並びに一生懸命結社のために盡さうと思つて居ることなんだね。それ以上は此處で言ふことが出來ないよ。明日、シャトーフの一件が濟んだ後で、僕はあの男がシャトーフの死に關して責を負ふものだと云ふ書附をあの男に口授して造らせるよ。左樣して置きや信じない譯には行かないやね。あの二人は友達同志で、亞米利加へも一緒に旅行した、彼處で二人は喧嘩した。そんな事は皆手紙の中で說明して置くんだよ……それから……それからだね、都合に依つては、最つといろんな事をキーリロフに口授しても可いんだよ――例へば、檄文のことだの、火事のことだのだね。だが、それに就いちや最一度好く考へて見ようよ、君達は別に心配することはない、あの男は何等の偏見を有たない男だからね。何でも署名するよ。』

衆皆の顏には疑惑の色が見えた。餘り奇怪な話のやうに聞えたのだ。だが、彼等もキーリロフのことは多少とも聞いて居た。中にも、リープティンは一番能く知つて居た。

『あの男は氣が變つて應じないかも知れないね』と、ジガーロフが言つた。『兎に角あの男は狂人だよ、從つてそんな男の上に多く期待することは出來ないね。』

『諸君、心配したまふな、あの男は屹度應ずるよ』と、ピョートル・ステパーノヰーチは相手の言葉を引取つて言つた。『僕は前の日に通知すると云ふ約束があの男にして有るのだ、卽ち今日だね。僕はリープティン君を僕と一緒に行つて貰つて、一度あの男を見て確めて貰ひたいと思ふんだよ。諸君、リープティン君が歸つて來て――そりやァ今日中にでも可いんだがね――僕の言ふことが眞實か如何か、諸君に報告するだらうよ。だがね』と、彼は不意に自分が斯んな奴等を說得するために、時間を潰すのは餘りに相手を重く見たものだと感じでもしたやうに、急に苛々しながら口籠つた。『だがね、そりやァ君等の所好なやうにしたまへ。君等があれを遣らないと決定すりや、結社は破れたのだ――尤も、そりや單に君等の不柔順と、反逆とに依つてだよ。左樣すりや、僕等は今から名自獨立したのだ。だが、左樣成つたが最後、シャトーフの反覆とそれが齎す不快な結果を外にして、君等は他に最う一つ結社を形造つた最初に充分警戒して置いた多少の不快をも君等自身の上に招くことに成るんだよ。僕一個人としては、多く君等を恐れて居ない、諸君……僕が餘り多く君等の中へ捲込まれて居ると想つちや不可ないよ……だが、そりや如何でも可いのだ。』

『左樣だ、僕等は遣ると決心したよ』と、リープティンが先づ言出した。

『何うも外に仕樣がない樣だね』と、トルカーチェンコが呟いた。『で、若しリープティンがキーリロフのことを確めて呉れさへすりや、左樣すりや……』

『僕はそれに反對だ。僕は全精神、全力を擧げてそんな血腥さい決議に反對する』と、ヴィルギンスキイは立上りながら言つた。

『だが？』と、ピョートル・ステパーノヰーチが訊いた。

『だが何だ？』

『君はだがと言つたよ……僕は待つて居るのだ。』

『僕はだがなぞと言つた覺えはない……只斯う言ふ積りだつたよ、君達がそれを遣ると決定するなら、左樣すりや……』